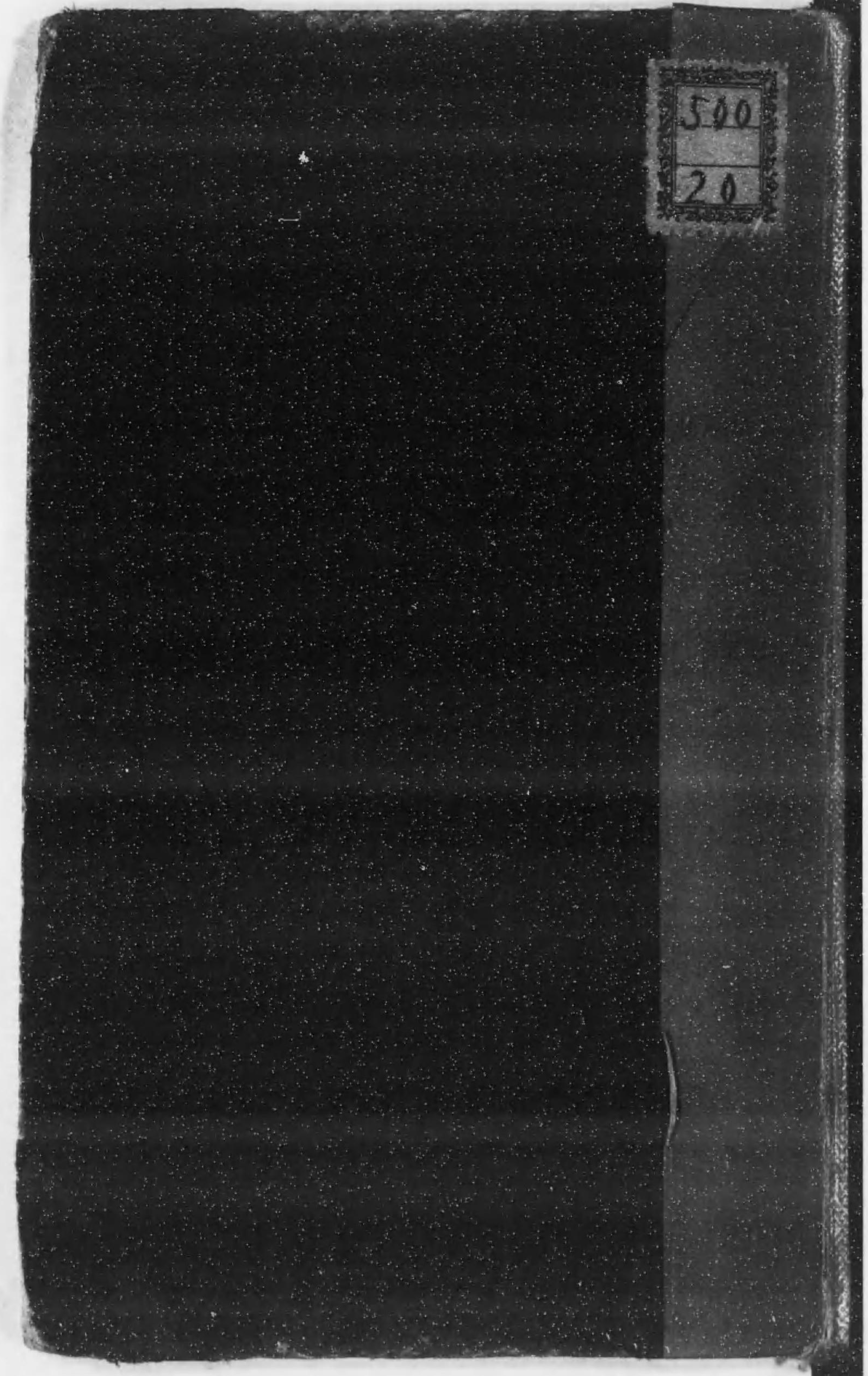

始

24 11. 8
6.11.24

500-20

ツルゲーニエフ全集

—第二巻—

父と子

その前夜

初戀

大正
11. 6. 21
内交

冬夏社藏版

目次

ツルゲーニエフ全集第二巻

父と子……………………一―三七九
その前夜……………………一―二九七
初戀……………………一―一四八

父と子

小野浩譯

「うむ、ピオートル、まだ見えないかな？」と、千八百五十九年の五月二十日、S――にある驛の低い階段へ、四十を少し越した、汚い外套に碁盤縞のズボンを着け、帽子も冠らないで出て來た一紳士が訊いた。彼は顎に白い羽毛のやうな髯を生やした、小さくどんよりとして眼の、肥つた若い下男に話し掛けてゐたのだつた。

何から何までが、――土耳古玉の耳飾り、油で撫でつけた條紋のある髪、そして身動きのしなやかな狀など、――その悉くが新しい進歩した時代の人間であることを示してゐる、その下男は、往來を氣の拔けた風で眺めてから答へた。――

「へえ、お見えになりません。」

「見えない？」と主人は繰り返して訊いた。

「へえ、旦那樣。」

下男は同じことを答へた。

主人は溜息を吐いて、小さな腰掛に腰を卸した。彼が足を組みながら思案深さうにあたりを見廻し

てゐる間に、私はこの人間を讀者へ紹介することとしよう。

彼の名前はニコライ・ペトロウイッチ・キルサノフと言つた。彼はこの驛から十二哩離れて、二百人の奴隷を使つてゐる、つまり、彼の言葉に從つて言へば、――所有地の分配を百姓たちと濟まして、耕地を開拓してから以後――殆んど五千エークルからの地所の立派な資産を持つてゐた。彼の父は千八百十二年に勤務してゐた陸軍の將軍で、粗野な教育の餘りない、然し氣質の惡くない、典型的露西亞人であつた。そして生涯を馬上に過し、最初は旅團長、それから師團長となつて、何時も田舍を住居としてゐたが、その地位のお蔭で、田舍では極めて重要な人物となつてゐた。ニコライ・ペトロウイッチは、兄のパヴエルと同じく南部露西亞で生れた。この兄のことは後にもつと詳しく書くことにしよう。彼、ニコライ・ペトロウイッチは十四歲になるまで、家庭にあつて、安つぽい家庭敎師や、氣輕な、けれどもお上手者の副官や、お極まりの軍隊附の連中に取り圍まれて敎育された。彼の母はコリアジン家の一人で、娘の頃はアガーテと呼ばれてゐたが、將軍夫人となつてからはアガトクレア・クズミニシナ・キルサノフと呼ばれて、夫の勤務の義務だの威嚴だのを充分に引き受けるやう單な人の妻の一人だつた。彼女は綺麗な帽子と、さらさらと絹擦れのする服とを着け、敎會では第一に十字架に進み寄り、大きな聲でいろんなお喋りをし、朝はその手に子供たちを接吻させ、夜は彼等のためにお

所りをした。――實際彼女は人生から出來るだけのあらゆる物を得たのだつた。ニコライ・ペトロウイッチは陸軍の息子として、――尤も彼は意氣地なしと呼ばれるのが相應しい位に勇氣といふ點では劣つてゐたが、――兄のパヴェル同樣、軍隊に這入るやうに仕向けられてゐた。けれども任命が屆いたその日に彼は足を挫いて、二ケ月の間病床に暮した擧句、生涯輕い跛者になつてしまつた。彼の父は惡い仕事のやうな具合に彼を諦めて、文官にさせることにした。彼はニコライが十八になると直ぐにペテルスブルグに連れて行つて、大學に入學させた。丁度その時兄は近衞士官となつたので、若い二人は、母方の從兄で、いい位置の官吏であるイリア・コリアジンの、のん氣な監督下に、部屋を並べて暮すことになつた。そこで父は師團と妻との田舍へ歸つた。そして時たまに亂暴な書記の手で擲り書きした、黑つぽい大形の手紙を寄越した。さうした手紙の一番下には「陸軍少將ピオートル・キルサノフ」といふ華押が丁寧に書いてあつた。千八百三十五年にニコイラ・ペトロウイッチは大學を卒業した。そして同じ年にキルサノフ將軍は陰鬱の不首尾から退役將校名簿の中に編入されて、妻と一緒にペテルスブルグに住まうとして來た。彼はタフリチエスキイ・ガーデンに家を持つことになつてゐて、イギリス倶樂部に加入してゐたが、不意に卒中で亡くなつてしまつた。アガトクレア・クズミニシナも間もなく後を追つた。彼女は都會の單調な生活に自分を慣らすことが出來なかつた。軍隊から

離れた生活の倦怠のために、彼女は身を滅ぼしたのだつた。その間に、ニコライ・ペトロウイッチは、既に兩親の存命中に、而も少からぬ悲しみを彼等に味はせて、宿の主人である安官吏のプレポロフエンスキイの娘と戀に落ちてゐた。娘は美しくて、「進歩した」少女と呼ばれるやうな女で、雜誌の「科學」欄に載つてゐる眞面目な記事を讀むのが癖だつた。彼は喪が明けると直ぐに彼女と結婚して、父のお蔭で得られた官吏を捨て、彼のマーシヤと共に幸福になり切つて、初めはリエスニイ學院近所の田舍別莊に暮し、後には町に出て、綺麗な階段と風通しのいい客間のある、美しい、小ぢんまりした家に暮した。それから更に田舍に行き、今度は其處を一生の住居と極めて、間もなくアーカデイといふ息子が生れたのだつた。若い夫婦は極めて幸福に平和に暮した。彼等は殆んど傍を離れることもなく、一緒に本を讀んだり、一緒にピアノに倚つて歌つたり二聲曲を彈いたりした。彼女は花を植ゑたり鳥小屋の心配をしたり、彼は時に獵に行つたり所有地のことで忙がしく働いたりした。その間にアーカデイも同じ幸福と平和との內に段々大きくなつた。かうして十年の歲月は夢のやうに過ぎ去つた。千八百四十七年にキルサノフの妻は死んだ。彼はこの不意打ちに壓倒されるばかりで數週間の內に髮の毛が白くなつてしまつた。彼は自分の氣分を代へることが出來るならば、外國に出掛けるつもりでゐた……。然し千八百四十八年が來た。彼は本意なくも田舍に歸つて、稍々長い間を何もしないで

暮して後、所有地の管理を改良することに興味を覺え始めた。千八百五十五年に彼は息子を大學に入れた。彼は息子と一緒にペテルスブルグに三冬を過して、何處にも行かうとはせず、アーカアデイの若い友だちと懇意にならうと努めてゐた。去年の冬は行くことが出來なかつたので、今この千八百五十九年の五月に、既に白髮ばかりになつた、しかし逞ましい、稍々腰の曲つた彼は、昔彼自身が得たことのある學位を丁度得て歸つて來る息子を待ち受けてゐるのだつた。

下男は遠慮する氣持からか、又多分主人の眼の屆く處にゐるのが厭なのだらう、門の方に行つて煙草を喫つてゐた。ニコライ・ペトロウイッチは頭を垂れて、崩れた階段を瞶め出した。大きな斑のある鷄が、その黄色い大きな脚でしつかりと土を踏みながら、ばつぼつと彼の方に歩いて來た。泥にまみれた猫が鐵柵へ身體をからませながら、よそよそしい眼付をして彼を眺めた。太陽は燃えてゐた。驛の半は暗い通路からは燒けた黑麪麭の匂が漂つて來た。ニコライ・ペトロウイッチは夢想し出した。

「息子……卒業生……アーカシア……」といふ思ひが絶えず頭の中に渦を捲いた。何か他のことを考へようとしたが、矢張り同じ思ひが甦つて來る。彼は亡くなつた妻を想ひ出した。……

「彼女はあれを見ずに死んだんだ！」

彼は悲しさうに呟いた。肥つた暗綠色の鳩が往來に飛び降りて急がし氣に井戸側の溜り水を飲まう

として來た。ニコライ・ペドロウイッチはそれを眺め出したが、耳はもう近附いて來る車輪の響に捕はれてゐた。

「皆さんが入らつしやるやうでございますよ。」と、門から窺きながら下男が告げた。

ニコライ・ペトロウイッチは飛び上つた。そして往來へ眼を遣つた。三頭の驛馬に曳かれて一臺の馬車が現れた。その中の學生帽の青い紐と、懐しい顏の見馴れた輪廓とがちらと見た彼の眼に留つた。

「アーカシャア、アーカシア！」とキルサノフは叫んで、手を打ち振りながら駈けた。……間もなく彼の唇は、髯のない、埃に汚れた、日に燒けた、若い大學卒業生の頰に押し附けられてゐた。

二

「お父さん、まあ埃を拂はせて下さいよ。」とアーカデイは父親の抱擁に氣持よく報ひたから、旅で疲れた、だが、子供らしい、鈴のやうにはつきりした聲で言つた。「埃がかかるぢやありませんか。」

「構はないよ、構はないよ、」ニコライ・ペトロウイッチは優しく微笑して、息子の外套と自分の上着との襟の埃を二度も拂つた。「顏をお見せ、顏をお見せ。」

彼はかう附け加へて息子の傍から離れたが、直ぐに急ぎ足で驛の庭の方に行つて、

「こつちだ、こつちだよ。直ぐに馬を持つてお出で。」と呼んだ。

ニコライ・ペトロウイッチは息子よりも餘計に興奮してゐるらしかつた。少しどぎまぎして、少しおどおどしてるやうだつた。アーカディは彼を遮つた。

「お父さん、」と彼は言つた。「度々手紙で申し上げた親友のバザロフを紹介させて下さい。幸にも僕たちの處に滯在する約束をして吳れたんですから。」

ニコライ・ペトロウイッチは急いで引き返して、今馬車から降りたばかりの、總の附いた長い、だぶだぶの粗末な外套を着た、背の高い青年に近寄つた。その青年は直ぐには手を差し出さなかつたけれど、彼はその手袋を穿めない赤ちやけた手をしつかと握り占めた。

「私は心から嬉しうございます、よく訪ねて下さいましたね。……お名前を、お父さんのお名前を伺はせて下さいませんか。」

「エフゲニイ・ワシリエフです。」

バザロフは臆劫さうな、けれども男らしい聲で答へた。そして粗末な外套の襟を折り返して、顔全體をニコライ・ペトロウイッチに見せた。細長い痩せた顔だつた。額は廣く、鼻は根が張つて先が尖り、眼は大きくて青味を帶び、垂れ下つた髯は砂のやうな色をしてゐた。おだやかな微笑がその顔全

體を明るくして、自信と聰明とを現してゐた。

「エフゲニイ・ワシリイッチ。私たちの處で御退屈なさらないやうにね。」とニコライ・ペトロウイッチは續けて言つた。

バザロフの薄い唇は人目に附く位に動いた。けれども返事はしないで、帽子を取つたきりだつた。その長い、黑い髪も頭の凸起を隱さなかつた。

「ちやアーカディ、」ニコライ・ペトロウイッチは又息子を振り返つて、「直ぐに馬の仕度をさせようかな？ それとも休んで行きたいかね？」

「家に歸つてから休みませうよ、お父さん、急ぐに馬の仕度をするやうにおつしやつて下さい。」

「直ぐだ、直ぐだ」父親は合槌を打つて、「おいピオートル、解つたかい？ 直ぐに仕度だよ、氣を附けてな。」

現代式の下男だつたピオートルは若主人に接吻はしないで、ただ遠方からお辭儀をしたきり、又門から姿を消してしまつた。

「私は二頭馬車で來たんだがね、お前の四輪馬車の馬が三頭あるよ。」

ニコライ・ペトロウイッチは浮々として言つた。さうしてゐる内にアーカディは驛の女の持つて來

て呉れた罎の柄杓から幾らか水を飲んだ。バザロフは煙草を喫ひながら、馬を曳き出してゐる馭者に近附いた。

「二頭馬車には二つしか席がないが、お前の友だちはどうしようかな……」

「あの男は四輪馬車で行くでせう。」アノカディは低い聲で遮つた。「あの男にはお願ひだから勿體ぶつてはいけません。素晴らし奴なんですからね。實に單純な――お解りでせう。」

ニコライ・ペトロウイッチの馭者は馬を曳いて來た。

「さあ、急ぐんだ、髯もぢや！」バザロフは馭者に聲を掛けた。

「聞いたかえ、ミチューハ、」傍に立つて羊皮の外套の裂け目から手を後へ突つ込んでゐた今一人の馭者が言つた。「何と旦那がお前をお呼びなすつた？お前も矢つ張り髯もぢやだつてさ。」

ミチューハはただ帽子を輕く動かしただけで、勢のいい馬の手綱を取つた。

「氣をつけるんだ、氣をつけるんだよ、若いの、手を借してくれ、」ニコライ・ペトロウイッチは叫んだ。「旨くいきや酒手をやるからな。」

數分の後馬はすつかり支度が出來た。父と子とは二頭馬車に乘り、ピオートルは馭者臺に攀ぢ上つた。バザロフは四輪馬車に飛び乘つて、頭を皮蒲團に埋めた。かうして二臺の車は軌り去つた。

三

「まあお前もたうとう卒業生になつて又家に歸つたな、」ニコライ・ペトロウイッチはアーカディの肩に觸つたり、と思ふと膝に觸つたりしながら言つた。――「たうとうな！」

「それで叔父さんはどうです？御丈夫ですか？」

アーカディは純眞な、殆んど子供のやうな喜びに心を充たされてはゐたが、出來るだけ早く會話を、感激した調子から普通の調子に引き返さうと考へた。

「極く丈夫だよ、私と一緒に迎へに行くつもりだつたんだが、どうしたわけかな、止めにしたんだよ。」

「それでお父さんはどの位待つて下さいましたね？」とアーカディは訊いた。

「ああ、五時間も待つたかな。」

「まあ、さうですか！」

アーカディはかう言つて急に父親の方へくるりと向き直つて、その頬に音のするやうな接吻をした。

ニコライ・ペトロウイッチは低くくすくす笑ひ出した。

「私はお前のために素敵な馬を買つたよ！」と彼は又話し出した。「今に見るがね。それからお前の部

屋には新しく壁紙を貼り代へたんだよ。」

「それでバザロフの部屋はありませうか？」

「あの人にも一つ見附けような。」

「どうか。お父さん、あの男をよくしてやつて下さい。僕がどんなにあの男の友誼を重んじてるか、一寸口では言へませんよ。」

「近頃知り合ひになつたのかい？」

「ええ、極く近頃です。」

「ああ、それで去年の冬私は會はなかつたんだな。何を研究してる人かね？」

「專問は自然科學です。が、何でも知つてゐますよ、來年は醫學檢定試驗を受けると言つてゐます。」

「さうか！　醫學を研究してるのか。」

ニコライ・ペトロウイッチはかう言つてから一寸默り込んだ。

「ピオートル、あすこに行くのは家の百姓ぢやないか？」

彼は今度は手を延ばしながら下男に話し掛けた。

ピオートルは主人の指さした方を見やつた。裸馬を附けた數臺の荷馬車が峽い側道を走つてゐた。

一臺毎に一人二人の百姓が羊皮の外套を着、ボタンをはづしたままで乘つてゐた。

「さうでございますよ。」とピオ！トルは答へた。

「何處へ行くんだらう、町かな？」

「町でございませうね。酒屋ですね。」

彼は輕蔑するやうに後の言葉を附け加へて、訴へるやうな具合に一寸馭者を振り返つた。然し馭者は顏の筋一つ動かさなかつた。彼は昔風の人間で、新しい時代の當世流の考など持つてゐなかつた。

「今年は百姓たちの色んなうるさい事があつてね、彼奴等は小作代を拂はないんだ。どうしたものかな？」

ニコライ・ペトロウイッチは息子に向つて又話し出した。

「ですが、あなたは日傭取りはお好きですか？」

「うむ。」ニコライ・ペトロウイッチは齒と齒の間で答へた。「彼等は一組になつて反抗するんだ。それが困りもんだ。それに一生懸命にはならないし、馬具は壞してしまふし。でも土地はよく耕したよ。少し片が附けば何も彼もよくなるんだ。お前は今農業に興味はあるかい？」

「あなたは日蔭をお持ちになりませんね、お氣の毒な。」

アーカディは後の質問には答へもしないでこんなことを言つた。

「露臺の向ぅの北側へ大きな日除けを附けたよ」ニコライ・ペトロウイッチは言つた。「今は外でも食事をすることが出來る。」

「あんまり夏の別莊らしかありませんか……。まあどうでもいい、下らないことだ。それにしてもこの邊の空氣はどうだらう！　何といふいい匂ひがするんだらう！　本當に世の中でこのあたりの草原位匂ひの高い處は今ぢやありませんね！　それに空もどうだらう！」

突然アーカディは言葉を切つて、そつと背後を振り返つた。そしてもう言はなかつた。

「無論、お前は此處で生れたんだからな、何も彼もが厭でも特別な感じをお前に――」とニコライ・ペトロウイッチは言ひ掛けた。

「お待ちなさいお父さん、人間は何處に生れたつて變りはありませんよ。」

「でも――」

「いいえ、全然變りませんよ。」

ニコライ・ペトロウイッチは息子を横眼で見やつた。そして次の會話が始まるまでには、馬車は半哩ばかりも走つてゐた。

「知らしてやつたかどうか忘れたが、」と漸くニコライ・ペトロウイッチは話し出した。「お前の昔の乳母だつたエゴロウナが亡くなつたよ。」

「本當ですか？　可哀さうに！　プロコフイッチはまだ生きてますかしら？」

「うむ少しも變つてゐないよ、相變らず愚痴ばかりさ。實際、お前、マリーノに會つたつて少しも變つてゐないからね。」

「矢張り前の執事がゐますか？」

「うむ、たしか一度變つたな。私は家の召使をしてた免役奴隷には暇をやることにしたのさ。少くとも責任のある仕事は委さないことにしたのさ。（アーカディはちらとピオートルを見た。つまり彼奴もその免役奴隷なんだがね。」とニコライ・ペトロウイッチは佛蘭西語で低く囁いた。「見る通りただの下男だからね、今ではあの男を執事にしてるよ、役に立つ男らしい。一年二百五十留を拂つてゐるんだ。だがね――」

から言ひ掛けてからニコライ・ペトロウイッチは何時も内心困つた時にする癖で、額と眉をこすりながら續けた。

「今お前にマリーノは變つてゐないと話したつけな。……實はさうでもないんだよ。義務としても一

應お前に知らせて置く方が……」

彼は一寸躊躇したが、今度は佛蘭西語で話し出した。

「むづかし屋の道德家から見ると、私のやうに開けつ放して言ふのはよくないと言ふだらうけれど、第一、隱して置けるものでもなし、第二に、私はお前の知つての通り、父と子との關係に就いて特別な考を持つてるんでね。尤もお前が私を責めるのは無論正しいよ。私の年で……簡單に言ふと……あの……あの娘とお前は多分もう聞いてるだらうが、あの娘……」

「フエニチカですか？」

アーカディは氣輕に訊いた。ニコライ・ペトロウイッチは顏を赧らめた。

「彼女の名をそんな大聲で言はないで呉れ、どうか……それで、……あの女が今家に一緒に住んでるんだ。私が住ませたのだ。……二つの小さい部屋がある。だが、變へることも出來るんだよ。」

「まあ、お父さん、何のために？」

「お前の友だちが家に滯在なさるんぢやないか……不體裁だからね……」

「どうか、バザロフのことは氣にかけないで下さい。あの男はそんな事なんか平氣ですよ。」

「うん、然しお前もだよ。」ニコライ・ペトロウイッチは附け加へて言つた。「小さな家がそんなに厄介なんだから、——それが何よりも困るのさ。」

「まあ、まるで辨解なすつてるやうですね、恥しいと思つてゐらつしやるんぢやないでせう。」アーカデイは口を入れた。

「無論私は恥づべきなんだよ。」

ニコライ・ペトロウイッチは益々顏を赧めながら答へた。

「馬鹿な、お父さん、お止しなさいよ。」

アーカデイは熱を籠めて言つた。「何といふことに辯解なんかするんだらう！」

アーカデイはかう思つた。かう思ふと同時に彼の心には、その氣の弱い優しい父に對する寬やかな溫情が、ひそやかな優越感と一緒になつて漲つた。

「どうか、止して下さい。」

彼は本能的に自分自身の進歩した解放された狀態を自覺して喜びながら、今一度繰り返して言つた。

ニコライ・ペトロウイッチは、その時まで額をこすつてゐた指の下から、ちらと息子を見やつた。心には惱ましさがあつた。……が、直ぐにさうなる自分を咎めた。

「とうとう家の草原に來たよ。」ニコライ・ペトロウイッチは長い沈默の後に言つた。

「あの向うは家の森でせうね？」アーカデイは訊いた。

「さうだよ。材木は賣つちまつたばかりだがね、今年は切り倒されるだらうよ。」

「何故お賣りになつたんです？」

「お金が入るんでね。それにあの地面は百姓の手に還入るんだから。」

「誰が小作代を拂はないですか？」

「それが彼奴等の事件なんだ。何時かは拂ふだらうな。」

「あの森は殘念ですね。」

アーカデイはかう言つて周圍を見廻し始めた。

彼等が馬車を驅つて來た、この田舍は繪のやうだとは言へなかつた。野原又野原は、ゆるやかに盛り上つたり盛り下つたりしながら、その地平線までも擴がつてゐた。或處には森が見える。低い疎らな灌木を植ゑた曲りくねつた峽谷が見える。そしてカザリン女帝時代の古風な地圖にある、それ等の有様が鮮やかに思ひ浮べられた。又、窪んだ堤防のある小さな流れ、低い土手のある小湖水、暗くて多くは倒れかかつた屋根の下にある低い小屋や、條林に取り卷かれた傾きかかつた納屋や、手入れのしてない叩き床の傍に開け放してある扉やを持つた小さな村、或は漆喰の剝げた煉瓦造りの、或は十

字架が斜めに倒れた木造の幾つかの教會、それから草の茂つた墓場、――さうしたものが見渡された。

アーカデイの心はだんだんに沈んだ。さうした景色をもつと完全にするかのやうに、彼等が出會ふ百姓は皆襤褸を着て、實に荒れつぽい小馬に乘つてゐる。幹の皮が剝げて枝の折れた柳の樹が、ぼろぼろの乞食のやうに路傍に立つてゐる。痩せた汚い餓ゑに迫つてるやうに見える鳥が、がつがつと溝側の草を千切つてゐる。それ等は何か恐ろしい魔物の毒手から今救ひ出されたばかりの者のやうであつた。美々しい春の日の眞中に佇んでゐるこの弱々しい餓ゑた動物の哀れつぽい姿は、白い幻想のやうに、嵐や霜や雪やに閉された、果てしない佗びしい冬を思はせる。……「いや、」とアーカデイは考へた。「これは豐饒な土地ぢやない。富有とか勤勉とかの印象を與へない。このままではいけない。どうしたつて改革する必要がある。……然しだ、どんな風に改革を實行していいか、どんな風に着手したらいいか？」

アーカデイはかう考へて。……然し彼が考へてゐるのに、春は又その力を振ひ始めた。あたりは凡て綠に包まれてゐる、凡て――木や草が温い空氣のそつとした吐息の中に大きい浪を打つて輝き戰いでゐる。四方八方から雲雀の果てしなく響く音樂が湧き漲つてゐる。たげりは低い草原の上を飛び交ひ囀り合ひ、と思ふと草叢の上を音もなく走つてゐる。鳥は半ば熟した短い春の麥の間をのそのそ歩

いて、柔かいその綠に黑點を浮き出させたり、既に白くなつたライ麥の間に消えて、時々その灰色の穗の浪打つ中に首を覗かせたりする。アーカデイはそれをぢつと見守つた。さうして彼の考はだんだん薄れ消えてしまつた。……彼は外套を脱ぎ棄てて、晴れ晴れとした無邪氣な顏を父の方へ向けた。そのために父親は又アーカデイを抱きしめた程であつた。

「もう遠くはないよ、」ニコライ・ペトロウイッチは言つた。「この丘を越しさへすれや家が見えるんだからね。一緒に素晴らしくやらうぢやないか、ね、アーカシア。厭でなかつたら、私を助けて所有地の耕作をして與れないか。かうなつたらもつと親しくなつてお互に充分知り合はなきやいけないね、えゝ?」

「無論ですとも。然し今日は何といふ氣持のいい日なんでせう!」アーカデイは言つた。

「お前を歡迎するためだよ、ね。さうだ、今は春の一番いい時だ。私はプーシュキンに同意する者だが、――イエフゲニイ・オニエギンにこんな詩句があつたつけな、覺えてるかね、――

春の來る如何に吾に悲しき、

春よ、春よ、愛の甘き時よ!

如何に……」

「アーカデイ、」とその時後方の馬車からバザロフが聲を掛けた。「マッチをくれ。煙草へ火をつける物がないんだ。」

「ニコライ・ペトロウイッチは口を噤んだ。稍々驚きながら、然し氣持に同感して、父の唄を聞き掛けてゐたアーカデイは、急いで、ポケットから銀のマッチ箱を引き出した。そしてピオートルに命じてバザロフに持たせてやつた。

「煙草はいらないか?」とバザロフは又聲を掛けた。

「有りがたう。」とアーカデイは答へた。

ピオートルは馬車に引き返して、マッチ箱と太い黑い煙草とを差し出した。アーカデイは直ぐに取つて吸ひ出した。強烈な、むつとする安煙草の臭ひがあたりに擴がつたので、若い時から煙草を吸はなかつたニコライ・ペトロウイッチは、息子が氣を損ねるかも知れないので、出來るだけそつと顏を反けないではゐられなかつた。

十五分も經つてから二臺の馬車は、赤い鐵屋根の、灰色に塗つた、新しい木造の家に辿り着いた。此處が、ニユウ・ウイツクとも呼ばれるマリノだつた。百姓たちからは貧乏耕地といふ綽名をつけられてゐた。

四

召使の者は一人として皆を迎へに出て來なかつた。十二三歳位の小娘が一人現れて、その後から、ピオートルに非常によく似た、白い紋釦の附いた鼠色の法被を着た若者が内から出て來た。これはパヴエル・ペトロウイツチ・キルサノフの下男であつた。この男は何も言はずに、二頭馬車の扉を開け、それから四輪馬車の前被を外した。ニコライ・ペトロウイツチは息子とバザロフと一緒に、暗い殆んどがらんとした廣間を通り拔けて、思ひ切つて近代風の裝飾を凝らした客間に這入つて行つた。その廣間の扉のうしろに、若い女の顏がちらと覗いてゐるのに皆は氣が附いた。

「歸つて來たな。」と、ニコライ・ペトロウイツチは帽子を取りながら髮を上に搔き上げながら言つた。「大事だつたな。さあ、これから晩飯を食つてから休まなきや。」

『乾度飯は旨いでせうね。』バザロフは脊伸びをしながら長椅子に身體を埋めた。

「さうだ、さうだ、晩飯にしよう、直ぐに。」ニコライ・ペトロウイツチは明らかな理由があつたわけではないが足踏みをした。「それに丁度いい時にプロコフイツチが來たよ。」

六十歳位の男が這入つて來た。白髯を生やした、瘦せた、色の黑い、眞鍮のボタンの附いた眼に淡

紅色のネクタイを附けた老人であつた。彼はお世辭笑ひをしながらアーカデイの手に接吻し、客に挨拶してから戶口に引き返して兩手をうしろに引つ込めた。

「ほら、御覧、プロコフイツチ、たうたう歸つて來たよ……うむ、伜はお前にどう見えるね。」ニコライ・ペトロウイツチは言ひ出した。

「全く申し分はございませんね、」老人は言つて文齒まで見せて笑つたが、直ぐに濃い眉を顰めて、「御夕飯をお出しいたしますか？」と稍々强い調子で言つた。

「さうだよ、どうか、御願ひするよ。でもあなたは先づ御部屋にお行きになりたくはございませんか、イエフゲニイ・ワシリイツチ？」

「いいえ有りがたう、どうでも構ひません。ただ、小さな僕の箱をこつちへ運んで貰ふやうにおつしやつて下さい。それから、この服も。」

バザロフは粗羅紗の外套を脫ぎながら附け加へた。

「承りました。プロコフイツチ、この方の外套をとつてお上げ。」

(プロコフイツチは當惑した容子で、バザロフの外套を兩手でつまみ上げ、頭上に高く捧げて爪先立てて退いた。)

「それからお前は、アーカディイ、一寸部屋へ行く氣かね？」とニコライ・ペトロウイッチは息子に向いて言つた。

「ええ、身體を洗はなきやなりませんから。」アーカディイは答へて戸口の方に歩いて行かうとした。が、丁度その時、黒いイギリス風の服を着て流行の襟飾を附け、羊皮靴を穿いた中背の男が客間に這入つて來た。パヴエル・ペトロウイッチ・キルサノフだつた。

彼は四十五歳位に見えた。

短く刈り込まれた半白の髮は新しい銀のやうに暗く輝き、黄色い、だが少しも皺のない顔は、精巧な鑿で刻まれたかのやうに稀に見る端麗な線を示して、驚くべき美しさを湛へてゐた。殊に立派なのはその鮮やかな、黒い巴旦杏形の眼だつた。——貴族的優美さを持つてゐるアーカディイの叔父の、この全體の人柄には、多くの場合二十代を過ぎると消えてしまふところの青年の麗はしさと、地上をかけ離れた向上的な姿子とが、未だに殘つてゐた。

パヴエル・ペトロウイッチはズボンのポケットから、長い、先の尖つたピンク色の爪が揃つた手を取り出して甥に差し出した。その手は、一つの大きな蛋白石のボタンを附けた袖口が雪のやうに白いために餘計に美しく見えた。彼は先づ西歐式に握手をしてから今度は露西亞風に三度もアーカディを接

吻した、——香水の附いた髯を甥の頬に三度當てて「よく來たな」とでも言ふやうな具合に。

ニコライ・ペトロウイッチは彼をバザロフに紹介した。パヴエル・ペトロウイッチはそのしなやかな身體を心持曲げて、一寸微笑しながら會釋した。けれども手を差し出さうとはしないで、ポケットに引つ込めてしまはうとさへした。

「今日は來やしまいと思つてたんだよ。」

彼は素晴らしく白い歯並みを見せながら肩を聳かしてのん氣に言つた。

「途中で何かあつたかね？」

「何もありませんでしたよ。どちらかと言へば、のろのろしてたんでね。でも今は狼のやうにひもじくなつちまひました。プロコフイッチを急き立てて下さい、お父さん、僕は直ぐに歸つて來ますから。」とアーカディイは答へた。

「待つて呉れ、僕も一緒に行かう。」バザロフが突然長椅子から起き上つて叫んだ。

二人の青年は部屋を出て行つた。

「あの男は何者だね」と、パヴエル・ペトロウキッチは訊いた。

「アーカディイの友だちでね、あれの言ふところだと、いやに賢い男だつてことです。」

「此處で一緒に暮す氣かね？」

「さうですよ。」

「あんな無骨な先生がかね」

「だつて、さうです。」

パヴエル・ペトロウイッチは卓子の上を敲きながら言つた。「アーカデイは大きくなつたね、歸つて來て愉快だよ。」

晩飯の時には餘り話が交されなかつた。殊にバザロフは一言も口を利かないで、無暗に食べた。ニコライ・ペトロウイッチは、彼の所謂農夫としての經歴中に起つた色んな出來事を述べ立てて、命令的な政府の處置だの、委員だの、代理だの、機械を入れて見ることの必要だの、その他さまざまのことを述べ立てた。パヴエル・ペトロウイッチは食堂の中をゆつたりとした歩調で行つたり來たりしながら（彼は晩飯を食べなかつた）時には赤い葡萄酒を一寸舐めたり、時には（決して度々ではなかつたが）「はあ」とか「ふん」とかいふ感歎詞を洩らしたりしてゐた。アーカデイはペテルスブルグからの新しい消息を持ち出したが、一寸極まりの惡さを自分で意識してゐた。それは、若者が最早子供でなくなつてから、これまで自分を子供として扱つてゐた人々の處へ歸つて來る時に何時も感ぜる、さうし

た極まりの惡さであつた。彼は全然不必要な長い文句を使つたり、「お父さん」といふ言葉を避けて、「父上」といふ言葉を、さうだ、齒と齒との間で呟くやうに言つたり、故意と無頓着な樣子をして、實際に飲める以上の酒を注ぎ足したり、そしてそれをぐつと一息に飲み干して見たり、などした。プロコフイッチは彼から眼を離さないで、自分の脣を嚙みつづけてゐた。晩飯が濟むと皆は直ぐに別れ別れになつた。

「君の叔父さんは妙ちきりんな人間だね、」

バザロフは短いパイプで煙草を吸ひながらアーカデイの傍に寢間着を着て坐つて言つた。「まあ考へて見ろよ、この田舍にあんな人間がゐるなんて！　あの爪、あの爪さ、――あいつは君、博覽會へ出品しなきや收まらない代物だぜ。」

「だつて君、無論君は知らないんだよ。」とアーカデイは答へた。「あの人は若い時分には大變な勢力だつたんだぜ。何時か話して聞かせようよ。非常に綺麗な男で、あらゆる女といふ女の氣を惹きつけたものさ。」

「へえ、さうかねえ？　それで過去の記憶の中に生きてるつていふわけだな。だが此處ぢや惹きつける女がゐないんで、お氣の毒だね。僕はあの何とも言へない頸筋を見詰めてゐたが、大理石のやうだ

ね、それから頬つぺたは申し分なく剃つてあるしさ、ねえ、アーカディ・ニコライヴッチ、可笑しくはないかい？」

「さうかも知れない。でも實際素晴らしい人間だよ。」

「骨董品さ！　然し君のお父さんは立派な人だね。あの人は詩を讀んで時間潰しをしながら、農業のことは餘り知つてゐないが、兎に角いい人さ。」

「親父のやうな人間は千人に一人だね。」

「どんなに神經質で臆病だが氣が附いたかね？」

アーカディは自分自身は臆病でも神經質でもないやうな風で首を振つた。

「おあした古い理想家といふものは、一寸驚くに足る代物でね、」とバザロフは進んで言つた。「自分でも滅びてしまふ位に神經系統を發達させるんだからね……。だから平衡が失はれてしまふんだ。だが、お休み。僕の部屋には、イギリス風の手洗臺があるが、扉が締らないよ。兎に角元氣にやるべきさ、――イギリス風の手洗臺が進歩を待つてゐるか！」

バザロフは去つてしまつた。そしてアーカディには大きな幸福な氣持が襲つた。快く甘いものは、自分自身の家で、親しみのある寢臺で、恐らく懐しい乳母の親切な優しい倦まない手が拵へて呉れただ

ちうと思はれる蒲團にくるまつて眠る事である。アーカディはイエゴロウナを思ひ出した。そして溜息を吐いて天國に於ける彼女の平和を祈つた、……自分自身のためには何等の祈りをもしなかつたが。

彼もバザロフも間もなく眠りに落ちた。然し家の中の他の人々はずつと遲くまで起きてゐた。息子が歸宅したことはニコライ・ペトロウイッチを興奮させた。彼は寢臺に横たはつてからも蠟燭を消さなかつた。そして手を頭に當てて長い夢想に耽り始めた。兄のパヴエルは夜中過ぎまで書齋にゐて煖爐の前の大きな腕椅子に坐つてゐた。その煖爐の中には、だんだんに弱つて行く何かの餘燼が燻つてゐた。彼、パヴエル・ペトロウイッチは服を着代へもせず、ただ、羊皮靴の代りに支那風のスリッパを穿いたきりで、手にはガリグナニの最近號を持つてゐたが、讀んでゐるのではなかつた。そして焔が燃えては消え消えては又燃える煖爐の鐵格子をぢつと瞶めてゐた……。彼の思ひが何處をさまよつてゐるのか、それは誰にも解らないが、然し單に過去をのみさまよつてゐるのではなかつた。――彼の顏の表情は、追憶にのみ耽つてゐる時の容子とは違ひ、一點に集中されてゐた。小さな、うしろの部屋には、大きな箱の上に、黑いジャケツを着た、黑い髮の上に白い頭巾を被つた女、――フエニチカが腰を掛けてゐた。彼女は半ば聽耳を立てながら、半ば居眠りながら、時々開いた扉の間から、搖籃の方に眼をやつた。そこには規則正しい赤ん坊の寢息が聞えて來た。

五

翌朝バザロフは誰よりも早く起きて家を出た。

「ああ、こんなちつぽけな土地は少しも自慢になりやしない！」と彼は考へた。

ニコライ・ペトロウイッチがこの土地を百姓たちと分配した時、彼は四エークルの全く平らかな荒地に新しい邸宅を建ててゐた。彼は家や事務所や農作場を建て、庭を作り、池を掘り、井戸を二つも掘つた。然し若木はよく茂らず、他には極く少しの水しか溜らず、井戸は鹽氣を含んでゐた。ただライラックとアカシヤとの阿亭だけは美事になつて、彼等は時々その中でお茶を飲んだり食事をしたりした。

バザロフは數分の間に庭の小徑を歩き盡して、家畜小屋と厩へ行き、そこで百姓の子供を二人集めた。そして忽ちに友だちになつて家から一哩程の處にある小さな沼へ蛙を探しに出掛けた。

「蛙を探してどうなさるだ？」と一人の子供が訊いた。

「わけを話して聞かさうか、」

バザロフは自分ではさうしようと思ふわけではないが、より低い人間に妙に信用される能力を持つてゐた。それで何の氣もなく、こんな風に振舞つた。

「僕は蛙を破いて、腹の中がどんな風になつてるか見るんだよ。さうすれば僕もお前たちも、蛙と同じなんだから、ただ違ふのは、こちらが足で歩くだけなんだから、僕たちの腹の中もどうなつてるか解るんだよ。」

「そんなことが解つたつて、どうするだね？」

「お前たちが病氣になつた時に間違ひをしないやうにな。そして僕はお前たちを直してやらなきやならんから。」

「ぢや旦那はお醫者さまかね？」

「さうだよ。」

「ワスカ、聞いたか、お前。この旦那はお前も俺も蛙と同じだと言つとるだ。をかしかねえか！」

「俺ア蛙は恐えよ。」と、立襟の埃つぽい肌着を着た、頭が麻のやうに眞白な、そして裸足でゐる七つのワスカが答へた。

「何で恐えものか？ 噛みつくかね？」

「おい、水に飛び込めよ、哲學者たち。」とバザロフは言つた。

バザロフがさうしてゐる間に、ニコライ・ペトロウイッチも起き出て、アーカディに會ひに行つた。

アーカデイはもう着物を着代へてゐた。で、父と子とは日除けの下になつた露臺に出て行つた。サモヷルが既に、手すり近くのライラックの大きな叢の中の卓子の上に煮立つてゐた。前夜皆が到着した時迎へに出た、あの小娘が現れて、黄な聲で言つた。――

「フエドシア・ニコラエヴナは氣分がはつきりしないので、お出でになることが出來ません。御めいめいでお茶をお注ぎ下さいますか、それともダニシアを寄越しませうか、伺つて來いとのことでございました。」

「自分でするよ、自分で。」とニコライ・ペトロウイッチは性急に言つた。「アーカデイ、茶は何がいい、クリームかね、レモンかね？」

「クリームにして。」アーカデイはかう答へたが、一寸沈默してゐて不意に呼び掛けた。

「お父さん？」

ニコライ・ペトロウイッチはどぎまぎして息子を見た。

「何かな？」

アーカデイは瞳を伏せた。

「若しいけなかつたら勘辨して下さいよ、お父さん、」とアーカデイは言ひ出した。「でも、昨日あなた

が打ち明けて下すつたので、僕も大びらにお話する氣になります……御立腹なさりはしないでせうね……？」

「話して御覽。」

「かうお訊きしたいんですが……あのフエニ……あの人が茶を注ぎに此處に來ないのは、僕が此處にゐるからつてわけぢやありませんか？」

ニコライ・ペトロウイッチは輕く顔を反けたが漸く答へた。――

「多分、……恥しいと思つてるんだらうよ。」

アーカデイは素早く父の顔を見た。

「恥しがる必要がありません。第一、あなたは僕の意見に氣附いてゐらつしやるし（かうした言葉を口にするのはアーカデイにとつて心地よかつた）第二に、私はあなたの生活、あなたの極く些細な習慣を破らうなんて氣になれるでせうか？　それに、あなたは惡い選び方をなさる筈がないんだから、若し、同じ屋根の下に一緒に住むことをお許しになつてる以上、乾度その女の人はそれに價する人です。どんな場合にも、私は父の是非を審くことは出來ませんが、――まして、僕は、どんなことをも僕の自由にさせて下すつたあなたのやうな父に對して、是非を云々することは出來ません。」

アーカディの聲は初めの內顫へてゐた。彼は父に對して何だか說敎じみたことを言つてるなと感じながらも、同時に自分を寬大であると感じてゐた。然し誰でも自分自身の聲調に動かされるもので、アーカディもこの最後の言葉をきつぱりと、餘勢さへ强めて言つた。

「有りがたう、アーカシヤ、」とニコライ・ペトロウイッチは濁つた聲で言つた。そして又指先で顏や眉を擦つた。「お前の想像通りさ。無論あの女がそれに價しない女だつたら……これは下らない氣まぐれぢやないんだよ。このことをお前に話すのは、私にとつて樂ぢやない。でも此處、お前の前に、殊にお前の歸つて來た最初の日に、やつて來るなんて、彼女に出來にくいことだよ。

「そんなら僕から參りませう。」

アーカディは寬大な氣持が新しく湧いて來てから叫んだ。そして席を急に立ち上つた。「僕の前で恥ぢる必要のないといふことを僕の方から說明しませうよ。」

ニコライ・ペトロウイッチも立ち上つた。

「アーカディ、どうか……どうしてそんなことが、……まだ……お前に話さないことがあるんだ……」

然しアーカディは彼に耳を傾けず、露臺を驅け下りた。ニコライ・ペトロウイッチはその後を見送つて、どぎまぎしながら椅子に身體を埋めた。彼の胸は烈しい鼓動を打ち始めた。彼はその瞬間に、

彼と息子との、將來の關係が避け難い變なものになることを悟つただらうか？ 若し彼がこの問題に全然觸れなかつたならば、より以上にアーカディが彼に尊敬を示しただらうといふことを意識しただらうか？ 彼は自らの弱さを責めただらうか？——それは何ともいひにくい。——凡てさうした感情が彼の內部にあつた。然しそれは感激の、漠然とした感激の狀態にあつたので、顏はまだ赧らみ、胸は矢張り波打つてゐた。

急ぎ足の音が聞えて、アーカディが露臺に現れた。

「お父さん、僕たちは友だちになりましたよ。」と彼は顏に愛情の籠つた人のよささうな勝ち誇つた色を浮べて叫んだ。「フエドシヤ・ニコラエヴナは今日本當に氣分がよくないんですよ。で、も少し經つたら來るでせう。だが何故あなたは僕に弟が出來てることを默つてゐらしたんです？ 今あの子に接吻して來たところですが、昨夜も接吻するんでしたね。」

ニコライ・ペトロウイッチは何か言はうとした。立ち上つて腕を擴げようとした。アーカディは彼の首に飛びついた。

「何だね？ 又抱き合つてるのかい？」

うしろで、パヴエル・ペトロウイッチの聲が聞えた。

父と子とは共にかうした瞬間に彼の現れたのを喜んだ。人間には出來るだけ早く遁れたいと願ふやうな場合——全く僞つた擧動をする場合があるものである。

「何故そんなに喫驚なさるんです？」ニコライ・ペトロウイッチは愉快さうに言つた。「考へて御覽なさい、どんなに長い年月私がアーカシヤを待つてゐたか。それに昨日からまだ顔をよく見る暇もないんです。」

「少しも喫驚してやしない、」パヴエル・ペトロウイッチは言つた。「私は自分でアーカディを抱く氣になれないんだ。」

アーカディは伯父の傍に行つた。そしてその香水のぷんぷんする髯で頬を撫でられた。パヴエル・ペトロウイッチは卓子に坐つた。彼はイギリス式の優美な朝着を着て、頭には粋な小さい帽子を被つてゐた。この帽子と無雜作に結んだ小さな襟飾りとは、田舍生活の自由さを示してゐた。然し、シャツの堅いカラア——それは白でなく、縞だつた。朝着にはさうするのが正しかつたから、——が例に依つて綺麗に剃つた腭を締めつけてゐた。

「お前の新しい友だちはどうしたね？」と彼はアーカディに訊いた。

「家にはゐません。あの男は何時も早く起きて何處かに出掛けるんです。肝心なことですが、餘りに

あの男のことを氣にしてはいけません、禮儀を好かない人間ですから。」

「さうだ、さうらしい。長く滯在するつもりかね？」

パヴエル・ペトロウイッチは丁寧に麺麭にバタを延ばしながら訊いた。

「多分ね。親父の處へ行く途中で此處に寄つたんですよ。」

「父親は何處にゐるんだね？」

「同じ州で、此處からは六十哩離れてゐます。少しばかりの資産を持つてゐて、以前は軍醫だつたとかいふ話です。」

「それだ、それだ、乾度さうだよ、バザロフつて何處かで聞いた名前だと、不思議に思つてたんだよ。ニコライ、お父さんの師團にバザロフといふ外科醫がゐたのを覺えてゐないかえ？」

「ゐたと思ひますね。」

「さうだ、さうだ、確かにさうだ。して見るとあの軍醫が父親なんだな、ふん。」パヴエル・ペトロウイッチは髯を引つ張つた。「うん、それでバザロフ君自身は何者だね？」と彼は念入りに尋ねた。

「バザロフが何者だつて？」アーカディは微笑した。「あの男が本當は何者だか、お話してもよございますか、？」

「うん、話して御覧、お前。」

「彼は虚無主義者ですよ。」

「え?」

ニコライ・ペトロウイッチは訊き返した。パヴエル・ペトロウイッチは、先にバタの一片が附いたナイフを空に支へたまま、身動きもしなかつた。

「彼は虚無主義者ですよ。」とアーカディイは繰り返して言つた。

「虚無主義者、――それは私に解るだけの範圍で言へばラテン語の nihil 卽ち無といふ言葉から來てるやうだ。だから虚無主義者といふと……何物をも是認しない人間のことかね?」ニコライ・ペトロウイッチは言つた。

「否、何物をも尊重しない人間のことだ。」とパヴエル・ペトロウイッチは言つて又バタをつけ始めた。

「一切を批評的見地から見る人間のことです。」アーカディイは注意した。

「同じことぢやないかね?」とパヴエル・ペトロウイッチは訊いた。

「いや同じことぢやありませんよ、虚無主義者とは、如何なる權力の前に屈せず、如何なる理法をも信じない人間のことです、たとひ、その理法が祭り上げられてもです。』」

「うん、で、それはいいことかね?」パヴエル・ペトロウイッチは口を入れた。

「それは問題ですよ、伯父さん。或人間にはいいことでせうが、又或人間はそのために苦しみます。」

「成程。然し私たちの世界ぢやないね。私たちは昔風の人間なんだから。お前の言ふ理法を信じなきや、一足も踏み出せないし、一息も吐けないんだ。お前はあれから變つたね、神はお前に健康と將軍の位を與へて下すつた。私たちは讃美して滿足すればいいんだ、その……何とか言つたつけな?」

「虚無主義者です。」とアーカディイははつきりと答へた。

「さうだ、それを讃美すればいいんだ。昔はヘーゲル主義者だつたが、今は虚無主義者なんだ。お前たちが、空、眞空の中にどうして生きて行くか見れることだらう。それで、一寸呼鈴を鳴らしてくれないか、どうか、ニコライ・ペトロウイッチ。ココアを飮まなきや。」

ニコライ・ペトロウイッチは呼鈴を鳴らして「ダニャシャ!」と呼んだ。然しダニャシャの代りにフエニチカ自身が露臺に現れた。彼女は二十三位の若い女で、皮膚は白くて柔く、黑い髮と瞳、赤い小供のやうな尖つた脣、小さな、しなやかな手を持つてゐた。彼女はさつぱりした花模樣の服を着て、新しい襟卷を、肉つきのいい肩からふはりと掛けてゐた。そしてココアの大きなコップを運んで、パヴエル・ペトロウイッチの前に置きながら、どぎまぎとしてゐるので、ほてつた血潮が、その美しい顏

のしなやかな皮膚に眞紅の波を漂はした。彼女は眼を落して、卓子の傍に立ち、軽く指爪をその端へ掛けて身體を凭れ掛けた。來たことを恥ぢてゐるやうにも見えたが、同時に、來る權利があると感じてゐるらしくもあつた。

パヴェル・ペトロウイッチは眉を嶮しくひそめた。ニコライ・ペトロウイッチは當惑したやうな風であつた。

「お早う、フェニチカ。」と彼は口の中で呟くやうに言つた。

「お早うございます。」

大きくはないが響く聲でフェニチカは答へながら、そつとアーカディを横目で見やつた。アーカディは懐しさうな微笑を送つた。彼女はしづかに立ち去つた。一寸身體を揺りながら歩く形さへ彼女には似合つて見えた。

暫くの間、露臺には沈默が續いた。パヴェル・ペトロウイッチはココアを啜つてゐた。と、不意に彼は頭を擡げて、

「虚無主義者がやつて來るよ。」と低い聲で囁いた。

實際バザロフは庭から、花壇を抜けて近附いて來た。彼のリンネルの上着やズボンは泥にまみれて

ゐた。くねくねした沼の草が古い圓い帽子の頂きに捲きついてゐた。

彼は右の手に小さな袋を持つてゐて、その中には何か生きたものが動いてゐた。

彼は素早く露臺に近附き、會釋しながら言つた。

「皆さん、お早う。御茶におくれて殘念でした。直ぐに引返して參ります、この捕虜を始末しなきやなりませんので。」

「何を持つてゐらつしやるんです。——蛭ですか？」パヴェル・ペトロウイッチは訊いた。

「いゝえ、蛙ですよ。」

「お食べになるんですか、それとも取つてお置きになるんですか？」

「實驗用です。」

バザロフは無頓着にかう言つて、家の中に這入つて行つた。

「ちや蛙を裂くんだな。」パヴェル・ペトロウイッチは言つた。「あの人は理法を少しも信じないが、蛙を信じるのだ。」

アーカディは憐れむやうに伯父を見た。ニコライ・ペトロウイッチはひそかに肩を聳かした。パヴエル・ペトロウイッチは自分の警句が不成功だつたのを悟つて、家政のことだの、新しい執事のことな

どを喋り始めた。その執事は前夜彼の處に來て、作男のフオーマが喧嘩をして始末に了へないと訴へたのであつた。

「彼奴はイソップ物語中の人物だよ。」いろんなことを喋つた中で、彼はこんなことを言つてゐた。「何處へ行つても自分がやくざ者だつてことを言ひ觸らすんだからね。仕事を辛抱するといふ男ぢやない馬鹿のやうにそれを投げ出してじまふ男さ。」

六

バザロフ歸つて來て卓子に就き、急いで茶を飲み出した。二人の兄弟は默つて彼を眺めた。アーカディは盗み見るやうに、父をそれから伯父を眺めやつた。

「遠くへ行つたそんですか？」たうとうニコライ・ペトロウイッチが訊いた。

「白揚の森に近い小さな沼へ行きました。鴫を五六羽も驚かしてしまつたが、君は射てるぢやないか、アーカデイ。」

「ぢや君は獵師にはならないのかい？」

「ならないよ。」

「あなたの專門は醫學ですか？」

パヴエル・ペトロウイツチは自分の質問の番が來たので訊いた。

「ええ、醫學です。それから一般の自然科學です。」

「その方面では近頃チュートン人が非常な成功をしたといふ話ですね。」

「さうです、ドイツ人はその方面で吾々の先生ですよ。」とバザロフは無雜作に答へた。

チエートン人と言つてドイツ人とパヴエル・ペトロウイッチが言はなかつたのは、皮肉なつもりだつたけれど。誰もそれに氣が附かなかつた。

「そんなにドイツ人を高く評價してゐらつしやるんですか？」

パヴエル・ペトロウイッチは丁寧さを誇張して言つた。彼は、ひそやかな苛立たしさを覺え始めてゐたのだ。彼の貴族的な性質はバザロフの絕對的無頓着に反感を抱いてゐた。この軍醫の息子は少しも壓迫されないばかりか、ぶつきら棒な、無雜作な返事をした。而もその聲の調子には何だか粗野な、傲慢と言つてもいいところがあつた。

「あの國では科學者が立派ですね。」

「ははあ。露西亞の科學者に就いては、屹度そんなお世辭はおつしやいますな？」

「まあさうですね。」

「御立派な謙遜ですな、」とパヴェル・ペトロウイッチは身體を延ばし、頭をうしろに引きながら、「だがこれはどうです？　つい今しがた、アーカデイ・ニコライッチは、あなたが何等の權威をもお認めにならないと申しましたが？　あなたは權威を信じないんですか？」

「どうして認めるんですか？　何を信じなきやならんのですか？　彼等が眞理を僕に告げる、僕はそれに同意する、それきりです。」

「で、ドロッ人は皆眞理を語りますかね？」パヴェル・ペトロウイッチはかう言つて、恰も彼自身が雲に包まれた天空に引き上げられたかのやうに、冷淡な、疎遠な表情を浮べた。

「皆ぢやありませんよ。」

バザロフは軽い欠伸交りにかう答へた。明らかに彼は議論を續けたくないのだつた。

パヴェル・ペトロウイッチは「お前の友達は丁寧だと言はなきやならんね」とでも言ひたさうに、アーカデイを一寸見た。

「私だけのことを言へば、」と、彼はいくらか一生懸命になつて「餘り進歩してゐないのでドイッ人を好く氣にはなれませんよ。但し今言つてるのは露西亞系統のドイッ人のことぢやありません。その連

中のことなら、どんな人間かよく解つてゐます。だが、純ドイッ人を好かないのです。昔はちよいちよい偉い奴が、――さうだ、シルレルだのゲーテだのが現れたが……弟は特別にさうした人たちが好きですよ、……然し現在では、皆化學者や唯物主義者に變つてしまひました……。」

「立派な化學者は、どんな詩人よりも二十倍の役に立ちます。」とバザロフは遮つて言つた。

「ははあ成程、」パヴェル・ペトロウイッチは眠りかけてゐるやうに、漸く眼瞼を持ち上げながら言つた。「するとあなたは藝術を認めないんですな？」

「金を儲けたり、賣藥の廣告をしたりするやうな藝術ならばね！」バザロフは輕蔑するやうに笑つて叫んだ。

「ははあ、冗談がおつしやりたいんですな。無論そんなものは否定なさるんでせう？　さうだとします。ぢやあなたは科學だけを信じてゐるんですな？」

「僕が何物をも信じないといふことは先刻申し上げたぢやありませんか。それに科學つてどんな科學です、抽象的科學ですか？　商業だの工業だのがあるやうに科學といふものもあります。けれども抽象的科學は決して存在しませんよ。」

「よろしい。それで人間の行爲に入れられた他の傳統に就いても、あなたは同じく否定的態度を執る

んですか？」

「何です、それは？　試驗をしてゐらつしやるんですか？」とバザロフは訊き返した。

　パヴェル・ペトロウイッチは一寸青くなつた……。ニコライ・ペトロウイッチは仲裁するのが自分の義務であると思つた。

「この問題に就いては何時かもつと詳しく話すとしませう、ね、イエフグニイ・ワシリイッチ。あなたの御意見も伺ひ、私たちの考も述べませう。私だけの考で言へば、あなたが自然科學を研究してゐらつしやるのは、心から喜ばしいことです。リービッグが耕地改良の何か驚くべき發見をしたといふ話を聞きましたが、あなたは私の農作上の手助けとなつて頂くことも出來る、有益な助言をして下さることも出來ますね。」

「お役に立たせて頂きますよ、ニコライ・ペトロウイッチ。然しリービッグは吾々の頭の上で笑ひます！　先づ人間はＡ　Ｂ　Ｃを學んでから本を讀み始めなきやなりません。ところが吾々はまだそのＡ　Ｂ、Ｃを知らないんです。」

「たしかにあなたは虚無主義者だ、解ります。」とニコライ・ペトロウイッチは考へた。「でも、時には相談に行つてもよろしいでせう。」と聲高に附け足した。そして、

「さあ兄さん、執事と相談しに行く時刻ぢやありませんか。」

　パヴェル・ペトロウイッチは立ち上つた。

「さうだ、」誰をも見ないで彼は言つた。「こんな風に、大智識を離れて、五年も片田舍で暮すのは不幸なことだ。直ぐに馬鹿になつてしまふ。教へられたことを忘れまいとしても、——あツといふ間にさ！凡てが廢物だと證明されてしまふ、利口な人からはそんな馬鹿を相手にしやしない、言はば老ひぼれの間拔け者と言はれちまふのだ。どうすればよからう？　若い人間は、無論吾々よりも賢いのだ！」

　パヴェル・ペトロウイッチはゆつたりと踵を返して歩き去つた。ニコライ・ペトロウイッチは後に續いた。

「あの人は何時もあんな風かね？」バザロフは二人の兄弟が行つてしまふと、冷やかにアーカディに訊いた。

「イエフゲニイ、君はあの人に對して良くなかつたね、あの人の氣持を損ねたよ。」とアーカディは言つた。

「よろしい、ああした田舍貴族をこれからは考へるとしようか！　だつてさ、皆虚榮と洒落氣と阿呆さね。そんなにしたいなら、ペテルスブルグで生涯暮せばいいんだ。だが、あの人のことは澤山だ！

僕はディディス・カスマルギナッスといふ水中棲息の甲蟲の特殊な奴を見付けたよ。君は知つてるかね。後で見せうかね」

「あの人のことを君に話す約束をしてゐたつけな、」とアーカディは言ひ出した。

「甲蟲のことかね？」

「いや、さうぢやないよ、イェフゲニイ、伯父の話さ。話を聞けば、伯父は君の考へるやうな人間でないことが解るよ。滑稽な、といふよりも氣の毒な人さ。」

「それをぐづぐづ言やしないよ。が、何であの人のことを氣にするんだね？」

「公平に人間はしなきやいけないからね、イェフゲニイ。」

「それでどうしたんだ？」

「まあ、聞き給へよ……。」

かう言つてアーカディは伯父の話を始めた。次の章の物語がそれである。

七

パヴェル・ペトロウイッチ・キルサノフは、弟のニコライと同じやうに始めは、庭で教育され、後

に所謂お小姓教育を受けた。子供の頃から彼は非常に美しいといふ點で朋輩を抜んでゐた上に、自信が強く、いくらか皮肉で、辛辣な調子を持つてゐたが、決して他人を喜ばせることに失敗はしなかつた。至る處にその姿が見られるやうになると直ぐに士官の任命を受けた。世間にちやほやされて、彼はあらゆる遊び、――あらゆる氣まぐれ、あらゆる馬鹿々々しい、遊びにも耽つて、厭に氣取つてゐたが、そんなことも彼にあつては他人の心を惹きつける力を持つてゐた。女たちは彼に迷ひ、男は彼を洒落者と呼んで、而もひそかに美しがつた。

前に述べた通り彼は弟と一つ部屋に暮してゐたが、必ずしも似てゐない兄弟だつたにも係はらず、彼は弟を心から愛した。ニコライ・ペトロウイッチは少し跛足の、稍々憂鬱な可愛らしい青年で、眼は小さくて黒く、髪は薄く柔らかであつた。彼は怠けてゐるのが好きだつたが、同時に讀書も好きで、社交には臆病であつた。パヴェル・ペトロウイッチは一晩も家に寢たことはなく、のん氣に大膽に振舞つてゐた。(その頃彼は社交界の青年に運動を流行らせてゐた) そして五六冊の佛蘭西の本を讀んでゐた。二十八歳の時には既に大尉になつて、前途には華やか生活が彼を待ち設けてゐるやうだつたけれど、不意に一切が一變してしまふことになつたけれど、不意に一切が一變してしまふことになつた。

その頃、時々。今でも忘れられないでゐるＲ――公爵夫人といふ女が、ペテルスブルグの社交界に

現れた。彼女は立派な教育を受け立派に育てられたが、夫といふ人が稍々間拔けで、それに子供がなかつた。彼女は何時も不意に外國に行つたり、と思ふと又不意に露西亞に歸つて來たりして、概して突拍子もない生活を送つてゐた。

彼女は浮氣者といふ評判を立てられて、あらゆる樂しみごとに夢中になり、疲れるまで踊り、若い男と笑つたりした。彼女はさうした若い男たちと食事前の客間の薄暗い隅で合ふのだつた。夜になると彼女は泣いたり、祈つたりして、何處にも平和を見出さず、屢々、惱まし氣に手を振りながら、夜が明けるまで部屋の中で歩き廻つたり、蒼ざめて顫へながら聖詩篇に向つて躊躇つたりするのであつた。

夜が明ける、と、彼女は再び立派な貴婦人に早變りして、又、出て行き、笑ひ、喋り、さうして一寸でも氣を惹く物に沒頭してしまふ。彼女は身體の恰好の實にいい女で、髪は黄金のやうに輝いて膝までも垂れてゐたが、然し彼女を美人だと言ふ者はなかつた。顔全體の中で唯一つの立派なのは眼だつた。けれども、その眼でさへ、必ずしもいいとは言へない、灰色で、大きくなかつたから。が、その眼差しが素早くて底光りをし、大膽と言つてもいい位に無遠慮で、且つ、憂鬱と言つてもいい位に思想的であつた。——それは謎のやうな眼差しだつた。彼女の舌が思ひ切つて出鱈目なお喋をしてゐ

る時でも、その眼差しには或異常な光りがあつた。そして又彼女は實に綿密な注意を服裝に拂つた。

パヴエル・ペトロウイッチは彼女と舞踏會で會つて一緒に「マツルカ」を踊つた。その踊つてゐる間中、一口も彼女は意味のある言葉を洩らしはしなかつたが、彼は狂熱的に彼女を戀してしまつた。成功するのは何時ものことで、この場合も彼は直ぐに目的を遂したが、この容易な成功は彼の熱を鎭めて呉れなかつた。反對に彼は依然として益々惱み、益々彼女に縛られて行つた。彼女が全部を委してしまつた時でさへ、彼女の内部には、常に何人も窺ひ知ることの出來ない、神祕な或物が潜んでゐるやうに思はれた。彼女の魂の裡に何か藏せられてゐたか、——それは誰にも解らない！ 彼女も自分にさへ不可解な或神祕な力に動かされてゐるらしかつた。その神祕な力が彼女を意のままに支配してゐるので、彼女の智力ではどうすることも出來ないらしく見えた。

彼女の振舞は全部滅茶苦茶の連絡だつた。彼は殆んど見ず知らずの男に手紙を書いた。それは夫に疑惑を起させるに充分足るやうな手紙であつた。而も一方彼女の戀は常に憂鬱の基となつた。彼女は、戀人として選んだ男とは笑つたりふざけたりするのを止めて、まぢまぢとしたやうな眼つきをして瞶めるきりだつた。時として、いや、多くの場合、このまぢまぢとした眼つきは不意に顫へるやうな恐怖に一變して、彼女の顔は、物狂ほしい、死人のやうな表情を帶びることがある。彼女は寢室に閉ぢ

聽つて錠を卸した。そして女中は鍵穴に耳を當てて彼女の啜り泣く聲を聞くことが出來た。

パヴエル・ペトロウイッチは、一度ならず、彼女との懇ろな會合の後で、大失敗に續いて生じる、苦しい胸の破るやうな惱ましさを感じた。

「何をこれ以上に俺は要求するんだ？」と彼は胸が苦しくなると自分に訊いた。彼は嘗て彼女に、寶石にスフィンクスを彫つた指輪を與へたことがある。

「これは何です？　スフィンクスですか？」と彼女は訊いた。

「ええ、そのスフィンクスがあなたですよ。」彼は答へた。

「私ですつて？」彼女は不思議がつて、その謎のやうな眼を徐々に彼の方に向けた「大層なお世辭ですわね？」彼女は矢張りその變な眼差しを彼に向けたまま、意味もない微笑を浮べて附け加へた。

パヴエル・ペトロウイッチは、R公爵夫人が彼を愛してゐる間でも苦しんでゐた。然し彼女が冷淡になつた時、それも不意にさうなつたので、彼は殆んど氣が狂つてしまつた。惱み嫉み、彼女に少しの安心をも與へず、至る處彼女を追ひ廻した。彼女は追つかけられるのを苦にして外國へ行つた。彼は友人や上官たちの忠告があつたにも係はらず、職を擲つて公爵夫人の後を追つた。四年間彼は外國に暮し、或時は彼女を追跡し、或時は故意と彼女に會はないやうにした。彼は彼自身を恥ぢ、氣力の

ないのが厭になつた。……然しどうにもならなかつた。彼女の姿が、あの理解し得ない、殆んど無意味な、だが魅力のある姿が、深く心の底にこびりついてゐた。

彼はバアデンで再び彼女との古い關係を復活した。その時くらひ、彼女が彼を熱狂的に愛したことは嘗てなかつたかのやうに見えた。……だが一ケ月の内に凡ての結末が附いてしまつた。焔は最後に燃え上つてそれきり永久に消えてしまつたのだ。彼は別れなければならぬことを豫想して、少くとも彼女と友人關係として交際しようと考へた。かうした女との友誼といふことから可能であるかのやうに……。彼女はひそかにバアデンを去つて、その時以後キルサノフを絶對に避けた。彼はロシアに歸つて再び以前の生活をしようとしたが、然し古い手袋に手の嵌るわけもなかつた。彼は憑かれた人のやうに、方々を流浪して歩いた。彼は矢張り社交界に現れ、俗つぽい人間の習慣も保つてゐて、一つ二つの新しい色事を誇ることも出來た。けれども彼は最早自分自身からも他人からも何を期待しようともせず、そして何事にも手を出さなかつた。

彼は年を取つて髪の毛が半白になつた。そして毎夜を倶樂部で過しながら、僻んだり悶えたり、獨身者仲間で議論したりすることが、彼には必要になつて來た。——それは誰でも知る通り、よくない徴候であつた。

こんな風にして十年が經過した。この年月は。色もなく實もなく、――そして早く、恐ろしく早く過ぎ去つてしまつた。ロシアくらゐ時間の早く經過する處はない。尤も牢獄ではもつと早く經過するといふ話であるが。

或日パヴエル・ペトロウイツチは俱樂部で食事をしてゐる時に、R――公爵夫人が死んだといふことを聞いた。彼女は巴里で、殆んど狂人に近い狀態になつて亡くなつたのだ。彼は卓子を離れて、長い間、部屋の中を行つたり來たり、骨牌遊びをしてる連中の傍らにぢつと立ち止まつたりしたけれど、何時もより早く歸宅するのでもなかつた。それから暫く經つて彼は彼に宛てた一封の小包を受け取つた。その中には嘗て彼が彼女に與へた指輪が這入つてゐた。彼女は例のスフインクスの上へ十字を引き、その謎の解決は――十字架だといふ言葉を彼に送つたのだつた。

これは千八百四十八年の始めに起つたことで、丁度その時弟のニコライ・ペトロウイツチは妻に死なれてペテルスブルグに來た。パヴエル・ペトロウイツチは弟が田舍に引つ込んでからは殆んど會ふことがなかつた。そしてニコライ・ペトロウイツチの結婚は、パヴエル・ペトロウイツチが公爵夫人と會つたその最初の日と一致してゐた。彼は外國から歸つて來た時、弟の幸福を同感して樂しむために、その夫妻と、二ケ月位一緒に暮すつもりで、やつて來た。漸く一週間しか辛抱が出來なかつた。この

兄弟二人の境遇の差は餘りに大きかつたのだ。然し千八百四十八年にはこの差がより少くなつた。卽ちニコライはその妻を失ひ、パヴエルはその記憶を失つたからであつた。公爵夫人の死後、彼は彼女のことを考へまいとした。然し、ニコライにとつては、幸福に送つた生活の感じが殘り、息子は眼の前で大きくなつて行つた。パヴエルはその反對で、寂しい獨身者であり、あの、青春が經つて老年がまだ來ない頃の、希望に似た悔恨と、悔恨に似た希望とが入り亂れてゐるところの漠然とした黃昏時にゐたのだつた。

この時はパヴエル・ペトロウイッチにとつて何人にとつてよりも辛かつた。過去を失ふことの内に彼は一切を失つたのだつた。

「私は兄さんをマリーノへお呼びいたしますまい」とニコライ・ペトロウイッチは或日彼に言つた。（彼は妻の名前を記念するために、その所有地をマリーノと呼んでゐた。）「なつかしいあの妻が生きてゐた頃でも兄さんは退屈なすつたのだから、今では死ぬほど厭にお成りでせうね。」

「あの頃は私は馬鹿で性急だつたんだよ、あれから後、私は賢くはならないまでも、落ち着いて來る。それどころか、都合によつてはお前と一緒に旨くやる氣だよ。」とパヴエル・ペトロウイッチは答へた。

返事の代りにニコライ・ペトロウイッチは彼を抱擁した。然しパヴエルが決心を實行に移すに至る

までに、それから一年半の月日が過ぎた。然し一旦田舎に住居を極めてしまふと、ニコライ・ペトロウイッチが息子と一緒にペテルスブルグで三冬を過した間でも、一度として田舍を去らなかつた。彼は本を讀み始めだ、主にイギリス本を。そして自分の全生活を、大まかに言ふと、イギリス風に整へて、近所の人たちとも滅多に會はず、ただ、時時選擧場に出掛ける位のものであつた。其處では彼は大抵默つてゐたが、時たまに、昔風の地主などを、突飛な冗談で、困らしたり驚かしたりした。そして新時代の代表者とは近附きにならなかつた。新時代の連中も、老人連も一樣に彼を「自惚れ屋」だと考へてゐた、その兩方とも、彼に尊敬を捧げてはゐた、それは彼が上品な貴族的風采を具へてゐるため、彼が戀の或成功者だつたといふ噂のあるため、彼が何時も立派な着物を着て、最上の旅館の最上の部屋へ泊るため、何時も贅澤な食事をして、曾てルイフイリップの食卓でウエリントンと一緒に食事をしたことがあるため、常に何處へでも純銀の化粧箱と携帶用の浴器とを持つて行くため、常に特別上等の香料をつけてゐるため、慣れた容子で骨牌遊びをし、而も何時も負けるため、そして最後にきつぱりした正直さを持つてゐるためであつた。婦人たちは彼を魅力のあるロマンチックな人間だと考へてゐたけれど、彼は婦人に近附かうとはしなかつた……。

「ねえ、解つただらう、イエフゲニイ、」と、この物語を終つてからアーカディは言つた。「君がどんな

僕の伯父を誤解したかつてことが！　伯父が父を助けて苦境を切り拔けさせ、自分の全部の金で父に寄越したことは言ふまでもなく（君は知らないだらうが、財產は分配されてゐたんぢやないんだよ）誰をでも喜んで助け、殊に何時も百姓の味方をする。尤も百姓たちと話す時には、顏をしかめて香水を嗅ぐのは本當だがね……」

「それは無論あの人の神經だよ。」とバザロフは口を挿んだ。

「さうかも知れない。だが伯父の心は實に善良なんだよ。それに馬鹿どころぢやない。僕にはどんなに有益な助言を與へて吳れたことが、殊に……殊に女との關係ではね。」

「或程！　火傷した犬は冷たい水を恐れるからね！」

「簡單に言へば伯父は非常に不幸なんだよ、それを輕蔑するのは罪だね。」

「誰が輕蔑するかね？」バザロフは言つた。

「然し言はなきやならんが、生涯を一枚の骨牌——女の愛と云ふ骨牌に賦けて、それが失敗すると、意氣地なく何にもなれないやうになるまでぐれる奴は、男ぢやない、雄だね。君はあの人が不幸だと言ふが、よく知らなきやいけない。たしかにあの人は昔の夢からすつかり拔け切つてゐないんだよ。あの下らない『ガリグナニ』を讀んだり、月に一度位百姓の苦を救つたりするからといふので、あの

人は自分を優れた者だと、鹿爪らしく考へてるに相違ないよ。」

「でも伯父の教育なの、伯父が育つた時代だのを記憶して呉れ給へ。」とアーカディは注意した。

「教育？」バザロフは不意に言つた。「凡て人間は自分で自分を教育しなきやいけない、例へば僕がやつたやうに……。又時代といふことに就いて言ふと、何故吾々は時代に頼らなきやならんのだらうか？寧ろ時代をして吾々に頼らせたらいいのだ。いや、君、こんなことは皆淺薄だよ、背骨が缺けてるよ。それから男女間のかうした不思議な關係なんて一體何だ？吾々生理學者はその關係をよく知つてるよ。君が眼の解剖を研究すると、先刻話した謎のやうな眼差しなんてものは何處から出て來るんだね？そんなものは皆ロマンチックな、意味のない美學的な言ひ草さね。行つて甲蟲を見る方が增しだよ。」

此處で二人はバザロフの部屋に行つた。部屋にはもう、安煙草の匂ひに交つて、外科藥の臭氣らしいものが一杯に漂つてゐた。

八

パヴエル・ペトロウイッチは、弟が執事と用談をする席に長く止まつてはゐなかつた。その執事とい

ふ男は、脊の高い、瘦せた、肺病患者のやうに甘つたるい聲と意地惡さうな眼とを持つてゐて、ニコライ・ペトロウイッチの注意に向つては、何でも「左樣でございますね、旦那。」と答へる一點張りだつた。そして百姓たちを泥棒や醉漢にしようと試みてゐた。土地はつい最近に新組織に改革されたので新制度は、油の切れた車輪のやうに軋り合ひ、變な材料で拵へて手製の家具のやうに歪んだり、がたがた音を立てたりした。ニコライ・ペトロヴイッチは氣を落しはしなかつたが、時には溜息を吐いたり、又時には滅入つたりした。事物は何でも金がなくては旨く行かないことを彼は感じたけれども、その金は殆んど全部費ひ果されてゐた。アーカディがバザロフに言つたのは本當のことで、今までパヴエル・ペトロウイッチは一度ならず、弟を助けてゐた。パヴエルは幾度も、弟がどうしていいか解らず、頭を惱まし悶掻いてゐるのを見て、自分も思案に暮れながら窓際に行つた。そして兩手をポケットに突つ込んで、「だが、お前にお金を上げよう」と口の中で呟きながら金をやつた。然し今日は自分も一文も持つてゐないので、寧ろ座を外さうと考へたのだつた。農作上のいろんな小面倒なことが彼にはうるさかつた。それに、ニコライ・ペトロウイッチが、熱心で勤勉であるに係はらず、萬事を旨くやり了へないことが始終腹立たしかつた。とは言へ、何處にニコライ・ペトロウイッチの過失があるが、それは彼にも指摘することが出來なかつたらう。

「弟はたしかに實際的人物ぢやない、皆が弟を瞞すのだ。」と彼は考へて見た。けれども一方ニコライ・ペトロウイッチの方では、パヴェルの實際的才能を馬鹿に信じて、何時もその助言を求めてゐた。

「私は弱い甘い人間です。私は一生を野原の中に送つて來たんです。」とニコライは何時も言ふのだつた。「それにあなたは、世の中を無駄には見て來られなかつた。世間の人たちを見拔いてゐらつしやる鷲のやうな眼を持つてゐらつしやる。」

こんな言葉に對してパヴェル・ペトロウイッチはただ顏を反けるきりだつたが、別に反對もしなかつた。

パヴェル・ペトロウイッチはニコライを書齋に殘して置いて、家の表と裏とを分つてゐる廊下を歩いて行つた。そして低い戸口まで來た時、ちよいと躊躇して足を止めたが、やがて髮を引つ張りながら、その戸を叩いた。

「どなたですか？　お這入り下さい。」フェニチカの聲がした。

「私だよ。」とパヴェル・ペトロウイッチは言つて戸を開けた。

フェニチカは赤坊を抱いて坐つてゐた椅子を飛び上つて、直ぐにその赤坊を小娘の手に渡した。小娘は直ぐに部屋を出て行つた。フェニチカは急いで帽巾を眞直にした。

「御迷惑だつたら御免よ。」パヴェル・ペトロウイッチは彼女を見ないで言つた。「つい訊いて見ようと思つて寄つたんだがね……今日誰かが町へ行くさうだが、……私に綠茶を買つて來て貰へまいか。」

「承りました。どの位御入用なのでございますか？」とフェニチカは訊いた。

「ああ、半磅もあれば澤山。この部屋もあなたが變へてしまつたやうだね。」

彼は身のまはりを素早く見廻した。そしてその眼はフェニチカの顏にも辷つた。「此處にはカアテンがあるし、」と、彼は彼女が理解しないのを見て取つて、かう說明した。

「ああ、さう、カァテンですか、ニコライ・ペトロウイッチが下すつたんですけれど、ずつと以前から掛けてあるんでございますよ。」

「さうですか、この前あなたに會つてから、大分日が經つてるからね。今は此處も立派になつたよ。」

「ニコライ・ペトロウイッチのお蔭でございますの。」とフェニチカは呟いた。

「何時もゐる小さな部屋より此處の方があなたは氣持がいいかね？」パヴェル・ペトロウイッチは尤もらしく、然しちつとも微笑の影を見せないで訊いた。

「左樣でございます。前よりも氣持がよろしいと思ひますよ。」

「あなたの元ゐた處には今誰がゐます？」

「今は洗濯女がをりますの。」

「ああ！」

パヴェル・ペトロウイッチは默つてゐた。

「もう歸る氣だな。」とフェニチカは思つた。けれども彼は行かなかつた。彼女はその前に身動きもしないで立つてゐた。

「何で赤ん坊を向うに連れてつたんだね。私は小供が好きでね。だから見せて呉れないか。」

たうとうパヴェル・ペトロウイッチはかう言ひ出した。

フェニチカはどぎまぎして、同時に嬉しくなつた。彼女はパヴェル・ペトロウイッチを恐れてゐた。何故と言ふに、彼は餘り彼女と口を利いたことがなかつたのだから。

「ダニヤシャ、ミチヤを連れて來てお呉れでないか、どうか。」

フェニチカはかう言つた。（彼女は家中の者を誰でも親しく呼んだ）

「でも一寸待つて。着物を着せなきやいけないわね。」と言つてフェニチカは戸口に進んで行つた。

「そんなことはいいよ。」パヴェル・ペトロウイッチは聲を掛けた。

「直ぐに歸つて參りますわ。」とフェニチカは言つて、直ぐに出て行つた。

パヴェル・ペトロウイッチは一人で殘されて、今度は特別念入りに周圍を見廻した。彼が今ゐる、小さな、天井の低い部屋は、思ひ切つて小綺麗できちんと整つたゐた。新しく塗つた床のペンキの臭氣と加密列草の臭氣がしてゐた。壁に沿うて、故將軍ポーランドの市場で買ひ求めた、七絃型琴の背の附いた椅子が數脚竝べてあつた。一方の隅には中高の蓋の附いた、鐵の鋲を打つた箱の傍に、モスリンの帷が垂れと、その下に小さな寢臺架があり、その反對の隅には、聖ニコライの大きな黒つぽい聖像の前に、小さなラムプが點つてゐた。赤いリボンが吊つた、小さな印形の陶器が、突き出た金色の後光のあたりから、聖像の胸のあたりまで垂れてゐた。窓の傍には去年のジャムを詰めて念入りに口を縛つた青い罎が見られた。そしてその包紙の上には、フェニチカ自身が大きな文字で「グースベリイ」と書いてゐた。ニコライ・ペトロウイッチは特にこのジャムの保存してあるのを喜んだ。天井からは長い紐で、尾の短い鶯を入れた鳥籠が吊してあつた。その鶯は、絶えず囀りながら飛び廻つてゐるので、その鳥籠も絶えず搖れ動いた。そして菜種がぽたぽたと床に落ちて來た。壁の、小さな簞笥の上あたりには、旅廻りの寫眞屋が撮つた、幾つかの違つた服裝のニコライ・ペトロウイッチのどちらかと言へば悪い寫眞がかかつてゐた。又フェニチカ自身の寫眞もあつたが、それは全く失敗した寫眞で、作り笑ひをした眼のない顔が、煤けた枠の中に這入つてるきり、少しもはつきりした處はなかつ

た。一方、フェニチカの上には、ザアカジア風の外套を着たエルモロフ將軍が、その額に丁度乘れて來る、ピンで留めた小さな絹靴の下から、遠くコーカサス山脈を睨んでゐた。

五分間が過ぎた。隣室から、さわざわする物音、囁く聲が聞えた。パヴェル・ペトロウイッチは箪笥の抽出からマサルスキイの「銃兵」といふ野卑な本を抜き出した、數頁をめくつて見た。……戸が開いてフェニチカはミチャを兩腕に抱いて這入つて來た。彼女は小供に、襟を刺繍した、小さな赤い服を着せ、髮を振り、顔を洗つて連れて來た。赤ん坊は頗る丈夫さうに呼吸をし、全身をばたばたさせながら、小さな手を、如何にも健康さうに、振り動かしてゐた。けれども、立派な服といふことが確かに解るらしく、嬉しさうな表情が、小さな肥えた身體中に漲つてゐた。フェニチカは自分も髮を撫でつけ頭巾を整へたが、前のままでも充分によかつた。そして實際、丈夫な赤ん坊を抱いてゐる若い美しい母親くらゐ人を惹き付けるものが世に又とあるだらうか？

「何て肥つた子だらう！」とパヴェル・ペトロウイッチは愛想よく言つて、ミチャの小さな二重顎を、食指の爪で觸つた。赤ん坊は鶯の方を見やりながら笑ひ出した。

「伯父さんですよ。」とフェニチカは顔を小供の方に押しつけて、輕く搖りながら言つた。その間にダニシヤヤは窓先で靜かに香料を焚いて、その下に半ペニイの銅貨を置いた。

「幾歳になるのかね？」パヴェル・ペトロウイッチは訊いた。

「六月でございます。十一月が參りますと、七ケ月になります。」

「八月ではございませんか、フェドーシヤ・ニコラエヴナ。」少しおづおづして容子でダニヤシヤが口を入れた。

「いいえ、七月ですよ。どうしてそんな！」

赤ん坊は又くつくつと笑つて、鳥籠を瞶めてゐたが、不意に小さな五本の指で母親の鼻と口とを摑まへた。

「やんちや坊ねえ、」と言ひながら、フェニチカは顔を引つ込めようとはしなかつた。

「弟に似てるな。」パヴェル・ペトロウイッチは言つた。

「他の誰に似るわけがあらう？」とフェニチカは考へた。

「さうだ、」パヴェルは獨り言のやうに續けて言つた。「たしかに似てるわい。」

彼はぢつと、殆んど悲しさうな眼つきでフェニチカを眺めた。

「伯父さんですよ。」と、今度は小聲でフェニチカは繰り返した。

「おや！　パヴェル！　ぢや此處にゐたんですね？」

不意にかう言ふニコライ・ペトロウイッチの聲がした。

パヴエル・ペトロウイッチは急に慌しく振り返つた、顔をしかめながら。然し弟が實に嬉しさうな有りがたさうに自分を見るので、自分もその微笑に報ゐなければならなかつた。

「お前は素晴らしい赤ん坊を持つたね、」と彼は時計を出して見ながら言つた。「茶のことでやつて來たんだよ。」

さうして無雜作な顔を裝ひながら、パヴエル・ペトロウイッチは直ぐに部屋を出て行つた。

「兄さんは自分で來たのかい？」とニコライ・ペトロウイッチは訊いた。

「ええ、戸を叩いて這入つて入らつしやいましたの。」

「さうか、それからアーカシヤはその後お前に會ひに來たかね？」

「いいえ。私、以前の部屋に移つてた方がよくはございませんかしら？ ニコライ・ペトロウイッチ？」

「何故だね？」

「當分の内その方が一番よくはないかと思ひますの。」

「い……や、」ニコライ・ペトロウイッチは額を拭ひながら、口籠りながら言つた。「前にさうすればよかつたんだが……どうしたね、おい？」

彼は急ににこにこしながら赤ん坊の側に行つて、その頬に接吻した。それから、一寸前屈みになつて、ミチャの小さな赤い着物の上に置かれた牛乳のやうに白いフェニチカの手にも唇を當てた。

「ニコライ・ペトロウイッチ！ 何をなさいますの？」

彼女は眼を伏せたが、徐々に上眼づかひになつた。言はば、その眼瞼の下から、彼女が覗いて、優しく、そしてあどけなく微笑する時の表情は實に美しいものであつた。

ニコライ・ペトロウイッチがフェニチカと懇意になつたのは次のやうな譯であつた。彼は三年前の或夜、遠方の町の旅舍で一夜を過したことがあつた。彼は自分の宛てがはれた部屋の綺麗なのと、夜具の新鮮なのとに感心した。乾度主婦は獨逸人に相違あるまいな？ と彼はその時思つた。然し其主婦はロシア人で、年は五十ばかり、小さつぱりした服裝をして、感じのいい、氣の利いた、言葉のつつましやかな女であつた。彼はお茶の時に彼女と話をした。そしてひどく好きになつた。ニコライ・ペトロウイッチはその頃新しい家へ移つたばかりで、家の中では奴隷の召使を使ひたくなかつたので、普通の雇人を探してゐた。ところが、旅舍の主婦の方では又、その町へ來る旅客の少いことや、不景氣なことやなどの愚痴を零した。そこで彼は主婦に、自分の家に來て家政婦になつて呉れないかと申込んで見た。——彼女は承諾した。彼女の夫はずつと以前に亡くなつて、フェニチカといふ娘との二

入籍したつた。それから二週間も經たない内に、アリナ・サヴイシエナ（これがこの家政婦の名だつた）は娘を連れてマリーノへ來て、小さな部屋へ住むやうになつた。ニコライ・ペトロウイッチの見込みは旨く當つて、アリナは家政を首尾よく處理して行つた。當時十七になつてゐたフエニチカのことに就いては、誰一人その噂をする者もなく、その姿を見る者も稀であつた。彼女はひそやかに、そして眞面目に暮してゐた。さうしてニコライ・ペトロウイッチは唯日曜毎に、教會の中の何處かの隅にその、しなやかな白い顏の横を見るに過ぎなかつた。かうして一年以上の年月が經つてしまつた。

或朝、アリナは彼の書齋へ來て、何時ものやうに丁寧なお辭儀をしながら、娘の眼に煖爐の火花が這入つたのだが、若しどうにか出來るならば手當をして欲しいと賴んだ。ニコライ・ペトロウイッチは、誰でも樂隱居の人間がさうであるやうに、醫學を研究して、簡易治療法などの本を書いたことさへあるので、直ぐアリナに娘を連れて來るやうにと言つた。フエニチカは主人から呼ばれたと聞いて非常に恐がつたが、でも兎に角、母の後に蹤いて行つた。ニコライ・ペトロウイッチは彼女を窓側へ連れて行つて、兩手でその頭を抱へた。そして赤く腫れた眼を充分に檢査して、溫濕布をするがいいと言ふので、自分でそれをしてやりながら、手巾を破り、その仕方を教へてやつた。フエニチカはニコライの言ふことをすつかり聞いてから、歸らうとした。

「馬鹿な子ね、旦那樣のお手に接吻なさいよ。」と、その時アリナが言つた。ニコライ・ペトロウイッチは自分の手を彼女に差出さないで、自分から、稍々周章てながら、彼女の下げた頭の髮の分け目に接吻した。

フエニチカの眼は又直ぐによくなつたけれども、彼女がニコライ・ペトロウイツチに與へた印象は直ぐには消えなかつた。彼は、その純な、しほらしい、おどおどと擧げた顏を幾度となく夢想した。彼は幾度となく、その掌に、彼女の柔らかな髮の毛を感じ、そして、無垢な、微かに開いた唇と、その中から日光の輝きを受けてほんのり光る眞珠のやうな齒を見た。彼は教會で、非常な注意を以て彼女を眺めるやうになり、彼女と話をしようと思ふやうになつた。最初の內、彼女は彼を羞しがつてゐた。そして或日、夕方のことだつたが、彼女は麥畑の中の狹い道で彼に出會はして、面と會ふのが厭だつたので、麥の穗や苦蓬の生え繁つた、背の高いライ麥の中へ駈け込んでしまつた。彼は彼女の頭が、小さな獸のやうに、黃金色の麥の穗の間から覗いてゐるのをちらと見て、優しく聲を掛けた。

「今晩は、フエニチカ！　喰ひつきはしないよ。」

「今晩は。」と彼女は小さく答へたきり、隱れ場所から出て來ようとはしなかつた。

だんだんに彼女は彼に對して打ち解けるやうになつたけれど、然しまだ彼の前では、羞しがつてゐ

た。その内に、彼女の母のアリナは急にコレラで死んでしまつた。フエニチカはどうなつたか？　彼女は母から秩序と規則と責任とを愛する氣質を受け繼いだ。然し彼女はそんなに若く且つ一人ぼつちであつた。

ニコライ・ペトロウイッチの方は、そんなに善良で物を考へてゐた……それからの事は此處に述べる必要もあるまい。……

「ぢや兄さんはお前に會ひに來たんだね？」とニコライ・ペトロウイッチは訊いた。「戸を叩いてから這入つて來たの？」

「ええ。」

「さうか、それはよかつたな。さあ、ミチヤを搖すぶらして呉れ。」

かう言つてニコライ・ペトロウイツチはミチヤを天井に屆くばかりに搖り始めた。赤ん坊は非常にきやつきやつと喜んだが、母親は非常に心配して、赤ん坊が跳ね上る毎に、その小さな露な足へ自分の腕を差し延べた。

パヴエル・ペトロウイッチは美術的な自分の書齋に歸つた。壁は、綺麗な鼠色の縣布で蔽はれ、五色のペルシヤ羅紗の上に吊した武器が釘で打ちつけてあり、暗綠色の天鵞絨を以て裝飾した、胡桃材

の家具、古い黒樫で造つたルネッサンス式の本箱、莊麗な書物卓子の上に載せられた銅の彫像、開き煖爐、さうしたものが部屋にはあつた。彼は長椅子に身體を投げ出して、兩手を頭のうしろに組み、ぢつと身動きもせず、殆んど絶望したやうな顔をして天井を見詰めてゐた。顔へ反射するその壁の光を避けるためか、それとも他に何か理由があつてか、彼は立ち上つて、重苦しい窓のカアテンを引き、再び長椅子に身を投げた。

九

同じ日にバザロフもフエニチカと近づきになつた。彼は庭の中を、アーカデイと一緒に散歩しながら、彼に、何故ある種の樹木、殊に樫の木がよく成長しなかつたかといふことを説明してゐた。

「君は此處へ第一に白楊か、でなければ檜か、菩提樹かを植ゑればよかつたんだ、幾らか肥土をやつてね。向うの阿亭はよく出來たね。何故つてあれはアカシヤとライラックだから。ああした木はあまり手入れをしなくつても濟むから都合のいい奴さ。だが其處に誰かゐるやうだぜ。」

阿屋の中にはフエニチカが、ダニヤシヤとミチヤと一緒に腰を掛けてゐた。バザロフは立ち止まつた。アーカデイはもう古い友達のやうにフエニチカに會釋した。

「誰だい？」バザロフは傍を通り抜けると直ぐに訊いた。「何て綺麗な女だらう！」

「誰のことを言つてるんだい？」

「わかつてゐるだらう、あの中には一人しか綺麗なのはゐなかつたよ。」

アーカディは一寸どぎまぎしないではなかつた。そしてバザロフにフェニチカのことを簡單に話して聞かせた。

「成程！」とバザロフは言つた。「君のお父さんは仲々話せるね。僕はあの人が好きだよ、君のお父さんがね。はは！　あの人は愉快な人だ。だが僕達もお友達になりたいね。」彼はつけ加へて阿亭の方へ引き返して來た。

「イエフゲニイ！」とアーカディは彼の後から喫驚りして吶鳴つた。「お願ひだからね、することに氣をつけてくれ給へ。」

「心配し給ふな、どうしたらいゝか位は、わかつてるよ。――僕は馬鹿ぢやないからね。」

彼はフェニチカの傍へ寄つて、帽子を取つた。

「始めてお目にかゝります。」彼は丁寧にお辭儀をしながら、「僕はアーカディ・ニコラエウイッチの友達で、罪のない男でございますよ。」

フェニチカは腰掛から立ち上つて、無言で彼を瞶めた。バザロフは續けて行つた。

「何て立派な坊ちやんでせう！　御心配なさらないで下さい、僕が褒めたために惡くなつたことはまだありませんから。然しその赤ちやんの頬は、何故そんなに赤いんでせう？　歯が生えてゐますか？」

「えゝもう四枚生えましたが、まだ歯莖が腫れてゐますの。」とフェニチカは答へた。

「どれ拜見。御心配なさいますな、僕は醫者ですから。」

バザロフはは赤ん坊を自分の手に抱き取つた。フェニチカも、ダニヤシヤもひどく驚いたことだが、赤ん坊はちつとも駄々をこねもせず、恐がりもしなかつた。

「わかつた、わかつた……。何でもありませんよ。何處も惡い處はありません。今に立派に揃ふでせう。若し何かいけないことがあつたら、僕におつしやい。それからあなたはすつかり御丈夫なんですか？」

「えゝすつかり。神樣の御蔭で。」

「神樣の御陰で、ほんたうに、――それは何よりのことです。それからあなたは？」と彼はダニヤシヤの方を振り返つた。

ダニヤシヤは主人の家の中では極く愼み深くつて、門からちよつと出るとお轉婆な娘であつたが、

返事の代りに、くすくすと笑つたきりであつた。

「成程それは結構です。さあ赤ちやんを。」

フェニチカは手に赤ん坊を受取つた。

「何てあなたに大人しく抱かれてゐたんでせう！」と彼女は低い聲で言つた。

「子供は僕には何時も愛想がいいんですよ。」バザロフは答へた。「僕はその術を知つてますからね。」

「子供は誰が自分を可愛がつてくれるか知つてるんでございますわね。」とダニヤシヤが言つた。

「さうね、きつとさうなんだよ。だつて、ミチヤは人によると、どんなことをしても、行かうとしないんだから。」

「僕の處へは來るでせうか？」

アーカデイは暫く、遠方の方に立つてゐたが、この時阿亭へやつて來てから訊いた。そしてミチヤにお出でお出でをしたが、ミチヤは頭を後へ反らせて、泣き出してしまつた。フェニチカは全く困つてしまつた。

「その中に、僕になついてしまつた時のことにしませう。」とアーカデイは別に氣にもかけない風で言つた。かうして二人の友達は去つて行つた。

「あの人の名は？」バザロフは訊いた。

「フェニチカ……フェドシヤと言ふんだ。」アーカデイは答へた。

「そしてお父さんの名は？　それも知つておかなきやいけないからね。」

「ニコラエヴナ。」

「さうか、あの人があまりどぎまぎしないところがいいね。人によつてはその點を惡く思ふかもしれないけれど。いや、下らない！　あの人をどぎまぎさせるやうなことは、何もないぢやないか？　あの人は母親だ。――實に立派なものだ。」

「あの人は實に立派さ。然し僕の親父は。」とアーカデイは言つた。

「君のお父さんもやはり立派さ。」バザロフは口を挾んだ。

「うん、いや僕はさう思はないんだ。」

「餘分の相續人が出來ることは君の氣に入らないんだらう？」

「僕をそんな風に考へるなんて、恥づかしくはないかね！」とアーカデイは眞赤になつて言つた。「僕はさういふ點から親父を惡いと考へてるんぢやないんだ。僕は親父が彼女と結婚すべきだと思つてゐる。」

「おやおや！」バザロフは悠々として答へた。「何て結構なことだらう！。君はまだ、結婚について意義を認めてゐるんだね。僕はさうとは思はなかつた。」

二人の友達は默つて五六歩歩いた。

「僕は君のお父さんのやつてることを全部見廻つたよ。」バザロフはやがて始めた。「牛は駄目だし、馬は失敗だし建物はよくないし、雇人達はなまけ者らしく、監督と來たら、馬鹿か、惡者だか、まだよくわからない。」

「今日君はちつと何かにつけてひどいよ、イエフゲニイ・ワシリエウイッチ。」

「それに善良な百姓達は君のお父さんをどうにもならなくしてしまふね。君は知つてるかい、『ロシヤの百姓は神樣さへ瞞す』といふ諺を。」

「僕も伯父の考に贊成して來たよ。君は確にロシヤ人に對して慘酷な意見を持つてゐるんだね。」アーカディが言つた。

「正にさうさ！　ロシヤ人の唯一美點は、自分自身について、最も情ない意見を持つてゐることだ。二と二を加へて四になるといふことが問題で、その他は一切下らないことさ。」

「ぢや自然も下らないことかい？」アーカディは、まだ空高く昇らない太陽の、美しく柔く光の流れてゐる、遠くの鮮やかしい野原を物思はしげに眺めやりながら訊いた。

「自然だつて、君が理解してるやうな意味でなら、下らないことさ。自然は殿堂ではなく工場だ。そして人間はその工場内の職工だよ。」

その時、家の中から、ヴイオリンセロの餘韻の籠つた音色が聞えて來た。誰かが、巧くはないけれど、情熱をこめて、シューベルトの「期待」といふ曲を彈いてゐるのだつた。そして節律は蜜のやうに快く空氣の中を漂つて來た。

「何だい、あれは？」とバザロフは驚いて訊いた。

「僕の親父さ。」

「君のお父さんはヴイオリンセロを彈くのかい？」

「さうだよ。」

「そしてお父さんは幾つだつたけな？」

「四十四だ。」

バザロフは不意に大きな聲で笑ひ出した。

「何を笑ふんだよ？」

「まあ、四十四の男がさ、この田舍の旦那樣がさ、ヴイオリンセロを彈くなんて！」

バザロフは笑ひながら立ち去つてしまつた。然しアーカデイは父をひどく尊敬してゐるので、この時も微笑さへもしなかつた。

十

二週間程經つた。マリーノでの生活は今迄通りに進んで行つた。アーカデイは怠けて遊び廻り、バザロフは働いた。家の者はみんな彼に、彼の無頓着な態度と亂暴な唐突の言葉とに馴れて來た。その中でも、フェニチカは、ある夜、ミチヤが痙攣を起したといふので、彼を起しに使をやつた程、遠慮のない間柄になつてゐた。彼はその時やつて來て、何時ものやうに、半ば冗談を言ひながら、半ば欠伸をしながら、二時間程彼女の傍にゐて子供の治療をした。

パヴエル・ペトロウイツチは、それと反對に心からバザロフを憎むやうになつてゐた。バザロフを、傲慢で、厚かましく、皮肉で、野卑だと認めた。彼は、バザロフが少しも自分を尊敬しない、輕蔑するきりだ、この自分、パヴエル・ペトロウイツチを！ と思つた。ニコライ・ペトロウイツチは、どちらかと言へば、この若い虚無主義者を怖れてゐて、彼がアーカデイに果して美良な影響を與へるかど

うかを疑つてゐたけれども彼はバザロフの話を聞くのは好きで、其科學的または化學的の實驗をする席に列るのを喜んでゐた。バザロウは顯微鏡を持つて來てゐたので幾時間も其方で忙しがつてゐた。召使達も彼が自分達を面白がらせてくれる人間だと思つた。彼等はみんな、彼を主人ではなく、自分達仲間の一人のやうに感じてゐた。ダニヤシヤは何時も彼に對つて笑ひかけようとし、兎のやうに跳ね歩きながら、そつと意味ありげな眼差しを投げかけるのであつた。思ひ切つて間の拔けた何時も額へわざとらしい皺を寄せてゐるピオートル、當世風で、少しは讀み書きも出來、自分の上着へ刷毛をかけるだけの働きを持つてゐるピオートル、其ピオートルもバザロフが一寸振り向くと、すぐ愉快げににこにこ笑ひ出した。農場の子供達はただ小犬のやうに、「このお醫者樣」の後を追つかけ廻した。だが老人プロコフイッチだけは僕を好かなかつた。で、食事の時には、氣むつかしい顏をして皿を渡し、「牛殺」しだの「成上り者」だのと呼んだ。そしてあの大きな髯の樣子は、檻の中の豚のやうだと言つた。プロコフイッチも彼自身のつもりでは、丁度パヴエル・ペトロウイッチ程度の貴族主義者であつた。

一年の中で一番いい時候――あの六月の初めが來た。天氣は素晴しく晴れつづいた。遠方でコレラが流行つてゐるといふ噂はほんとうであつたが、この地方の人々はまだその來襲を受けるには間があつた。バザロフは、思ひ切つて早く起き、二三哩歩くのが常であつた。ただの散歩ではなく(彼は目的

なしの散歩には堪へられなかつた）植物や昆蟲の標本を採集するためであつた。時にはアーカディを一緒に連れ出した。歸り途には、おきまりのやうに議論に花が咲いて、而もアーカディがバザロフよりも餘計喋るにも係らず、いつも負けるのであつた。

或日二人の歸りが遲かつた、ニコライ・ペトロウイッチは庭へ二人を迎へに行つて、阿亭まで來ると、不意に、二人の青年の急いだ足取りと話聲とが聞えて來た。彼等は阿亭の向側を歩いてゐたので彼の姿に氣がつかなかつた。

「君は僕の親父をよく知らないんだ。」とアーカディが言つた。

「君のお父さんはいい人だよ。」とバザロフは答へた。「然し時代遲れだ、盛りは過ぎてしまつた。」

ニコライ・ペトロウイッチは熱心に耳を傾けた……アーカディは返事しなかつた。盛りの過ぎてしまつたその人は、二分間許りぢつと其處に立ち止まつてゐたが、そつと家の方へ引き返した。

「一昨日のことだがねえ、お父さんがペーシュキンを讀んでゐたのを見たよ。」とバザロフは續けて言つた。「あんなものを讀んだつて、世の中の役には立たないといふことを、お願ひだからね、あの人に說明しておあげよ。子供ぢやないんだらう、あんな下らないものは捨ててもいい時だ。こんな時勢にロマンティックでゐるなんて、一體どんな氣かねえ！意味のあるものを何か讀ませてあげ給へ。」

一何を讀ませたらいいだらうね？」アーカディは訊いた。

「ビュヒネルの『物質と力』が先づいいと思ふね。」

「僕もさう思ふよ。『物質と力』なら通俗的な言葉で書いてあるから……。」とアーカディは同意するやうに言つた。

「してみると、」と、その同じ日の晝食後に、ニコライ・ペトロウイッチは、書齋で兄に言つた。「もうあなたや私は時代遲れなんです、盛りは過ぎたんです。さうだ、おそらくバザロフの言つたことは正しいでせうよ。然し、打ち明けて言ふとただ一つ殘念なことがありますね、つまり私がアーカディと親しくなりたいと實に望んでゐたのに、それが、私だけ後へ殘され、彼が先へ進んでしまつたので、お互ひに理解しあふことが出來なくなつたことです。」

「どうして彼が先へ進んだのだ？　又どういふ風にして、もう吾々よりも優れてるんだね？」とパヴエル・ペトロウイッチは堪らないやうに叫んだ。「そんなものを彼の頭に詰め込んだのは、あの傲慢な男、あの虛無主義者ぢやないか。私はあの醫者といふ奴が憎らしい。私の考では、彼奴はへつぽこだよ。蛙なんか寄せ集めて來たつて、醫學さへ少しも知つてやしないんだと思ふ。」

「いや、兄さん。さう言つてはいけません。バザロフは利口な人間ですし、自分の專門のことは知つてゐますよ。」

「それにあの男の自惚は何だか胸糞が悪くなるよ。」パヴェル・ペトロウイッチは又言つた。

「ええ、自惚れてはゐます。」ニコライ・ペトロウイッチが口を入れた。「でも、あれがなくては、どうにもならないらしいですね。ただ私は今まで氣附かないでゐたことがありますよ。私はあらゆる事を時代に順應してやつてゐると考へてゐました。私は模範的農場を開拓して、百姓たちにはよくし、この地方を通じて急進派と稱せられるやうになり、本も讀み、勉強もしました。時代に適應するためには、あらゆる方法を講じて參りましたよ。――而もあの二人は、私の盛りは過ぎたと言ふんです。そして兄さん、私もさうだと考へ出したのです。」

「何故だね？」

「理由をお話しませう。今朝、私は坐つてプーシュキンを讀んでゐました……丁度チプシイス のところだつたと覺えてゐますが……不意にアーカディがやつて來て、物も言はず、まるで子供にでも對するやうに、優しい憐れむやうな顔つきをして、プーシュキンを取り上げ、他の本を眼の前に置いて行つちまひました……笑ひながらね、――それは獨逸の本でしたよ。そしてプーシュキンは持つてつて

しまつたのです。」

「何だつて！　どんな本を寄越したんだね？」

「これです。」

そこでニコライ・ペトロウイッチは、上着のうしろのポケットから、有名なビュヒネルの著書第九版を引き出した。

パヴェル・ペトロウイッチは手に取つてめくつて見た。

「ふん！」彼は唸るやうに言つた。「アーカディ・ニコラエウイッチが自分の手でお前を教育するのか。うん、讀まうとしたかね？」

「ええ、讀まうとしました。」

「うん、どう思つたね？」

「私が間抜けなのか、それとも、これが皆下らないからです。私の方が間抜けなんだらうと思ひますよ。」

「獨逸語は忘れなかつたかね？」パヴェル・ペトロウイッチが訊いた。

「ええ、獨逸語は解ります。」

パヴエル・ペーロウイッチは再び、手の中でその本をめくつて見た。そして上眼づかひに弟を見やつた。二人とも默つてゐた。

「ああ、ついでだけれどと、」ニコライ・ペトロウイッチは明らかに話頭を代へようと考へてゐた。「コリアジンから手紙を貰ひましたよ。」

「マトヴイ・イリイッチかね？」

「さうです。――地方視察に來たのださうです。今では立派になつたんで、手紙を寄越したのは、親戚として又會ひたいと言ふのです。あなたと私とアーカデイを町に招待するといふことです。」

「行くつもりかね？」パヴエル・ペトロウイッチは訊いた。

「いいえ、あなたは入らつしやいますか？」

「いや、私も行くまい。下らないことのために四十哩も、のこのこ出掛けるのはつらいからな。マチウは、景氣のいいのを見せつけようといふんだらうよ。勝手にしろ！　あの男はこの地方の人たち皆に御世辭を言つて貰ひたいんだ。吾々がゐなくつても充分やつて行けるよ。實際立派なものさ、樞密顧問官といふんだからな！　私も今まで勤めてゐたら、軍服を着てゐたら、今時分將軍副官位にやなつてる筈だがな。それに、御存知の通り、お前も私も時代おくれと來てるからね。」

「さうですよ、兄さん。棺桶をあつらへて、手を胸に十字を組んでゐてもいい時らしいですね。」ニコライ、ペトロウイッチは溜息を洩らして呟いた。

「うん、私はさう容易くは參らないぞ、」と元の方は答へた。「眼の前であの醫者と一喧嘩やるんだ、ちやんと解つてるよ。」

喧嘩は同じ日の夕方茶の時に起つた。パヴエル・ペトロウイッチは客間に這入つて來て、苛立たしい氣持で決心して、ちやんと口論の用意をしてゐた。ただ敵に挑みかかる口實を待つてゐたのだつた。然し長い間その口實は現れて來なかつた。キルサノフ老人（バザロフはパヴエルとニコライとをかう呼んでゐた）の前では、バザロフは相變らず餘り物を言はないで、而もその夕は不機嫌で、默つたまま茶を幾杯も呑み干してゐた。パヴエル・ペトロウイッチは我慢が出來なくつて胸がわくわくした。が、遂にその望みが遂せられた。

會話が近處のある地主の一人に移つた。

「腐つた貴族風なでも紳士」とバザロフは無雜作に言ひ放つた。彼はペテルスブルクでその男に出會つたことがあるのだつた。

「一寸お訊きさせて頂きたいが、」とパヴエル・ペトロウイッチは脣を顫はせながら言ひ出した。「あな

たのお考に依ると、『腐つた』といふ言葉と『貴族的』といふ言葉とは同じ意味なんですか？」

「僕は『貴族風なでも紳士』と言つたんです。」とバザロフは億劫さうに茶を啜りながら答へた。

「正にさうです。けれどもあなたは、貴族といふことを、貴族風なでも紳士といふことを同一視してゐらつしやるらしい。私の意見はさうでないことを表明する義務があるやうに思ふ。世間の人々は誰でも私が自由思想家であり、進歩主義に沒頭してゐる人間であることを知つてゐます。然し私は、正にその理由のために貴族、眞の貴族を尊重します。どうか記憶して置いていただきたい。」（この言葉を聞いてバザロフは眼を擧げてパヴェル・ペトロウイッチを眺めやつた）パヴェルは更に毒々しく繰り返して言つた。「どうか記憶して置いていただきたい、イギリスの貴族、彼等は寸毫も自分たちの權利を曲げない。そして、その理由のために、又他人の權利を尊重する。彼等は自分たちにとつて與へらるべき實行を要求する。そしてその理由のために自分自身の義務をも履行する。イギリスに自由を與へた者は貴族で、祖國のためにそれを維持してゐるのも貴族です。」

「そのお話は幾度も聞かされました。」バザロフは答へた。「然しそれで何を證明しようとなさるんですか？」

「私はそれで證明しようとするのです、」（パヴェル・ペトロウイッチは立腹した時に、わざとこんな風

に言葉を切つた。尤も、言ふまでもなく、さうした形式が嚴密な意味で文法的でないことは自分でもよく知つてゐた。この氣まぐれな言葉づかひは、アレキサンダア時代の風習の名殘であると、思はれる。當時の貴族たちは、稀に自國語を使ふ時、かうした自墮落な形式を用ゐるのが常で、それは「吾々は勿論ロシアに生れた。が、同時に、大なる貴族であるから、學者の言ふ文法の法則などは忘れてもいいのだ。」と言ふばかりの調子であつた。）「私が證明しようといふのです、それは、個人的尊嚴の感覺なくしては、自重心なくしては、――而もこの二つの情緒は齊しく貴族の中に發達してるんですが――社會的……即ちビアン・ププリック……社會的組織の確乎たる基礎が得られないといふことです、個人的性格ですね、――これが大切なことですよ、人間の個人的性格は、凡てあらゆる物がその上に築かれるものである以上、岩石のやうに堅固でなければなりません。例へば、私は、あなたが私の習慣や服裝や洗錬などを、實際のところ、滑稽に考へてゐらつしやることを知つてゐます。然しそれは悉く自尊の念から、義務の念から、――さうだ、實際、義務の念から出發してゐるんですよ。私は田舍に暮してゐる、野原の中に住んでゐる。然し自分を賤しくすることは出來ない。私は私自身の中の人間を尊重してゐます。」

「お伺ひして見たいのですが、パヴェル・ペトロウイッチ、」とバザロフは口を入れた。

「あなたは御自分を尊重して、手を組んでおゐでになる。けれどもこれがあなたの所謂社會組織にどんな利益を與へますか？　たとひ、あなたが御自分を尊重しなかつたところで、矢張りあなたは同じことをなさるでせうよ。」

パヴェル・ペトロウイッチは青くなつた。「それは違つた問題です。何故私が手を組んでゐるか、あなたはさう言ひたいんだが、それは絶對に今説明する必要はありません。私はただ、貴族主義が一つの主義であり、そして、今日の世では馬鹿か不道德漢でない以上、主義なくしては生き得ない、といふことを言ひたいのです。私はアーカデイが家に歸つて來た翌る日話しました。で、今繰り返して言ひますよ。さうぢやあるまいか、ニコライ？」

ニコライ・ペトロウイッチは頷いた。その間にバザロフはこんなことを呟いてゐた。——

「貴族主義、自由主義、進歩、主義、そんなことを考へてゐらつしやると、どんなに外國の……語らない言葉が澤山あることだらう！　ロシヤ人にとつては皆無用の言葉です。」

「あなたに從へば何が有用なんです。あなたの言ふことを聞けば、吾々は人道と法則との外に立たなければならない。ねえ——史學の論理が要求するに……」

「然し論理が吾々にとつて何になるんです？　そんなものもなくて濟んで行けますよ。」

「どういふことです？」

「かうですよ。あなたが空腹の時に麪麭の一片を口に入れる。それには論理は不必要だと思ひます。さうした抽象論が吾々にとつて何になるものですか？」

パヴェル・ペトロウイッチは恐ろしくなつて手を擧げた。

「結局あなたの言ふことは解らない。あなたはロシア人を侮辱なさる。主義や法則を認めないなんてことがどうして出來るか、私には解らない。ぢやあなたは何に依つて行動なさる？」

「僕が前に話したぢやありませんか、叔父さん、吾々は如何なる權威をも認めないのだつて。」とアーカデイが口を挿んだ。

「吾々は利益があると認めるものに依つて行動します。」バザロフは言つた。「現在では否定が最も利益があるので、——それで吾々は否定します。」

「あらゆる物を？」

「あらゆる物を！」

「え？　美や詩歌のみでなく……言ふのも恐ろしい……」

「あらゆる物をです。」

バザロフは悠々と落ちついて繰り返した。

パヴエル・ペトロウイツチは彼をまぢまぢと瞶めた。かうまでとは豫期してゐなかつた。アーカデイは喜んで一寸顔を赤くした。

「だがお聞きしたいんですが、」とニコライ・ペトロウイツチが口を入れて、「あなたはあらゆるものを否定なさる。と言ふよりも、あらゆるものを破壞なさる。……然し人間は又建設もしなけりやなりますまい。」

「それは今吾々のすべき仕事ぢやありませんよ……。先づ土臺を一掃する必要があるのです。」

「人間の時代狀態がそれを要求するのです。」アーカデイが威嚴をつくろつて言つた。「吾々は、かうした要求を實行せざるを得ないのです。個人的利己主義の滿足に屈服する權利はないのです。」

この最後の文句は明らかにバザロフを不快にさせた。其處には哲學的臭味、即ちロマンチシズムがあつたからである。バザロフは、哲學をもロマンチシズムと呼んでゐたのだ。然し彼はこの若い弟子の意見を訂正する必要はないと考へた。

「いや、いや！」と、パヴエル・ペトロウイツチは不意に元氣よく、「私はあなた方、青年がロシア國民を眞に了解してゐるとは信じたくない。あなた方がロシア國民の要求と努力とを代表してゐる者と

は信じたくない。いや、ロシア人はあなた方の想像してゐる如きものではない。彼等は傳統を神聖に保つてゐる。彼等は家長主義の民族です。彼等に信仰なくしては生きて行けないのです……。」

「僕はそんなことを論じるつもりではありません。」バザロフは遮つた。「その點であなたの意見が正しいことは贊成してもいいです。」

「然し私の意見が正しいなら……」

「矢張り同じこと、何の證明にもなりませんよ。」

「正に何の證明にもなりません。」とアーカデイはバザロフの言ふ通りを繰り返した。敵の形勢が險惡になつたので、もう自分の方が不意打ちを喰ふやうなことがなくなつたと見極めてゐる、慣れた將棋打ちのやうな確信を以て彼は言つたのだ。

「何故何の證明にもならないんです？」パヴエル・ペトロウイツチは驚いて呟いた。「ぢや諸君は人民に反抗する氣でなければならない？」

「若し吾々がさうだつたら、どうしたんです？」バザロフは叫んだ。「彼等は、雷が鳴ると豫言者イリヤが車に乘つて空中を驅け廻るのだと思つてゐます。とすればどうです？ その意見に同意しなければならないでせうか？ それに彼等人民はロシア人です。僕も亦ロシア人ぢやありませんか。」

「いや、そんなことを全部おつしつた以上、あなたはロシア人ぢやありませんよ。私はあなたをロシア人と認めることは出來ません。」

「僕の祖父はこの土地を耕しました。」バザロフは傲然として答へた。「吾々の内どちらが、——あなたと私とです、どちらがより多く同國人として認められるか、あなたの使つてゐらつしやる百姓に訊いて御覽なさいまし。あなたは百姓たちに話すべきさへ知つてゐらつしやらない。」

「然るにあなたは百姓に話し掛けて同時に輕蔑してゐる。」

「成程、彼等は輕蔑に價するのだとお考へ下さい。あなたは僕の態度の過失を發見なさいます、けれども、それは僕が偶然に執つた態度であること、そしてあなたがしきりに云々なさるその國民的精神の所產ではないことを、どうして御存知です？」

「何て言ふことだ！　虛無主義者も大層役に立つものだ！」

「虛無主義者が役に立つかどうか、吾々にとつて、どうだつていいことです。だつて、あなただつて、御自分が無用な人間だとは思つてゐらつしやらないでせう。」

「皆さん、皆さん、個人的のことは言はないで、どうか！」ニコライ・ペトロウイッチは椅子を離れて聲を掛けた。

パヴエル・ペトロウイッチは手を弟の肩に掛けて、又席に就かせた。

「心配しないでおゐでよ」パヴエルは言つた。

「吾々のお友達——このお醫者から、かくも冷酷に笑はれてゐるところの、この威嚴といふ感覺があるので、私は自分を忘れるやうなことはないよ。」

かう言つて改めて彼はバザロフの方に向き直つた。「お訊きしたいが、あなたは御自分の意見が新奇だと、多分考へてゐられるんですな？　ところがそいつは全然誤謬ですよ。あなたの辯護されるその物資主義は、既に一度ならず流行つたものだが、何時も證明されましたよ、不充分な……」

「あ、又外國語が！」「不意にバザロフは遮つた。彼は胸が惡くなり出して、顏は奇妙なざらざらとした銅色に變つて來た。「第一に、吾々は何物をも辯護しないんです。それは吾々の道ぢやありません。」

「ぢや、何をなさるんです？」

「何をするか申し上げませうか。余り昔のことではないが、吾々は、何時もこんなことを言つてゐました、官吏が賄賂をとるとか、道路も商業も眞の裁判もないとか……」

「ああ呼つた。あなたは改革主義者ですね。——さう言はれていいんでせう。私もあなたの改革には多くの點に於て贊成しなきやなりませんが、然し……」

「そこで吾々は、現代の社會的缺陥に關しての議論、絶えざる議論、議論のための議論が、何時の價値もないこと、凡て衒氣と皮相と以外には導かないといふことを思ひました。先覺者だの、所謂進歩的人物だの、改革主義者だのは何等用をなさない、吾々は愚かしい事に熱中して、藝術とか議會とか陪審官審問とか、その他あらゆることに就いて喋り散らしてゐるが、その一方に、麵麭を得るの問題があり實に大きな迷信が吾々を苦しめ、各種の計畫は單にそれを實行するに足るだけの誠實な人間がゐないために失敗に歸し、政府が熱心に努めてゐる農奴解放も何等の效果擧らず、それといふのも、百姓たちが居酒屋へ行つて醉つ拂ふために喜んで泥棒をするから、といふ始末なのです。」

「さうだ。」とパヴェル・ペトロウイッチが口を挿んだ。「さうだ、あなたはそれを凡て信じて、あなた自身も、何事をも眞面目には企てまいと決心なすつた。」

「何事をも企てまいと決心したんです。」バザロフは苦々しげに繰り返した。この人間の前で何の理由もなく、こんなに打ち明けたことを彼は不意に心苦しく感じた。

「然しただ侮辱なさるだけですか？」

「ただ侮辱するきりです。」

「そしてそれが虚無主義と呼ばれるものですか？」

「それが虚無主義と呼ばれるものです。」

バザロフは今度は一流の粗雜な調子で又向うの言ふ通りを繰り返した。パヴェル・ペトロウイッチは顔を少し擧げた。

「成程、さうですか！」と彼は妙な風に落ちついた聲で言つた。

「虚無主義は凡て吾々の苦惱を癒して呉れ、そして諸君は吾々の英雄であり救世主です。然るに何故諸君は他を、これ等改革主義者をも侮辱なさるのです？　あなたも皆と同じやうに隨分議論をするぢやありませんか？」

「どんな過ちが吾々にあるにしても、その點に於ては間違ひありませんよ。」バザロフは口の内で呟いた。

「ぢや、實行なさるんですか、え？　實行の準備をしてらつしやるんですか？」

バザロフは返事をしなかつた。或顫へのやうな感じがパヴェル・ペトロウイッチの身内を過つた。然し彼は直ぐに自分を制した。

「ふん……實行、破壊……然し何の故といふことを知らないでゐながら、どうして破壊するだらう？」

彼は續けた。

「吾々は破壊します。何故といふに吾々は力だからです。」とアーカディが言つた。

パプエル・ペトロウイッチは甥の方を眺めて笑つた。

「さうです、力は說明すべからざるものです。」アーカデイは身體を起しながら言つた。

「不幸な子供だ！」とパプエル・プトロウイッチは歎いた。彼はたしかに、これ以上嚴然とした態度を持することが出來なかつたのだ。

「若し諸君が祖國に何をしつつあるかといふことを悟ることさへ出來たならなア。いや、これでは天使も辛抱し切れないよ！　力だつて！　未開のカルマックやモンゴリア人にも力はある。けれどもそれが吾々にとつて何だ？　吾々にとつて貴重なものは文明だ。その文明の結んだ果實が無價値だと言つてはいけない。何よりも哀れなへつぽこ畫工だつて、一晚五錢で無踏曲を彈く男だつて、諸君よりは役に立つ。何故なら、彼等は文明を代表するものであつて、野蠻なモンゴリア人の力を代表するものではないからです！　諸君は自ら進步した人間だと思つてゐる。而も實はカルマック人の小屋の中に居るのが本當なんだ！　力だつて！　氣をお附けなさい、元氣のいい諸君、諸君はわずかに四五人だが、他の人間は幾百萬とゐますからね、ニの連中は、その神聖な傳統を、決して諸君に蹂躪させないで、反對に諸君を踏み破るでせう！」

「踏み破られるならば、どうかお役に立たせて下さい。」バザロフは答へた。「然しそれは公の問題です。吾々はあなたの考へてゐらつしゃる程少數ぢやありまんよ。」

「え？　あなたは眞面目に、全人民を同意させようと思つてるんですか？」

「全モスコウも、御承知の通り蠟燭一本で燒き拂はれますからね。」（註、これはロシアの諺である。）からバザロフは答へた。

「さうだ、さうだ、最初は殆んどサタンのやうな傲慢、それから嘲笑になる、――それが靑年を惹きつけ、無汚な少年の心を奪ふところだ。此處にもその一人がゐて、あなたの足の下の土を崇拜しようとしてる。この子を御覽なさい！（アーカデイはさう言はれて顏を反けて眉を顰めた）而もこの惡疫はもう蔓延した。噂に依るとローマではロシア人の畫家が決してヴアチカン宮には足を入れないと言ふ。彼等はラフアエルを馬鹿同樣に考へてゐる。何故といふに、ラフアエルは一權威だからだ。而も彼等はどんなにやつたところで、その想像力が『泉の傍の少女』（註、官費でローマに行くロシア畫家は多くこの題を選ぶ。）以上に出ない程度の、實に胸の惡くなる無能連中ばかりなのだ。そしてその少女だつて描いたやつの引き寫しだ。あなたの意見に從へばこれが立派な畫家ですか、え？」

「僕の考に依れば、」バザロフは答へた。「ラフアエルは一文の値打ちもありません。あなたのおつしやるやうな畫家は矢張り同じです。」

「ひや、ひや！ お聽き、アーカディ……現代の青年が意見を吐くのはこんな風にするんだよ！ さう思つて見ると、青年たちがあなたに從はないではゐられない筈ですな！ 昔は、若い人間は勉强しなければならなかつた。間拔けと言はれたくなかつたから、好き厭ひに係はらず働かなければならなかつたのです。然るに今は『世の中の事は凡て愚だ』とさへ言つてゐればいい。それで手品は首尾よく行く。青年は喜んでゐるさ。そして確かに、彼等は以前單に馬鹿正直だつたんだが、今は突然虛無主義者になつたのだ。」

「あなたの、個人的威嚴の尊い感覺も滅茶滅茶になりましたね。」

バザロフは冷やかに言つた。アーカデイは激昂して眼を輝してゐた。そして言つた。――

「議論が深入り過ぎましたね。打ち切る方がいいと思ひますよ。若しあなたが、現代の生活樣式、家庭、乃至社會生活に於て、全部的破壞を要しないやうな一制度を示して下さるなら、僕も充分御意見に賛成するつもりでをりますよ。」とアーカデイは立ち上りながら言つた。

「そんな制度なら幾らでも示して吳れる。」とパヴエル・ペトロウイツチは叫んだ。「幾らでも！ さあ――例へば組合だ。」

冷やかな微笑がバザロフの唇に浮んだ。

「はゝあ、組合に就いては弟さんとお話しになる方が宜しかつたでせう。實際に於て組合がどんなものか、――その共同保證とか、規律とか、その他の樣子を、弟さんは今までに屹度見て來られたでせうからね。」

「ぢや家庭だ。吾々百姓の間に存在する家庭だ。」とパヴエル・ペトロウイツチは叫んだ。

「その問題だつて詳細に入らない方があなたのために宜しくはありませんか。養女を選ぶ家長のあらゆる利益をお悟りになりませんか？ パヴエル・ペトロウイツチ、僕の言葉を容れて二日ばかりこのことを考へて下さい。直ぐには恐らくお解りになりますまい。現代のあらゆる階級を通じて、その各々に就いてよくお考へ下さい。その間に僕とアーカデイとは……」

「何も彼もを笑ひごとにしてしまふんでせう。」

パヴエル・ペトロウイツチは口を挿んだ。

「いや、蛙の解剖をやらうといふのです。さあアーカデイ。皆さん失禮いたします！」

二人の友人は立ち去つた。二人の兄弟は取り殘されて、暫くは互ひに顏を見合してゐるきりであつた。

「現代の青年はつまりあゝしたものなんだ！ あゝいふのが吾々の後繼者なんだ！」とパヴエル・ペ

トロウイツチは言つた。

「吾々の後繼者ですつて！」ニコライ・ペトロウツイチは氣のない微笑を浮べて兄の言葉を繰り返した。彼は議論の間中、いばらの上に坐つてゐる思ひで、どうすることも出來ず、時々そつとアーカディの方を惱ましい心持で眺めやるだけだつた。「兄さん、私が何を思ひ出したか解りますか？　昔私は氣の毒なお母さんと議論したことがあります。お母さんは怒つて私の言ふことに耳を藉しません。それで遂に私はかう言ひました。『お母さん、無論あなたは私のいふことが解りますまい。あなたと私とは時代が違つてゐるんですから。』するとお母さんはひどく怒つてしまひましたけれど、私は『どうにも仕樣がない。こいつは苦い丸藥だ。が、お母さんは呑まなきやならん』と思ひましたよ。ねえ、今度は吾々の番が來たんです。そして吾々の後繼者が、『あなたの時代は違ふ。苦い丸藥でもお呑み。』と、かう言ふわけです。」

「お前さんは何よりも餘り寬大すぎるよ、」とパヴエル・ペトロウイツチは答へた。「私は反對にかう信じるよ、お前さんや私は、ああした若い連中よりも、ずつと正しいのだ。ただ吾々は昔流儀の言葉で物を言ひ、そしてあんな傲慢な考を持つてゐないきりさ……今の世の中の若い連中がどんなに空威張りをすることとか！　まあ彼奴等の一人に訊いて御覽よ、『赤葡萄酒にするか、白葡萄酒にするかい？』と。その男は『赤を飮むのが習慣です！』と、まるで全世界が、その瞬間に自分を注視してゐるかのやうな、鹿爪らしい格好をしながら低い聲で言ふに極つてゐるさ。」

「もうお茶はいりませんかしら？」

フエニチカは戸口に顏を出しながら言つた。今まで議論の聲が喧ましいので、客間に這入るのを躊躇してゐたのだつた。

「いや、サモワルは持つて行かせて。」とニコライ・ペトロウイツチは答へて、彼女の方に立つて行つた。パヴエル・ペトロウイツチは唐突に「御覽よ」と言つて自分の書齋に歸つて行つた。

十一

半時間の後、ニコライ・ペトロウイツチは庭へ出て、お氣に入りの阿亭へ行つた。彼は憂欝な思ひに襲はれた。第一に、はつきりと自分と息子との距離を悟つた。彼は一日毎に、その距離が甚しくなることを豫想した。冬の間、時々一日中をペテルスブルグで最新刊の本を讀んだことも無駄になつた。青年たちの談話に耳を傾けたことも、その熱した議論に首尾よく自分が口を入れて嬉しかつたことも無駄になつた。

「兄は吾々の方が正しいと言ふ。一切の虚飾を離れて考へるに、私は彼等が吾々よりも眞理の埒外にあると思ふ。然し同時に彼等のうしろには、吾々の持つてゐないもの、吾々よりも優れた或物が潜んでゐると感じられる。……それは若さといふものだらうか？ いや單なる若さぢやない。吾々よりも彼等の中に奴隷を使用してゐる者が少いといふ點に、彼等の優越があるのぢやないか？」

ニコライ・ペトロウイッチの頭は失望したやうに垂れた。彼は頭に片手を當てた。

「然し詩を棄てる」と彼は考へ續けた。

「藝術や自然に對して感情を持たない？」

そこで彼は、自然に對して何等の感情なしにゐることが出來るかどうかを試みるかのやうに、あたりを見廻した。

もう夕暮であつた。太陽は庭から五丁も離れた白楊の低い林にかくれて、その影がひつそりとした野原の上へ、ぼんやりと擴がつて來た。白い馬に乘つた一人の農夫が、低い林の傍の、暗い狹い小徑に沿うて行つた。その全體の姿が、蔭にゐながら、はつきりと肩の綴布までが見えてゐた。馬の蹄は勇ましく飛んだ。夕暮の光りが、遠方から矮林に落ちて、その茂みに差し込み、それが松樹かと思はれる位に、暖い光りを白楊の幹に投げてゐた。そしてその葉は暗綠に見え、その上方には日沒のため

に淡く染められた青い空が續いてゐた。燕は空高く飛び、風は全く止んでしまつた。蜂はライラックの花の中に、ゆつたりと眠たさうに羽ばたきをし、空に向つて突き出した一本の枝の上には、雲のやうに蚊の群が唸つてゐた。

「ああ、何て美しいのだらう！」とニコライ・ペトロウイッチは考へた。そしてお氣に入りの詩句が唇から飛び出しさうになつた。けれどもアーカディが貸して呉れた「物質と力」を思ひ出して默つてゐた。だが、矢張り孤獨の思ひのはかない慰めに耽つてゐた。

彼は夢想を好んだ。彼の田園生活が、その傾向を助長したのだつた。少し以前、彼はあの驛舍で息子の歸りを待ちながら、矢張りこんな風に夢想しつゞけたものだつた。けれども、その日以後、何といふ變化があつたことだらうか。當時は漠然としてゐた二人の關係が、今は明白に極つてしまつた。――而も何といふ極り方だ！ 又、亡妻のことが彼の思ひに上つて來た。然しそれは善良な家庭の主婦としての彼女ではなく、しなやかな身體つきの、無邪氣な審かしげな眼と子供らしい頸筋にしつかりと絡みついた髮とを持つた若々しい彼女であつた。

彼は初めて彼女に會つた時どんな風にしたか、それを思ひ出した。その頃彼はまだ學生だつた。彼は彼女と宿の階段でひよつこりと出會ひ、過つて彼女に衝き當つたので、謝らうとしたが、ただ「御

発よ」と呟くことが出來たきりだつた。ところが一方、彼女はお辭儀をして、微笑み、そして不意に脅えたやうに駈け出して行つたものの、階段の曲り角で、一寸彼の方を振り返り、眞面目な顔つきをして赤くなつた。それから後、あの最初のおどおどした訪問、呟くやうな口の中の言葉、遠慮がちな微笑、それからどぎまぎした狀、憂鬱、煩悶、最後に息詰まるばかりの喜び……そんなものは悉く、一體何處に消えてしまつたのだらう？ 彼女は彼の妻となり、彼は、この世で數人しか味はないやうな幸福な身の上となつたのだ……。「然し、」と彼は考へた。「さうした甘い最初の瞬間に、何故人間は、その底に横たはる永久の生を生きることが出來ないのだらうか？」

彼は自分の考を明瞭にさせようとはしなかつたが、その幸福な時を、記憶以上に強い何物かで保存したいと思つた。彼は彼女が自分の傍にゐるのを感じ、その温かさと、その呼吸とを身に覺えたいと思つた。そして、彼は自分の上に……。

「ニコライ・ペトロウイッチ。何處にゐらつしやいますの？」フエニチカの聲がつい耳の傍で聞えた。

彼は喫驚した。彼は惱みをも恥ぢをも感じなかつた。彼はフエニチカと亡妻との比較が出來ようとさへ決して思はなかつたけれども、彼女が、今自分を探しに來たことが悲しかつた。彼女の聲は、忽ち彼に、自分の半白の髮や、年齢や、現實の姿やを思ひ起させたのだつた……。

丁度彼が足を入れようとしてゐた、そして過去の漠とした夢の中から現れようとしてゐた、その美しい世界がふるい落されて、――消えてしまつた。

「此處にゐるよ、」彼は答へた。「行くよ。駈けてお出で。」

「奴隷を使つてる旦那らしいやり方がこれだな、」と彼は自分で思つた。

フエニチカは無言で阿亭の中の彼を覗いてから立ち去つた。彼は氣が附いて驚いたが、自分が夢想に耽つてゐる間に、もう夜になつてゐた。あたりは凡てのものが暗く、そしてひつそりしてゐた。フエニチカの顔は、眼の前に實に蒼白く光つた。彼は立ち上つて家の方に歸らうとした。けれども興奮した。氣持が直ぐには鎭まりさうにないので、彼はゆつくりと庭の中を歩き出した。時々は足下の土に見入つたり、と思ふと、星群の瞬いてゐる空を見上げたりした。疲れ切るまで歩いたが、彼の内心の苛立たしさは、惱ましいやうな、とりとめもない、悲しい苛立たしさは、矢張りこびり附いてゐた。ああバザロフは、若し、この時ニコライ・ペトロウイッチの胸の中に何が過りつつあるかを知つたならどんなに笑ふだらうか！ アーカディも彼を責めることだらう。彼、四十四の、地主であり、農業家である彼が涙をとめどなき涙を滲してゐるのだつた。この方が、ヴァイオリン・セロを彈くよりも百倍も悪いことだつた。

ニコライ・ペトロウイッチは歩きつゞけた。そして、家の中へ、あの灯の點いた窓口から嬉しさうに彼を覗いてゐる、小ぢんまりした平和な巣に、歸つて行く氣になれなかつた。彼は暗黑から、庭から顏に觸れる冷え冷えとした空氣から、その憂鬱から、苛立たしい思ひから、強ひて自分を切り離すことをしなかつた。

小徑の曲り角で彼はパヴエル・ペトロウイッチに出會つた。

「どうしたんだね？」とパヴエルは彼に言葉を掛けた。「お前は幽靈みたいに眞白だよ。身體がよくないんだらう。何故寢ないんだ？」

ニコライ・ペトロウイッチは簡單に氣持を說明して別れた。パヴエル・ペトロウイッチは庭の端れまで行つたが、彼も亦物思はしくなつて空を見上げた。然し彼の美しい黑い瞳には、星の光の外何も反射しなかつた。彼は理想主義者として生れてはゐず、そのフランス風の皮肉を帶びた、氣むづかしい乾燥した俗つぽい心は、夢想するにはふさはしくなかつた……。

「君、知つてるかい？僕は素敵なことを思ひついたよ、」と、その夜、バザロフはアーカデイに言つてゐた。「君のお父さんが今日、有名な親類から招かれたと話してゐたよ。而もお父さんは行かないんだ。吾々がその×——へ出掛けようぢやないか。その人は君をも招いてるんだらう。天氣はいいし、ぶらぶらやつて町を見物するとしよう。五六日外に出て愉快にやらうよ。」

「それで、又此處へ君は引き返して來るかい？」

「いや、親父の處に行かなきやならん。親父は×——から二十五哩位の處にゐるんだよ。僕は長く會はない、母にもさ。だから年寄りを喜ばせてやらなきや。皆僕によくして呉れたんだからね、殊に親父はさうさ親父といふ人間は恐ろしく愉快な男だよ。それに僕は一人息子なんだから。」

「長くゐるつもりかい？」

「さうでもない。屹度退屈するだらうよ。」

「歸りに又此處へ來て呉れるだらう？」

「解らんな……。それでと、どうするね？出掛けないか？」

「君が行きたいんなら、」とアーカデイは懷切さうに言つた。

彼は內心、友人の考を喜んだが、その感情を隱すのが義務だと考へだ。彼はどんなにしても虛無主義者ではなかつた。

その翌日、彼はバザロフと共に×——へ出發した。マリーノの家族の內で若い者は、彼等が去るの

を悲しんで、ダニヤシヤは泣きさへした、が、……老人連は、ほつと氣輕な氣持になつた。

十二

二人の青年が出掛けて行つた×――の町は或知事の管轄區域だつた。この知事は若かつたけれど、ロシア人にはちよいちよい見掛ける型で、進歩的であると同時に專制的な男だつた。彼は行政するやうになつた最初の年の内に、近衞の退役軍人で、邸宅や厩舍を持つてゐる貴族出身の將軍と喧嘩をしたばかりか、その屬官連とも喧嘩したのだつた。このために事件が生じて、ペテルスブルグの大臣が、信頼するに足る人物を派遣して、即座に實地を調査する必要があると認める程大袈裟なことになつた。その當局の選はマトヴイ・イリイッチ・コリアジンに落ちた。これは嘗てキルサノフ兄弟が監督を受けたことのある例のコリアジンの息子であつた。彼も亦「青年」で、つまりまだ四十を幾つも越してゐなかつたが、既に政治家たるの立派な道程にゐて、胸の兩側に勳章を吊るしてゐた。――その一つは、たしか、最高のではなかつたが、現に角外國の勳章であつた。彼が調査にやつて來た知事と同じく彼も進歩的人物と思はれてゐた。そして既に高官ではあつたけれど、所謂高官とは違つてゐた。自分自身を實に高く評價してゐて、見榮張ることは果てしもなかつたが、振舞は單純で愛想がよく、卑下し

て他人の言葉を聽き、初對面の人間なら「愉快な好人物だ」と誤解しさうな、如何にも善良な笑ひ方をした。然し重大な場合には、俗に言ふ己れの權威を如何に他人に感じさせるかを知つてゐて、「精力が根本だ」とか、「精力は政治家の第一要件だ」とか言ふのが癖だつた。而もこれにも係はらず、平生は他人の言ふなりになつて、どんな下らない成上り官吏でも彼を驅使することが出來た。マトヴイ・イリイッチは何時も非常な尊敬を以てギゾーのことを話し、彼が舊式家乃至ゑちがつた乾からびた俗吏に屬してゐないこと、そして、どんな社會生活の現象でも彼は見遁さないといふことを、あらゆる人間に印象させようと試みた。……さうした文句をよく彼は心得てゐた。彼は實は鹿爪らしい冷淡さを以てではあるが、現代文學の發達にさへ眼をつけてゐた。それは成人した人間が途上で子供の行列に出會つて時にはその後をついて行くやうな具合である。實際マトヴイ・イリイッチはアレキサンダア時代の政治家よりも進んではゐなかつた。一體アレキサンダア時代の政治家といふものは、「スウエチン夫人の夜會へ出席するために、コンデイラックの一頁を讀んでから出掛けたのだ。ただ、彼の方法は稍々違つた近代的だつた。彼は敏感な官吏であり、大僞善者であり、そしてそれ以上の何者でもなかつた。事件に對する特別の才能を持つてゐず、智力も持つてゐず、ただ己れの仕事を首尾よく處理する術を知つてゐるきりだつた。その點では彼は誰よりも優れてゐた。そしてたしかにその事が大

切な事に相違なかつた。

マトヴイ・イリイッチは愛想よくアーカデイを迎へた。それは得々としてゐる高官の特徴とも言ふべき冗談半分といふ風な處があつた。けれども彼は招待して從兄弟たちがやつて來ないことを聞いて驚いた。

「君のお父さんは何時も妙な人ですね。」彼は天鵞絨の立派な上着の房を弄りながら言つた。そして突然、きちんと釦を掛けた制服の若い役人を振り返つて、注意を凝らしたやうな風で、「何だね？」と訊いた。何時までも默つてゐたので、上下の唇が喰つついてしまつたその若い役人は、立ち上つて困つたらしく長官を眺めた。然しマトヴイ・イリイッチは部下を困らせたきりで、それ以上注意を拂はなかつた。現代の高官たちは概して、部下を困らせることが好きである。その目的を達するための手段は幾通りもある。その中でも、次のやうな方法は、大流行を極めたもので、イギリス人の言ふ「馬鹿にお氣に入りのもの」であつた。――高官は不意に全く聾のやうな風をして、どんな簡單な言葉も解らないやうになつてしまふ。例へば、

「今日は何日かね？」と高官は訊くとする。

「今日は金曜でございます、閣下、」と、こんな風に答へられる。

「え？　何て？　何と言つたのかね？」大官は熱心な注意を凝らして訊き返す。

「今日は金曜でございます、閣……下。」

「え？　何？　金曜が何だつて？　何だつて言ふのかい？」

「金曜でございます、閣……下。一週の内のその日でございます。」

「何？　君はそれを私に教へようとしてるのかね？」

マトヴイ・イリイッチは自由主義者だと考へられてゐたが、矢張りかうした高官の一人であつた。

「僕は君に知事の處へ會ひに行くやうに勸めるね。」と彼はアーカデイに言つた。「解つてゐるだらう、僕は權門に敬意を拂ふ必要があるといふ昔流の考から、そんなことを勸めるのぢやない。唯、知事は非常に上品な人間だし、それに多分君は此處の社交界に近づきを得たいだらうからね。……君は山だしの熊のやうな人間でもあるまい？　知事は明後日大舞踏會を開くんだよ。」

「あなたもその舞踏會に御出席ですか？」アーカデイは訊いた。

「僕に敬意を表するために開いて呉れるのさ。」マトヴイ・イリイッチは殆んど憫れむといふ調子で言つた。「君は踊るかね？」

「ええ、踊ります。上手ぢやありませんがね。」

「それや氣の毒だな。此處には綺麗な娘が幾人もゐるし、踊れないのは若い者の恥だよ。これも昔流の考から言ふんぢやないがね。僕は人間の機智が足にあるとは少しも思つちやゐないさ、然しバイロン主義は滑稽だ。あれは時代おくれだ。」

「でも伯父さん、バイロン主義からぢやないんですよ、僕は……」

「僕は君を此處の婦人たちに紹介しようよ。僕の羽振りの下に入れて上げる。」マトヴイ・イリイッチは彼を遮つて滿足さうに笑つた。「いい氣持ぢやないか、え？」

召使が這入つて來て、皇室領地の管理局長が來たと告げた。この人間は口の周圍に深い皺のある、優しい眼をした老人で、思ひ切つて自然を好んだが、殊に、彼の言葉を借りて言へば「あらゆる小さな勤勉な蜂があらゆる小さな花から、小さな賄賂を取る」といふ夏の日が好きだつた。アーカデイは暇を告げた。

彼は滯仕してゐる旅館に歸つてバザロフに會つた。そして知事の宅へ一緒に行くことを說き伏せるのに長い間かかつた。

「よし、仕方がない。」やつとバザロフは承諾して言つた。「物事は半分にすれば碌なことは出來ないんだ。僕たちは上流社會を見に來たんだから、見に行くとしようよ。」

知事は二人を愛想よく迎へた。然し椅子に掛けろとも言はず又自分でも掛けなかつた。彼は二六時中忙がしくて、朝の內から、きちんとした制服と、馬鹿に堅い襟飾とを着けてゐた。充分に飲んだり食つたりすることもなく、永久に用務にかかはつてゐた。彼はキルサノフとバザロフとを舞踏會に招待したが、招待すると言つて數分も經たない內に、又「招待する」を繰返した。そして二人を兄弟だと思つて、どちらもキルサノフと呼んだ。

知事の家から宿に引き返す途中で、突然スラヴ服を着た、背の低い男が、行き過ぎる馬車の中から飛び出して、「イエフゲニイ・ワシリイッチ！」と呶鳴りながら、バザロフの傍に駈け寄つた。

「おや君か、シトニコフ君。」

バザロフは矢張り敷石の上を步き續けながら言つた。

「どうして此處へ來たんだね？」

シトニコフは答へた。――「いや、全く偶然さ。」

彼は馬車の方に振り返りながら五六度手を振つて叫んだ。――「後から蹤いて來て吳れ！」そして溝を飛び越えながら、「親父が此處に用があつてね。それで僕を寄越したわけさ。……僕は今日君が來

たことを聞いてね、もう留守を訪問して來たんだよ……。(それは實際で、宿に歸つて見ると、片側にフランス文字、片側にスラブ文字でシトニコフと刷つた、端の折れた名刺が置かれてゐた) 君たちは知事の家からの歸りぢやなからうね?」

「なからうねと言つたつて始まらない。知事の家から眞直に來たのさ。」

「ああさうか! そんなら僕も訪問しよう……イエフゲニイ・ワシリイイツチ。僕を紹介して呉れないか、君の……その……」

「シトニコフ。それからキルサノフ。」

バザロフは立ち止りもしないで口の中で言つた。

「僕は非常に愉快です。いろいろお噂を承つてゐました……僕はイエフゲニイ・ワシリイイツチの昔からの友人で、まあ弟子といつてもいいのです。僕が再生したのはこの人のお蔭なんですからね……。」とシトニコフは並んで歩きながら、にやにや笑つたり、全く優し過ぎる手袋を急いで脫いだりした。

アーカディはバザロフの弟子を眺めた。手入れのいい小さな、然し氣持のいい顏には、興奮と同時に倦怠の表情が見えてゐた。窪んだ小さな眼は、固定した不安の影を漂はしてをり、笑聲も矢張り不安な、――例へば短い木のやうな笑であつた。

彼は續けた。「君は本當になさらないかも知れないが、イエフゲニイ・ワシリイイツチが初めて僕の前で、如何なる權威をも是認するのは正しくないと言つた時に……さうだ、自分の眼が開いたやうな感激を覺えましたよ。たうとう人間を發見した! と僕は思ひました。ついでだが、イエフゲニイ・ワシリイイツチ、是非君が知り合ひにならなければならん婦人がこの土地にゐるんだよ。その人はたしかに君を理解し得るし、君が訪問すれば本當に喜ぶだらうよ。その人のことは聞いただらうね。」

「誰のことだい?」バザロフは冷淡に訊き返した。

「ククシナ、エウドクシエ、エウドクシヤ・タクシンさ。特色のある、本當の意味で解放された、進歩的な婦人さ。君は知らないかね? 皆で直ぐ會ひに行かう。此處からつい二足ばかりの處にゐるんだよ。其處で食事をしよう。君たちはまだ食事前だらう?」

「ああ、さうだよ。」

「よし都合がいい。夫と別れたんでね、誰の世話にもなつてゐない婦人なんだよ。」

「綺麗な人かね?」バザロフは口を入れた。

「いや……さうは言へないね。」

「ぢや何で會ひに行かうと言ふんだい?」

「何、御冗談だね……シャンペンを飲まして呉れるよ。」

「さうか。實際的な人間は直ぐ解るね。時に君のお父さんは相變らず酒商賣かい？」

「さうだ。」

シトニコフは口早に言つて鋭い痙攣的な笑聲を立てた。

「うん、君は行くかい？」

「どうしようかな、本當に。」

「人間を見たいんだから、行き給へよ。」とアーカデイは小聲で言つた。

「それで君はいかがですか、キルサノフ君？　君も來て貰はなきや。吾々だけで行くわけには參りませんよ。」とシトニコフは言つた。

「でも吾々が一度に押し掛けては困るぢやありませんか？」

「構ひませんよ、ククシナはいい人間ですから。」

「シャンペンはあるね？」バザロフが訊いた。

「三本ある、保證するよ。」

「何に賭けて？」

「僕の首に賭けて。」

「君のお父さんの財布に賭けての方がいいな。だが、行くとしよう。」

十三

アウドテイア・ニキテイシナ、即ちエウドクシヤ、ククシンの住んでゐる、モスコウ式の小住宅は、近頃燒けた×――町の一つにあつた。ロシアの田舍町が五年毎に燒けることはよく知られた事實である。入口の、釘づけにした標札の上に、呼鈴のイボが見えてゐた。そして召使か友達かはつきり解らない、帽子を冠つた女が、廣間で皆に應接した。――このことはこの家の女主人が進歩的傾向を持つてゐることを著しく現してゐた。シトニコフはアウドテイア・ニキテイシナが在宅かどうか訊いた。

「あなたなの、ヴイクトル？」隣りの部屋から甲高い聲が聞えた。「お這入んなさい。」

帽子を冠つた女は直ぐに消えた。

「一人ぢやないんです。」

シトニコフは氣輕に外套を脱ぎながら、アーカデイとバザロフとを鋭く見やつた。外套の下には馭者の天鵞絨のジヤケツに似たものが見えてゐた。

「構ひません、お這入んなさい。」聲がかう答へた。

青年たちは這入つて行つた。この部屋は客間といふよりも仕事場といふ方がふさはしかつた。紙だの、手紙だの、大部分は切つてない厚いロシアの雜誌だのが、亂雜に、埃つぽい卓子の上に載つて、白い煙草の吹殼が方々に散らかつてゐた。革張りの長椅子にはまだ年の若い一人の婦人が半ば身體を凭せてゐた。稍々亂れた髮をして、絹の寛衣を纏ひ、きちんとしない重い腕輪を短い手首に嵌め、レースの手巾を頸に捲いてゐた。彼女は長椅子から立ち上り、黄色い貂皮で縁をとつた天鵞絨の肩掛をふはりと掛けて、

「お早うヴイクトル、」とだるさうに言ひながらシトニコフの手を握つた。

「バザロフにキルサノフ。」

彼はバザロフを眞似して不意にかう二人を紹介した。

「よく入らして下さいました。」ククシン夫人は答へて、圓い眼でぢつとバザロフを瞶めた。眼の間に寂し氣な、少し上向きになつた赤い鼻があつた。

「私はあなたを存じてをります。」と彼女は附け足して、彼の手をも握つた。

バザロフは眉を顰めた。この解放された女の小さな平凡な身體には嫌忌の感じを起させるものは何

もなかつたけれど、ただ顏の表情が相手に不快な氣持を與へた。「どうなすつたのです？ 空腹なんですか？ 氣持が惡いの？ きまりが惡いの？ 何をくよくよしてゐらつしやるんです？」と訊かないではゐられないやうな表情だつた。彼女もシトニコフも常に同じこの不安さうな容子をしてゐた。彼女は構端に構はない方だつたが、同時に無作法であつた。自分では善良な單純な女のやうに思つてゐたが、何時何を彼女がしても、他人には彼女が本當にしたいことをしたのではないと思はれた。彼女のすることは凡て、子供の言草であるが、目的があつてするのだつた。つまり單純でもなく自然でもないのだつた。

「さうさう。私あなたを存じてをりますよ、バザロフさん。」と彼女は繰り返した。（彼女は多くの田舎の、又モスコウの婦人たちに特有の癖——初對面の時から相手の姓を呼ぶ癖を持つてゐた。）「あなたはお煙草を召し上りますか？」

「煙草は結構ですね。」この時椅子に體を投げて足を空に浮かしてゐたシトニコフが口を入れた。「だが、それよりも御飯を頂けませんか。恐ろしく腹が空いてしまつたんです。それから、シャンペンの小瓶を持つて來させて下さい。」

「洒落者ね。」とエウドクシヤは言つて笑つた。彼女が笑ふと上齒の莖にゴムが見えた。「ねえ、さうぢ

やないでせうか、バザロフ。この人は洒落者ですわね？」

「僕は人生の慰安を好みます。それが僕の自由主義者であることの妨げにはなりませんからね。」シトニコフは鹿爪らしく言つた。

「いいえ、妨げになりますとも！」

エウドクシヤはかう叫んだ。けれども女中に言ひ附けて、御飯とシヤンペンとの用意をさせた。

「これに就いてあなたはどうお考へになりますか？　私の意見と同じでゐらつしやいませう？」

彼女はバザロフの方を向いてから言つた。

「いや。化學的見地から言つても、肉一片は麵麭一片に優りますよ。」バザロフは答へた。

「あなたは化學を研究してゐらつしやるんですか？　私も熱心なんですのよ。私は自分で或新しい組成物を發明した位なんですもの。」

「組成物を？　あなたが？」

「ええ、何に使ふんだとお思ひになりまして？　人形の首が落ちないやうにするんですの。御承知の通り私も實際的な人間なんですから。でもすつかり出來上つてはゐないんです。まだリービックを讀まなきやなりません。時に、モスコウ・ガゼットに載つたキスリアコフの婦人勞働に關する論文をお讀みでしたか？　あなたは婦人問題に就いて興味をお持ちでせうね？　それから學校問題にも？　お連れの方はいかがです？　お名前は？」

ククシン夫人は一つ質問をしては忘れてしまふ風で返事を待たず次から次へと質問を連發した。我儘な子供が乳母に物を言つてる調子だつた。

「アーカデイ・ニコライッチ・キルサノフと言ひます。何もしてゐない人間です。」とアーカデイは答へた。

エウドクシヤはくすくす笑ひ出した。「何て立派なお名前でせう！　おや、あなたは煙草をお吸ひにならないの？　ヴイクトル、私はあなたをひどく怒つてるんですのよ。」

「何で？」

「噂に依ると、あなたは又ジョージ・サンドを讃め出したんですつてね。あれは時代おくれの女で、何でもありませんよ。どうして皆は彼女をエマーソンなどと比較する氣になるんでせう！　敎育に就いても、生理學に就いても、何に就いても考を持つてはゐない。發生學のことなんか聞いたこともないでせうよ。今の世の中でね——發生學なしに何が出來るもんですか（彼女はかう言つて兩手を上に擧げさへした。）この問題に就いてはエリシエウイッチが何て立派な論文を書いてることでせう！　あの

人は天才的紳士ですわね。（エウドクシヤは男といふ場合に常に紳士と言ふのが癖だつた。）バザロフ、長椅子に、私の傍にお掛けになりませんか。多分御存知ないでせうけれど、私はあなたを大變おそれてゐるんですのよ。」

「何故ですか？　伺はせて下さい。」

「あなたは危険な紳士ですよ、さうした批評家なんですもの。まあ！　さう！　何て馬鹿なことを。田舍女のやうな物言ひをしてゐますわね。でも、私は本當の田舍女ですよ。私は自分で土地の管理をしてゐますの。でも執事のエロフエーは、全くクウパァのパスファインダァのやうな、それは珍しい型の男ですよ。實に自然なところが何かあるんです！　私はたうとう此處に住まうと思つて來ましたが、堪らない町ぢやございませんか。でもどうすることも出來ませんわね。」

「何處の町だつて同じことですよ。」バザロフは冷淡に應じた。

「利益が皆けちけちしてゐるんで、それが厭になつてしまひます。私は冬をモスコウで過す習慣でしたが……でも今では夫のククシンが向うにをりましてね、それに、モスコウも今では……どう言つたらいいか、御前のやうぢやありませんから。私、外國へ行かうと思つてゐますの。去年はもう出掛けるばかりのところでした。

「巴里へでせうね？」とバザロフが訊いた。

「巴里とハイデルベルヒへ。」

「ハイデルベルヒへは何故です？」

「どうしてそんなことをお訊きになりますの？　だつてブンセン（譯者註——獨逸ハイデルベルヒ大學教授。一八一一——一八九九）が其處にゐるぢやありませんか。」

　これには流石のバザロフも返答が出來なかつた。

「ピエル・サポッニコフ……あの人を御存知ですか？」

「いいえ、知りません。」

「ピエル・サポッニコフを御存知ない……あの人は何時もリディア・ヘスタトフの處にをりますよ。」

「その御婦人も知りません。」

「あの人が私を一緒に連れて行かうとおつしやいました。有難いことに、私は一人身ですし、それに子供もありませんし……何と今申しましたか、有難いことにはつて！　どうでもいいのですわ。」

　エウドクシヤは煙草の脂で赤茶けた指の間に、巻煙草を轉がして、それを舌に持つて行き、舐めて、喫ひ始めた。女中が盆を持つて這入つて來た。

「さあ、御飯が參りました。先に飲む者がよござんすか、ヴイクトル、瓶をお拔きなさい、それはあなたの役ですよ。」

「よし、それは僕の役だ。」とシトニコフは呟いて又例の痙攣的な笑聲を立てた。

「此處には綺麗な人がゐますかね？」

バザロフは三杯を干しながらから訊いた。

「ええゐますよ。」とエウドクシヤは答へた。

「でも皆頭の空つぽな人たちばかりでしてね、例へば私の友だちのオディンツオーフは綺麗です。けれど評判はどちらかと言ふと……。まあそれはどうでも構ひませんけれど、獨立した意見を持つてゐませんし、廣くもなし、何にもそんな風のものがないんです。敎育の制度を全部變へなきや駄目ですわね。そのことを私は隨分考へました。現代の女性は非常に惡敎育を受けてゐるんですからね。」

シトニコフが口を挿んだ。――「婦人たちはどうにもなりませんよ。彼等は輕蔑すべきもの、それで僕は充分に思ひ切つて輕蔑してやります。（輕蔑を感じたり現したりすることの出來るのはシトニコフにとつて何よりも愉快なことであつた。殊に彼は女性を攻擊するのが癖だつた。數ケ月後に彼が結婚して、その妻が單にデコルドレオソフ公爵夫人の生んだ女だといふ理由から、やたらに、その前に

ぺこぺこするのが自分の運命だつたとは、今少しも考へないで。）女の中には一人として吾々の話を理解し得る者はゐません。一人として吾々のやうな眞面目な男が噂するに足る者はありませんよ！」

「然し彼等は吾々の話を理解する必要が少しもないね。」とバザロフが言つた。

「誰のことをおつしやるんですの？」とエウドクシヤが口を入れた。

「綺麗な婦人です。」

「え？　あなたはプルードンの說を採用なさるんですか？」

バザロフは反り返つて答へた。――「誰の說も採用しやしません。僕自身の意見です。」

「あらゆる權威を呪ふんだ！」シトニコフは自分が奴隷のやうに崇拜してゐる人間の面前で、自己を大膽に表白する機會を得たので、嬉しさうに叫んだ。

「でもマコーレイだつて――」ククシン夫人は何か言ひ掛けた。

「マコーレイも呪ふんだ。」シトニコフは呶鳴つた。「あなたは馬鹿なお轉婆の味方をするんですか。」

「馬鹿なお轉婆の。いいえ、女性の權利の味方をするんですよ。それを私は自分の最後の血を絞つても擁護しようと誓ひました。」

「何だ！」と言ひ掛けたが、シトニコフは一寸口を切つた。「然し僕は女性の權利を否定するんぢやな

い。」

「あなたはスラヴ贔屓ですね。」

「いやスラヴ贔屓ぢやありません。尤も、勿論……」

「いえ、いえ！　あなたはスラヴ贔屓です。あなたは家長專制の擁護者です。手に鞭を持つてゐたいんです。」

「鞭は結構ですよ。」バザロフは言つた。「だが、最後まで絞つてしまつた。」

「何を？」エウドクシヤが遮つた。

「シャンペンを。敬愛するアウドテイア・ニキテイシナさん。シャンペンですよ。——あなたの血ぢやありません。」

「女性が攻撃されては默つて聞いてるわけに參りません。」エウドクシヤはつづけた。「それはひどい、ひどいと思ひますわ。攻撃なさる代りに、ミシェレの『戀愛論』をお讀みになる方がよござんすわ。それや面白い本だから。皆さん、戀愛を論じやうぢやありませんか。」

エウドクシヤは皺の寄つた、長椅子の上にだるさうに腕を垂れながら言つた。

急に沈默が續いた。

「いや、何故戀愛を論じなきやならんのです？」とバザロフが言つた。「然し今オデインツオーフ夫人とか……たしかさういふ名前でしたね。のことをお話しになつたが、それはどうした人なんです？」

「綺麗だよ、綺麗だよ！」とシトニコフが叫んだ。「僕が紹介しよう。賢くて金持で未亡人なんだ。惜しいことに開けてゐないんでね。このエウドクシヤともつと交際するといいんだ。エウドクシヤ、あなたの健康を祝しませう！　皆でコップを合せようぢやないか！　さあ來た！」

「ヴイクトル、いけない人ねえ。」

食事が長くかかつた。シャンペンが次々に空になつて、四本目にもなつた。……エウドクシヤは休みなしに喋り、シトニコフがそれに次いだ。結婚は偏見か罪悪か、人間は平等に生れてゐるかどうか、正しく言へば個性とはどんなものか、といふ風な問題を皆で論じ合つた。終りにはエウドクシヤが醉つて眞赤になり、肥つた指で、調子はづれのピアノの鍵を叩きながら、嗄れた聲を張り上げて、初めはヂプシイの唄、それから、セイムール・シツフの「グラナダはまどろみつつ横たはると」いふ唄を唄ひ始めた。シトニコフは頭にスカーフを捲きつけて、次のやうに唄ふ死んで行く戀人の眞似をした。——

「汝が唇とわが唇、

燃ゆる接吻に結び合ふ。」

アーカディは遂に堪へられなくなつた。

「皆さん、何だか癲狂院じみて來たぢやありませんか。」と彼は聲高に注意した。

會話の中へ稀に皮肉な言葉を交へてゐたバザロフは（彼はシャンペンの方へ餘計に氣をとられてゐた）大欠伸をして立ち上つた。そして女主人に挨拶もしないでアーカディと一緒に戸外に出た。

シトニコフも飛び上つて二人の後から續いた。

「うん。彼女を諸君はどう思ふね？」彼はバザロフとアーカディの左右にしつこく附き纒ひながら、「特色のある女だと僕が話して置いたらう。あんな女がも少し餘計にゐて呉れたらなあ！　彼女は、彼女の道で、最高道德の表現だよ。」

「すると君の親父のあの建物も最高道德の表現かい？」バザロフは通りかかりの酒屋を指して言つた。

シトニコフは又例の鋭い笑を洩らした。彼は自分の生れを非常に恥ぢてゐたので思ひも掛けずバザロフがかう親しく言つたのを、喜んでいいか怒つていいか解らなかつた。

十四

數日の後、知事邸で舞踏會が行はれた。マトヴィ・イリイッチはその時の本當の主人公であつた。例の貴族の將軍は皆に、そして一人一人に、ただ彼に敬意を表するためにやつて來たと話してゐた、知事は、舞踏の間でも、全くぢつとしてゐる時でも、相變らず用務を果してゐた。マトヴィ・イリイッチの態度の愛嬌は、丁度その鹿爪らしさと匹敵するものだつた。彼は皆に丁寧だつたが、或者には多少不快の影を、或者には多少尊敬の影を以て接してゐた。婦人たちの前では、「恰もフランスの騎士」のやうに、のべつに笑つたりお辭儀をしたり、絶えず高官らしい、心からの気持のいい快活な笑聲を立てた。彼はアーカディの肩を敲いて、大きな聲で「甥」と呼んだり、稍々古い夜會服を着たバザロフを、通りかかりにちよつとぼんやりした愛嬌のある横眼で見たり、「私は……」とか「非常に」とか言ふ以外には解らない不明瞭な然し氣持のいい獨語を言つたり、直ぐに顔の向きを變へるのだが、一寸シトニコフに指さして微笑したり、汚い手袋を穿め、下袴もなく、髮に極樂鳥の飾りをつけて出席したククシン夫人にさへ「ようこそ」と言つたりした。澤山の人が集まつて踊り手にも不足しなかつた。文官は大抵壁に沿うて立ち並び、軍人が熱心に踊り廻つた。殊にその中の或者は、巴里で六週間を暮して、「ツートト」だの「アァ、フイシトル・ル」だの「プスト・プスト・モン・ビビ」とかの囃し言葉を覺え込んでゐた。彼はさうした言葉を純巴里つ子らしく發音し、そして同時に、「シ・ジャヴェイ」を

「シ・ジョーレイ」「アブソリュートリイ」を「アブソリューマン」と言ふやうに言つたりして、例のロシア的フランス語で喋るのだつた。

アーカデイは、吾々の豫想する通り拙い舞踏をしたが、バザロフは少しも踊らなかつた。二人とも隅の方に席を占めてゐた。シトニコフもその中に交り顏に侮辱の色を浮べて失禮な批評を加へたり、無作法に周圍を見廻したりして、全く自分を享樂してゐるらしく見えた。

と不意に彼の顏は一變した。そしてアーカデイの方を向き、幾らか困つたらしい樣子で言つた。

「オデインッオーフが來たよ！」

アーカデイは周圍を見廻して、部屋の入口に立つてゐる黑服の背の高い婦人を見た。その態度の威嚴を持つてゐるのに彼は打たれた。彼女のあらはな腕は、しなやかな腰のあたりに優しく垂れ、艶々とした髮から、なだらかな肩にかけて、フシヤの輕い小枝が置かれ、稍々突き出た白い額の下には、鮮やかな瞳が、靜けさと聰明さとを――正に靜けさで、決して沈んでゐるのではない――湛へてゐた。そして唇には殆んど氣附かれぬ程度の微笑が浮んでゐた。その顏全體には或優美な力が籠つてゐた。

「君はあの人を知つてるんですか？」とアーカデイはシトニコフに訊いた。

「親しいのです。紹介して差上げませうか？」

「どうか……その舞踏が濟んでから。」

バザロフの注意もオデインッオーフ夫人に向いてゐた。

「一寸打たれる姿だね、他の連中とは違つてゐる。」と彼は言つた。

その舞踏が濟んでからシトニコフはアーカデイをオデインッオーフ夫人の處へ連れて行つた。けれどもシトニコフは彼女と少しも親しいらしくは見えなかつた。彼は言ふことにまごついたりした。彼女の方では彼を一寸驚いた風に眺めた。然しアーカデイの姓を聞くと彼女の顏に嬉しさうな色が浮んだ。ニコライ・ペトロウイッチの息子さんではないか、と彼女は訊いた。

「さうです。」

「私、お父さんには二度お眼にかかりましたよ。お父さんのお噂なら澤山聞いてをります。あなたとお近づきになつたのは嬉しく思ひます。」と彼女は續けて言つた。

その時、副官が馳けて來て、クワドリルを踊つて呉れないかと賴んだ。彼女は承諾した。

「ぢや舞踏なさいますか？」アーカデイは丁寧に尋ねた。

「ええ踊ります。何故踊らないとお思ひになりましたの？　餘りお婆さんだとお考へになりましたの？」

「どうしてそんなことを……そんなら僕とマツルカを踊つて下さいませんか。」

オディンツォーフ夫人は優しい微笑を見せた。

「ようございます」と言つて彼女はアーカディの顔を見た。それは彼女が優越感から來たものではなく、結婚した姉が若い弟を見るやうな眼であつた。オディンツォーフ夫人はアーカディよりも少し年が多く、二十九だつたが、彼女の前では、アーカディは自分を小さな生徒のやうに感じた。それで、彼等の年齢の差異はより多く見えた。

マトヴィ・イリイッチが彼女に近づいて、氣取つた態度と愛想のいい言葉とで話し掛けた。アーカディは傍を離れたが、矢張り見守つてゐて、クワドリル舞踏の間でも眼を離すことが出來なかつた。彼女は舞踏の相手に對してもこの高官に對しても同じやうに話して、首をやさしく曲げ、二度につこりと笑つた。彼女の鼻は、大抵のロシア人の鼻はさうであるが、少し厚かつた。そして顏色も冴え切つてゐるとは言へなかつた。而もアーカディは、今までにこんな魅力を持つた婦人に出會つたことはないと思つた。彼女の聲の響きは彼の耳から去らず、彼女の着物の襞までが他の連中のとは違つて、優しくふつくらしてゐるやうな氣がした。そして彼女の動きは特別のしなやかさと自由さとを持つてゐて、それが際立つて見えた。

アーカディはマルツカの最初の響きが始まつて自分が彼女の相手としてその傍に坐つた時、内心に稍々おどおどした氣持を覺えた。彼は話さうと思つて準備してゐたのだつたが、ただ手を髮の中に突つ込むきりで、何一つ言ふことが出來なかつた。然し彼の臆病と興奮とは長引かないで、オディンツォーフ夫人の落ちつきさに感化されてしまつた。そして十五分も經たない内に、彼は自由に、父のことだの伯父のことだの、ペテルスブルグや田舍での自分の生活だのを話してゐた。オディンツォーフ夫人は扇子を輕く開いたり閉ぢたりしながら、氣を入れて聞き入つてゐた。時々他の相手が彼女の處へ來ると彼の話が途切れた。その中でもシトニコフは二度も來て相手になつて呉れと賴んだ。彼女は引き返して又腰を卸し、扇子を取り上げた。その胸の鼓動は早まりもしなかつた。が、アーカディの方は、又喋り始めて、彼女の傍にゐること、彼女と語ること、そして彼女の眼や可愛らしい顏や、凡て美しい品のある賢さうな顏やを見てゐることの中に、無上の幸福を感じてゐた。彼女は口數を利かなかつたが、然しその僅かな言葉は、人生の智識を持つてゐることを示してゐた。アーカディは二三の彼女の意見から、この若い女が既に多くを感じ考へてゐる事實を知つた……。

「シトニコフさんがあなたを連れて來た時に傍に立つてゐらした方はどなたですか？」と彼女は訊いた。

「彼にお氣附きでしたか？」アーカディは答へた。「彼は立派な顔をしてるでせう？　私の友人でバザロフといふ男です。」

アーカディは「彼の友人」のことを説明した。オディンツォーフ夫人がバザロフの方を向いて、ちつと見守つた程、彼は詳しく、そして熱心に辯じ立てた。

その間にマルッカは終りに近附いた。アーカディはこの相手から離れるのが悲しかつた。殆んど一時間から彼女と一緒に、そんなにも幸福に暮したものを！　實際彼はその間中絶えず、彼女が自分の意を迎へて呉れたもののやうに、自分は彼女に感謝しなければならないもののやうに感じたのだつた。……然し若い心はその感情のために壓せられはしなかつた。

音樂は止んだ。オディンツォーフ夫人は立ち上りながら言つた。——

「有りがたう。あなたは訊ねて下さるお約束をなさいましたわね。あのお友だちと一緒に入らして下さいましな。何物をも信じない勇氣を持つてゐる方にお眼にかかつて見たいんですから。」

知事がオディンツォーフ夫人の處に來て、夕食の用意が出來たことを告げ、疲れた顔をして腕を差し出した。彼女は立ち去る時に、アーカディに最後の微笑と會釋とをした。（黒い絹の暗い光に包まれた彼女が、アーカディにはどんなに美しく見えたことだらう！）彼は低くお辭儀をして後姿を眺めやりながら、「この瞬間はもう僕の存在を忘れてしまつてゐるのだ、」と考へて、心の底に、哀れな屈辱の氣持を感じた。

「どうだ？」とバザロフは彼を隅に連れて行きながら、「愉快だつたらう？　あの女に就いて今或紳士が『あの女は、——いけない、いけない！』と話したよ。だが、僕はその紳士が馬鹿だと思ふ。君はどう考へる、あの女のことを？」

「そんな斷定は少しも解らないよ。」とアーカディは答へた。

「何だ！　何て下らないことを言ふんだ！」

「それなら言ふが、僕は君の言つた男が解らないよ。オディンツォーフ夫人は勿論非常に優しいが、態度が冷たく、嚴格で、丁度……」

「靜かな水のやうだ……と言ふのかい！」バザロフは遮つて、「それがびりびりするわけさ。君は氷が好きだらう？」

「恐らく僕はそれに關しての意見を述べることは出來まい。彼女は君と近づきになりたいと言ふので一緒に連れて來て呉れと僕に賴んだよ。」とアーカディは言つた。

「君がどんな風に僕を説明したか想像出來るよ。でも旨くやつて呉れた。連れて行つて呉れ。彼女が

何であらうとも、――單なる田舍の牝獅子だらうが、ククシナ流の進歩的婦人だらうか、兎に角、彼女は長い間見なかつた立派な肩を持つてゐるね。」

アーカデイはバザロフの皮肉に厭な氣がした。けれども、屢々さうであるが、アーカデイは友の持つてゐる厭な點を正面からは責めなかつた。

「何故君は婦人に自由な思索を與へることを喜ばないんだ？」と彼は低く訊いた。

「何故つて、君、僕の見たところでは、女の自由思想家といふやつは溜らないからね。」

此處で會話は打ち切られた。二人の青年は夕食後直ぐに歸つて行つた。二人はククシン夫人の神經的な惡意の籠つた、然し幾らか滅入つた笑を後から浴せ掛けられた。どちらからも少しの注意をも拂はれないので、彼女の誇りが非常に傷つけられたのだつた。彼女は誰よりもおそくまで舞踏場に殘つてゐて、曉の四時頃、シトニコフを相手にして、巴里風に、ポルカ・マツルカを踊つてゐた。この殊勝な光景が、知事邸の舞踏會での最後の出來事だつた。

十五

「この標本は哺乳類中何の部門に屬するか一つ見るんだね。」と、その翌る日、オデインツオーフ夫人

の滯在してゐる旅館の階段を登りながら、バザロフは、アーカデイに言つた。

「此處に何か惡いことを嗅ぎ出したよ。」

「君には驚くよ。」アーカデイは叫んで「何だつて！　君は、バザロフ、狹い道德を守つてゐて……」

「何て君はをかしな人間だらう！」バザロフは無雜作に彼の言葉を遮つた。「何か惡いことといふ僕の言ひ方は何かいいことといふ意味だつてことを知らないか？　無論僕にはその方が便利なんだよ。今朝君自身で、彼女が奇妙な結婚をしたと話して聞かせたぢやないか。尤も僕に言はせると、金持の老人と結婚するのは、決して奇妙なことぢやなく、よく領けることだよ。僕は世間の噂は信じない。然しあの物の解つた知事の話した通り、それが立派な根據を持つてゐるといふことは考へないね。」

アーカデイは返事をしないで部屋の扉を敲いた。制服を着た若い召使が二人を大きな部屋に案内した。部屋にはロシアの旅館の凡てがさうであるやうに、粗末な家具を並べてあつたが、花が一杯飾つてあつた。

直ぐにオデインツオーフ夫人は無飾の朝服を着て出て來た。彼女は春の日射しで餘計に若く見えたアーカデイは、バザロフを紹介したが、オデインツオーフ夫人が前日の通り落ちついてゐるのに、バザロフがまごついてゐるらしい容子を見て、ひそかに驚いた。バザロフ自身も自分のまごついてゐる

のに氣附いて、そのために苛々してゐた。

「おやおや！　高が女を恐れるなんて！」と彼は考へて、丁度シトニコフのやうに、安樂椅子に身體を投げ出し、平氣らしい風を裝つて話し始めた。オデインツオーフ夫人は、澄んだ瞳で彼をぢつと眺めてゐた。

アンナ・セルギエウナ・オデインツオーフはセルゲイ・ニコラエウイッチ・ロクテフの娘だつた。父のセルゲイといふ人は美貌と投機心と賭博癖とで名高く、ペテルスブルグとモスコウとで十五年間、素晴らしい景氣で評判を取つてから、後に、骨牌のためにすつかり家產を潰してしまひ、仕方なく田舎へ引込んだが、其處で二人の娘——即ち二十になるアンナと十二の子供だつたカテイアとに、ほんの僅かな財產を殘して亡くなつてしまつた。二人の母といふ人はH——公爵家の零落した血統から出てゐたが、夫がまだ盛んな時分、ペテルスブルグで死んでしまつた。父の死後、アンナの境遇は非常に苦しくなつた。ペテルスブルグで受けた立派な教育は、家事經濟の面倒——田舎のみぢめな暮しに適しなかつた。彼女は全く、近所に唯一人知つた人を持たず、唯一人相談の出來る人を持たなかつた。父親は近所の人と會ふのを避けやうとして、彼一流の態度で彼等を輕蔑してゐたが、彼等の方でも同じやうに彼を輕蔑してゐた。けれども、彼女アンナは狼狽しないで、直ぐに母の姉に當るアウドテイア・

ステパノウナ、H——公爵夫人に使をやつた。この伯母は卑しい傲慢な女で、アンナの家に來ると、一番上等の部屋を全部自分の用にあて、朝から晩まで、叱つたり零したりした。そして、青い緣取りの古びたぼろぼろの淺黄服を着て三角の帽子を冠つたむつつりした召使がお伴をしなければ庭へも散歩しないのだつた。アンナはこの伯母の氣まぐれに辛抱し續け、その間にだんだん妹の教育をして、既にそのまま一生田舎で暮すつもりになつてゐるらしく思へた。……然し運命は彼女の境遇を變へてしまつた。彼女はオデインツオーフといふ非常な金持の、四十六になる、ヒコポンデリイの、逞ましい、氣むづかし屋の、だが、馬鹿でもなく、性質も惡くない男に知られるやうになつた。この男は彼女に戀して結婚の申込をした。アンナは妻となることを承諾して六年間同棲したが、夫が死ぬる時、遺產の全部を讓られた。

アンナ・セルギエウナは夫が死んでから一年間ばかり田舎にゐたが、それから妹と一緒に外國に出掛けて、ドイツにだけ永く足を止めてゐた。が、彼女はそれにも飽いて、この×——の町から三十哩程離れた、氣に入りのニコルスコエに引き返して暮してゐた。其處に彼女は宏壯な、素晴らしい家具のある邸宅と溫室つきの美しい庭園とを持つてゐた。亡くなつた夫はその空想を滿足させるためには金を少しも惜しまなかつたのだ。アンナ・セルギエウナは、ほんの稀に町へ出掛けたが、それも大抵用

事の時に限つてゐて、而も長くは滯在しなかつた。彼女は田舍では好かれないで、殊にオデインツォーフとの結婚に就いては恐ろしい非難の聲が立つてゐた。あらゆる想像の限りが彼女の噂となつてゐた。彼女が父のごまかしの賭博の手助けをしたとか、悲しむべき結果を隱す必要があるので、立派な口實を設けて外國に行つたとか……そんな風なことが事實のやうに語られてゐた。

「解つたらう?」と、憤慨した噂は言ふ。「彼女は火の中をくぐつて來たのさ。」すると田舍の警句屋は、それに附け加へて「何だつてくぐつて來てるさ」と極つて言ふのだつた。かうした噂は全部彼女に聞えたけれど、彼女は耳を蔽つてゐた。――彼女の性格には獨立心と決斷力とが多分にあつたのだ。

オデインツォーフ夫人は安樂椅子に凭れながら、手を組んでバザロフの話に聞き入つてゐた。彼は何時もとは違つて、澤山喋つて、明らかに彼女の興味を惹からうと努めてゐた。――そのことは又アーカデイの驚きだつた。然しバザロフが目的を達しつつあるかどうかは見極めがつかなかつた。アンナ・セルギエウナの顏からは、どんな印象を受けつつあるのか察するのが困難だつた。彼女の顏は矢張り同じ優美な綺麗な表情を漂はしてゐたし、美しい瞳は注意力、それも靜かな注意力で輝やいてゐた。バザロフの無作法な態度は、惡い臭が調子外れの音樂のやうに、この訪問の最初の瞬間には、彼女に不快の感じを與へた。けれども彼女は直ちにバザロフが神經的になつてゐること、彼女に媚びてさへ

ゐることを見て取つた。彼女にとつては野卑といふもの以外に嫌ひなものはなかつた。而も何人もバザロフを野卑であると責めることは出來ない。

アーカデイはこの日多くの驚くべきことに出會つた。彼はバザロフがオデインツォーフ夫人のやうな聰明な夫人には自分の意見や說を述べるだらうと豫期してゐた。又彼女も、「何物をも信じない勇氣を持つた人間」の主張を聞きたいと言つたのだが、而もバザロフは、その代りに醫學だの、簡易療法だの、植物學だのに就いて話すきりだつた。

オデインツォーフ夫人は孤獨の時間を空費してゐないことが明らかになつた。彼女は立派な本を澤山讀んでゐたし、立派なロシア語で話した。彼女は會話を音樂の方に持つて行つたが、バザロフが藝術の價値を認めてゐないのに氣附いて、そつと又植物學の方へ話を戾して行つた、丁度アーカデイが國民的音樂の重大といふ問題に就いて大いに論じようとしかけてゐたのだつたに係はらず。オデインツォーフ夫人はアーカデイを弟のやうに取扱つた。彼女は彼の善良性と靑年らしい單純性とを認めたらしかつたが、それだけだつた。三時間ばかりの間、いろんな問題に就いて自由に、元氣のいい談話が續いて行つた。

二人の友は漸く立ち上つて暇を告げ出した。アンナ・セルギエウナは二人を誠意を籠めて眺めなが

ら、美しい白い手をどちらへも差し延べた。そして一寸思案してから疑はしげな、だが哀ばしい微笑を浮べて言つた。

「退屈なさるのをお構ひにならなければ、ニコルスコエへ入らつしやいませんか。」

「ああアンナ・セルギエウナ。それは非常に仕合せです……」とアーカデイが叫んだ。

「で、あなたは、バザロフさん？」

バザロフはただ頭を下げた。そこで最後の意外なことがアーカデイを待つてゐた。彼はバザロフが顔を赧めたことに氣附いたのだ。

「ねえ、君は矢張り同じ意見を持つてるかね、――つまり彼女が……」と彼は街に出てから訊いた。

「誰が言へよう？　どんなに彼女が立派か見るがいい！」

バザロフはかう答へたが、少し間を置いて、

「彼女は全く大公妃だ、王族だよ。ただうしろへ裳裾を曳いて、頭に冠を冠ればそれでいいのだ。」

「現代の大公妃はあんな風にロシア語を喋らないよ。」とアーカデイは注意した。

「彼女は浮き沈みして來たんだから、苦しいことも知つてるよ。」

「兎に角人を惹きつけるね。」アーカデイは言つた。

「何て素晴らしい體だらうな！」バザロフは續けた。「解剖臺の上に乘せて見たくて堪らないよ。」

「止し給へよ、御願ひだから、イエフゲニイ。それや餘りだよ。」

「よろしい、まあ怒るな。素敵だといふ意味だ。彼女の處に行かなきやならないね。」

「何時にする？」

「うん、明後日でいいぢやないか。此處にゐたつて仕樣がないからな。ククシンの處でシャンペンを飲んだり、君の伯父の、あの自由主義者の威張りぶりを聞いたりするのは溜らない。……明後日出發しよう。ついでだが、親父のゐる處も其處から餘り遠くないんだよ。このニコルスコエといふのはS――街道にあるんだから、ね？」

「さうだ。」

「よし。躊躇する必要なし。躊躇は馬鹿か、や、く、ざ、に委して置くべし！　本當に何といふ立派な體だらうな！」

三日の後、二人はニコルスコエへの道を馬車に搖られてゐた。日は輝やかしく、だが暑過ぎもしなかつた。光澤のいい驛馬は結び上げた尾を振りながら勢よく駈けつづけた。アーカデイは道を眺めながら、何故ともなく微笑した。

「僕を祝つてくれ、」とバザロフは俄かに叫んだ。「今日は六月二十二日、僕の守り神の日なんだ。神はどんな風に僕を見守つてくれるかね。今日は皆が家で僕の歸るのを待つて吳れてるんだ。」彼は聲を落して附け加へた。「うん、皆が待ちくたびれるだらう……構ふもんか！」

十六

アンナ・セルギエウナが住んでゐる田舍の邸宅は、露出した丘上に立つてゐた。そして、青い屋根と白い柱と、基督復活を現した伊太利風の壁畫が正面の入口にある、黄色い石造の教會から、餘り遠くない距離にあつた。その教會の壁畫の前景には、兜を冠つた色の黒い武士が寢そべつてゐて、殊にその圓い輪廓が目に立つた。教會の背後には、細長い村の家並が二列に續いて、藁葺屋根の間から、此處其處に煙突が突き立つてゐた。

邸宅は教會と同じく、アレキサンダァ式といふ名で知られてゐる様式を以て建てられてゐた。そして矢張り黄色く塗られ、綠の屋根と白い柱と、紋章つきの破風とを持つてゐた。建築師は故人オディンツオーフの意に依つてこの二つの建物を設計したので、故人は、自分でも言つてゐた通り、ぐうた

らな、出鱈目な設計にはとても辛抱出來ないのだつた。家は兩側ともに、古い庭園の暗い立樹で包まれて、刈り込んだ松並木が露臺の方へつづいてゐた。

二人は玄關で制服を着た背の高い二人の召使に迎へられた。一人が直ぐに執事を呼びに行つた。黒いフロックコオトを着た丈夫さうな執事は、直ぐ出て來て彼等を案内して、絨氈を敷き詰めた階段から、特別室に連れて行つた。其處には二人のために化粧道具と一緒に二個の寢臺がちやんと用意されてゐた。家中に秩序の保たれてゐることが一目でわかつた。あらゆる物が清潔で、あらゆる處に、大臣の客間にあるやうな特殊の微妙な香が漂つてゐた。

「アンナ・セルギエウナは三十分後にあちらへ來ていただくやうにとのことでございました。」と執事は挨拶した。「その間に何か御用でもございましたら？」

「何もありません。ただ、御面倒をかけて濟みませんがウオツカを一杯持つて來ていただけませんか。」とバザロフが答へた。

「承りました。」少し當惑したらしい容子で執事はかう言つて引き退つた。その靴は歩く度に、きゆつきゆつと音を立てた。

「大層なものだな！」とバザロフは言ひ出した。「君もさう言ふところだらう。彼女は大公妃だよ。何

も彼もさうだよ。」

「いい大公妃さ、初めて會見して直ぐに君や僕のやうな大貴族を家に泊りに來るやうに招くんだからね。」アーカディが應じた。

「殊に僕をね、未來の醫者であり、醫者の息子であり、村の寺男の孫である男をね……。君は知つてるね、僕の祖父は寺男なんだよ、あの大スペランスキイのやうにさ。」バザロフは一寸口を切つて唇を歪めながら、「兎に角この女は、いや、この婦人は快活にしてゐたいんだね。ところで夜會服を着なきやならんかな？」

アーカディは肩を振すぶつただけだつた。……然し彼も多少神經的になつてゐるのを意識してゐた。

三十分經つてからバザロフとアーカディとは客間に行つた。それは大きな天井の高い部屋で、特にいい趣味とは言へなかつたが、贅澤に飾りつけられてゐた。金の模樣のある眞紅の壁紙を貼つた壁に沿うて、どつしりした高價な家具が、普通の體裁で並べてあつた。その家具はオディンツォーフが、或友だちと、その友だちの代理人の酒商人との手を經て、モスコウで買つたものだつた。一方の壁の眞中どころにある長椅子の上あたりに、色の褪めた薄い髮の男の肖像が吊るしてあつたが、それは、この客たちを不快さうに眺めてゐるやうに思はれた。

「死んだ夫に相違ないよ。」とバザロフはアーカディに囁いて、鼻先を上に向けながら、「逃げ出した方がよいかな……？」

然しその時女主人が這入つて來た。彼女は輕い紗の服を着て、耳のうしろに滑らかに垂れた髮が、その澄んだ生々とした顏に少女のやうな表情を與へた。

「お約束を守つて下すつて有りがたうございました。」彼女は言ひ出した。「多少は滯在して下さらなきやいけませんよ。實のところ此處は惡い處ぢやありません。妹を御紹介いたしませう。ピアノをよく彈きますよ、バザロフさんには無關係でせうが、でも、キルサノフさん、あなたは音樂がお好きでしたわね。妹の他には老人の伯母が一人一緒に住んでゐますし、それに近々の人で時々骨牌遊びに來るお方が一人あります。私の仲間はそれきりですわ。まあ腰を掛けませうよ。」

オディンツォーフ夫人はこれだけの短い挨拶を、まるで暗誦してゐるもののやうに、特にはつきりと述べ立てた。それからアーカディの方を向いた。彼女の母はアーカディの母を知つてゐて、母がそのニコライ・ペトロウイッチに對する戀を打ち明けた位に親しかつたらしい。アーカディは亡くなつた母のことを熱心に話し出した。バザロフは寫眞帳をばらばらめくりながら、「何といふ馴れた猫を俺は今得ようとしつつあるんだらう！」と一人で考へてゐた。

青い首輪を穿めた美しい犬が客間に驅け出して來て、前足で床をばたばた言はせた。するとそれを追つて、黒い髪の、淺黒い肌の、稍々圓いけれど氣持のいい顔をした、小さな眼を持つた十八位の娘が這入つて來た。彼女は手に、花で一杯になつた籠をさげてゐた。

「これがカテイアです。」

オデインツオーフ夫人は彼女を顎で指しながら言つた。カテイアは輕い會釋をして、姉の傍に坐り花を弄り始めた。フイフイといふ名の犬は、客の二人に寄つて、代る代る尾を振りながら冷たい鼻頭を二人の手の中に突つ込んだ。

「それは皆お前さんが摘んだの？」とオデインツオーフ夫人は妹に訊いた。

「ええ。」カテイアは答へた。

「伯母さんはお茶に來るかしら？」

「ええ。」

カテイアが物を言ふ時、顔に、美しい、おどおどした、飾り氣のない微笑が現れて、眼は眉の下から或をかしみのある眞面目さを湛へて見上げるのだつた。彼女の全體は、まだ若くて發達してゐなかつた。聲、頬全體の色、白い掌をした薔薇色の手、稍々狹い肩など、凡てがさうだつた。……彼女は

絶えず顔を赤めたり息を切らしたりしてゐた。

オデインツオーフ夫人はバザロフの方を振り返つた。――「あなたは禮儀のために、その寫眞を見てゐらつしやるんですね、イエフゲニイ・ワシリイツチ。あなたに面白くはないでせう。こちらに入らしてはいかが、そして何か議論でもしようぢやございませんか。」

バザロフは近く寄つた。

「どんな問題に就いて議論なさらうとおつしやるんです？」彼は言つた。

「あなたのお好きな問題に就いて。前以て申し上げておきますけれど、私はひどく議論好きなんですのよ。」

「あなたが？」

「ええ。びつくりなすつたやうですね。何故ですの？」

「何故つて、私の見たところでは、あなたは落ちついた、冷やかな性質ですが、議論好きの人間は性急でなければなりませんよ。」

「どうしてさうまで早く私を判斷なさるお暇があつたのでせう？　第一に私は氣短かの上に頑固でございますよ、――カテイアにお聞きになつて御覽なさい。第二に私は直ぐに氣を動かしてしまひま

す。」

バザロフはアンナ・セルギエウナを見やつた。

「さうかも知れません。あなたが一番よく知つてらしやる筈ですから。して見るとあなたは、どうしても、議論がお好きなんですね。僕はこのアルバムの中からサクソニイ山脈の風景を見てゐましたが僕が興味を持ち得ないだらうといふ御說でした。さうおつしやつたのは僕が藝術に對する何等の感情を持つてゐないと想像なすつたからでせうが、實際僕は何の感情も持つてをりませんよ。が、かうした風景は、地理學上の見地から興味があります。例へば山脈の形成に對してですね。」

「失禮ながら、地理學者としてなら、本を、その專門の本をお讀みになる方が、こんな繪など御覽になるよりも早道ぢやございませんか。」

「繪は一目で、本の十頁に書かれてゐることを示して呉れます。」

アンナ・セルギエウナは一寸沈默した。

「ぢやあなたは少しも藝術的な感情を持つてゐらつしやらないんですね？」

彼女は卓子に肱を突き、さうすることに依つてバザロフの方へ顏を近づけながら言つた。

「どうしてその感情なしにゐられるんでせう？」

「おや、お伺ひしますが何のために必要なんですかしら？」

「はあ、少くとも人間を研究したり理解したりすることが出來るために。」

バザロフは微笑した。——

「第一に、生活の經驗がそれをします。第二に、分離した個々人の研究は下らない仕事ですよ。肉體的にも精神的にも凡て同一です。皆めいめいに、同じやうに作られた腦や脾臟や心臟や肺を持つてゐます。そして所謂道德性といふものも同じものです。わづかばかりの差異は論ずるに足りません。一個の人間の標本を以て、凡てを判斷するに足りるのです。人間全體は森の樹のやうなもので、如何なる植物學者も榛の樹を一本一本研究しようと考へませんよ。」

退屈さうに一時花を揃へてゐたカテイアは困つたらしくバザロフの方に眼を擧げた。そして彼の素早い無頓着な視線と合つて、耳許まで赤くなつた。アンナ・セルギエウナは首を振つた。

「森の樹ですつて。ぢや御說に從ふと、馬鹿と悧巧との間には、又善人と惡人との間には少しの差異もないんでございますね？」

「いや、差異はあります。病人と健康者との差異のやうなものが。肺病患者の肺はお互ひの肺と同じ狀態にはありません、但し同ぢやうに作られてはゐるんですよ。吾々は肉體的の病氣が何處から生じ

るか、かなり正確に知つてゐます。道徳的の病氣は、悪教育から、子供の時から頭に詰め込まれてゐる凡ての愚事から、社會狀態の缺陷から生じるのです。簡單に言ふと、社會を改造すれば、病氣はなくなりますよ。」

　バザロフはこの言葉を恰も「あなたが信じようが信じまいが自分にとつては同じことだ」と自ら考へてゐるらしい容子で述べた。そして部屋のぐるりを見廻しながら、ゆつたりと髯を撫でた。

「であなたは、社會が改造されれば、馬鹿や悪人はなくなると結論なさいますの？」アンナ・セルギエウナは言つた。

「兎に角ですね、社會組織が適當になれば、人間が馬鹿だらうと悧巧だらうと、又、悪人だらうと善人だらうと、凡てが絶對に平等になるんです。」

「解りましたわ。皆が同じ身分になるんですね。」

「正にさうですよ、奥さん。」

　オディンツォーフ夫人はアーカディの方を向いた。

「で、あなたの御意見は？　アーカディ・ニコラエウッチ。」

「僕はイエフゲニイに同意します。」アーカディは答へた。

　カテイアは眼瞼の下から彼を見上げた。

「私、喫驚いたしますわ、皆さん。」オディンツォーフ夫人は言つたが、附け足して、「でももつとお話したうございますが、今伯母が茶を飲みに參りますので、その方の相手をせねばなりませんから。」

　アンナ・セルギエウナの伯母のH——公爵夫人といふのは、拳のやうに押し潰した顔をした、痩せた少女で、黒ずんだ額の下に意地悪さうな眼を光らしてゐた。彼女は這入つて來て碌に客に會釋もしないで、幅廣の天鵞絨張りの腕椅子に掛けた。それには、彼女しか掛ける權利がないことになつてゐた。カテイアは伯母の足許へ足臺を置いた。が老婦人は有りがたうと言はず、カテイアを見ようともせず、ただ、その弱々しい身體全體を包んだ黄色い肩掛の下で、兩手を振つたきりだつた。彼女は黄色を好いて、帽子にも、綺麗な黄色のリボンが附いてゐた。

「伯母さん、お眠みになりまして？」とオディンツォーフ夫人は聲を掛けた。

「あの犬が又此處にゐるね。」老婦人は返事の代りにかう呟いて、フイフイがこそこそと二足ばかり自分の方に寄つて來るのを見て、「しつ……しつ」と叫んだ。

　カテイアはフイフイを呼んで戸を開けた。

　フイフイは散歩に連れ出して貰ふのだと思つて大喜びで駈け出したが、戸の外へ閉め出しを食つた

ので、引つ掻いたり鳴いたりした。老公爵夫人は叱つた。カテイアは部屋を出て行かうとした……。

「茶の用意が出來たらうと思ひます。」オディンツォーフ夫人が言つた。「入らつしやいませんか、皆さん。伯母さん、あなたもお茶に入らつしやいませんか？」

公爵夫人は物も言はず椅子を離れて客間から出て行つた。皆は彼女の後から食堂に這入つた。制服の小さな給仕が、ごとごと言はせて、卓子から、蒲團で蔽つた、公爵夫人用の腕椅子を引き摺つて來た。彼女はそれに納つた。カテイアはお茶を注いで、家紋の附いた茶碗を第一番に公爵夫人に渡した。老婦人はその中へ少し蜂蜜を入れた。（彼女は茶に砂糖を入れて飲むのは、罪悪であり贅澤であると考へてゐた。尤も、何一つ自分で支拂をしたことはないのだつた。）――そして、突然嗄れ聲で訊いた。

「イワン公爵は何と書いて來たのかね？」

返事をする者がなかつた。バザロフとアーカディとは直ぐに、家人が彼女を丁寧に取扱ひながらもその實、何等の注意をも拂つてゐないことに氣が附いた。

「あれは立派な家庭の出だからな」バザロフは答へた……。

茶が濟んで、アンナ・セルギエウナは皆で散歩しなきやと言ひ出したが、生憎小雨が降り出したの

で、公爵夫人だけを別にして、一同は又客間に舞ひ戻つた。

骨牌遊びに夢中になつてゐる近處の男がやつて來た。ポルフイリイ・プラトニッチといふ、頑丈な色の黒い、足が短い、非常に丁寧な、そして直ぐに笑ひ出しさうな人間だつた。矢張り主としてバザロフと話してゐたアンナ・セルギウェナは皆とプレフエレンスといふ勝負を古いやり方でやつて見ないかと言ひ出した。バザロフは「田舍醫師としての彼を待つてゐる義務を、前以て用意してゐるべきだから」と言ひながら同意した。

「氣をつけなきや駄目ですよ、ボルフイリイ・プラトニッチ、あなたを狙ひますよ」とアンナ・セルギエヴナは言つた。「それからカテイア、お前さんはアーカディ・ニコラエウイッチに何か彈いておあげ。この方は音樂が好きでゐらつしやるから。それに私たちも聞けるからね。」

カテイアは氣が進まないらしくピアノの傍に行つた。そしてアーカディは、たしかに音樂が好きだつたに係はらず、矢張り氣の進まない風で彼女の後に從つた、オディンツォーフ夫人が自分を追ひ出したやうに彼は感じた。そして、彼位の年輩の凡ての青年と同じく彼も戀の前兆に似た、或漠然とした壓迫的な感情が、心に波打つて來るのを覺えた。

カテイアはピアノの蓋を開けて、アーカディの顏を見ないで、低い聲で言つた。――

「何を弾きませう？」

「何でも、お好きなものを。」アーカディは無雜作に答へた。

「どんな曲が一番お好きでゐらつしやいますか？」とカテイアは先の態度を變へずに訊いた。

「古典的なものが、」とアーカディも同じ調子で答へた。

「モツアルトはお好きですか？」

「ええ、モツアルトは好きです。」

カテイアはモツアルトの短調の幻想曲を弾き出した。どちらかと言へば几帳面過ぎたけれど、實に巧みだつた。彼女は上向きに坐つて、身動きもせず、瞳を樂譜に注いで脣をきつと結んでゐたが、漸く曲の終りになつて、その顔は輝き出し、髮はほつれて、細い捲毛が淺黑い額に垂れ下つて來た。

アーカディは特に曲の最後の部分に打たれた。其處は、無雜作な韻律の人を魅する華やかさの中に殆んど悲劇的な惱みとも言ふべき悲しい喘ぎが突然襲つて來るところだつた。……然しモツアルトの音樂に依つて彼の內部に湧き起つた考は、カテイアの關するところではなかつた。アーカディは彼女を眺めながら、ただかう考へた。――「うむ、この若い娘は、ピアノも下手ではなく、顔も拙くはないな。」

カテイアは曲を弾き終ると、鍵から手を離さないで訊いた。

「もう澤山でございますか？」

アーカディは、彼女を煩すわけには行かないからと言つて、自分からモツアルトのことを話し出した。その曲は彼女自身が選んだものかどうか、誰かにすすめられたのかなどと尋ねた。カテイアは一口返事をしたまま、默りがちになつてしまつた。かうなると彼女は急には元の通りにならなかつた。その顔はそんな時に堅苦しくなつて、殆んど間の抜けたやうな表情になつた。彼女は臆病といふわけでもなかつたが、稍々姉に壓せられてゐた。その姉を彼女を教育しながらも、その事實に少しも氣が附いてゐなかつた。

アーカディはたうとうフイフイを呼んで、氣輕に振舞ふやうに見せるため、愛想よく笑ひながら、その犬の頭を撫でた。

カテイアは又花を弄り出した。

一方で、バザロフは負け又負けてゐた。アンナ・セルギエウナは慣れた風で骨牌を出した。ポルフイリイ・プラトニツチも勝ちもせず負けもせずといふところだつた。バザロフが損した額はわづかだつたけれども、餘り彼にとつては愉快でなかつた。

晩食の時にアンナ・セルギエウナは又話題を植物學に向けた。

「明朝散歩に參りませう、」と彼女はバザロフに言つた。「私は野生の花のラテン名や、部門を敎へていただきたいんですの。」

「ラテン名が何になります？」バザロフは訊いた。

「何事にも秩序が必要ですものね。」と彼女は答へた。

「アンナ・セルギエウナは何といふ立派な婦人だらう！」

二人は自分たちに宛てがはれた部屋に落ちついた時、アーカデイがかう言つた。

「さうだ、頭を持つた女性だね、それに人生を見て來てるよ。」バザロフが應じた。

「それはどういふ意味だね、イエフゲニイ・ワシリイツチ？」

「いい意味でだよ、いい意味でだよ、アーカデイ・ニコラエウイツチ。屹度彼女は自分の土地を立派に管理してるね。然し素晴らしいのは彼女ぢやなく、妹の方だ。」

「え、あのちつちやな色の黒い娘かい？」

「さうだよ。あのちつちやな色の黒い娘さ。彼女は新しくて誰の手にも觸れてゐない、臆病で無口で、その他どうでも言へる、敎育して發達させる値打ちがあるよ。何物かを發見し得るね。だが、姉

の方は、——古い代物だからね。」

アーカデイは返事をしなかつた。そして二人はめいめいに、頭の中で異常な物思ひに耽りながら寢床に這入つた。

アンナ・セルギエウナもその夜客たちのことを考へた。彼女はバザロフの洒落氣のないことや鋭いきつぱりした意見さへが好きになつた。彼の裡に彼女が嘗て見たことのない或新しいものを發見して興味を感じたのだつた。

アンナ・セルギエヴナは稍々變つた人間だつた。如何なる類の偏見も持たず、如何なる確信をも持たず、如何なるものにも屈したり逃げたりしたことがなかつた。彼女は多くの事物をはつきり見て來てもゐたし、多くの事物に興味を持つて來てもゐたが、何物にも滿足し切ることはなかつた。又實際彼女は滿足し切ることを望まなかつたのだ。彼女の智性は擊索的であると同時に無頓着でもあつた。その疑惑は忘却にまで薄らぐこともなかつたが。心を亂すまで強くなることもなかつた。若し彼女が金持でなく、一人身でなかつたならば、恐らく身を人生の爭鬪場裡に投じて、情熱といふものを知つてゐたでもあらう。然し、時々惱ましいことはあつても、人生は彼女にとつて平易であつた。そして日々を物思ひしながら、急ぎもせず落ちついて、ただ、稀に惱ましくなるきりで、暮してゐたのだつ

た。夢が時々、虹のやうな色どりとなつて眼前にさへ現れることがあつたけれど、その消え去つた時の方が安易な心持になれたし、又消え去つたことを悔いることもなかつた。彼女の空想は所謂因襲的道德の埓外にまで踊り出すことが實際あつたけれど、その時でさへ、彼女の血潮は、前と同じやうにその蠱惑的な美しい、澄み切つた肉體の中を流れてゐた。時々、芳ばしい湯から上つて、身體中がほてり、ぐつたりしてゐる時に、彼女は人生のはかなさ、無情、勞働、不幸、といふ風なことを考へ込むのだつた。……彼女の魂は不意の烈しい感情に充たされて、むづがゆくなつて來る。が、半ば開いた窓から風が一吹き這入つて來ると、アンナ・セルギエウナはぞつとして、悲しい殆んど腹立たしくなつて來た。そしてさうした時彼女が思ふことは——ただその恐ろしい風を遁れたいといふ念だけだつた。

戀することに成功しなかつた凡ての女性と同じく、彼女は、當てもなく何物かを欲してゐた。嚴密に言へば、彼女は何物をも欲してゐなかつた。けれども彼女には、あらゆる物を欲してゐるやうに思はれた。死んだオディンツォーフは彼女に殆んど辛抱出來なかつたと言つてもいい。(彼女は用意周匝な動機から彼と結婚したのだ。但し若しこの男を善良な人間であると彼女が考へなかつたならば、恐らく妻になることを承諾しなかつただらう。)そして彼女は、だらしのない、重苦しい、鈍感な、而も

女々しい者と彼自身が想像してゐる所謂男性といふもの全體に、ひそかな嫌厭の氣持を抱いてゐたのだ。嘗て一度、外國の某所で、美しいスエーデンの青年と會つたことがある。その男は騎士のやうな顏をして、廣い額の下に正直さうな青い瞳を持つてゐた。彼は彼女に力强い印象を與へたけれども、彼女が故國に歸るのを妨げはしなかつた。

「この醫者は不思議な人ねえ!」と、彼女は贅澤な寢床の中で、レースの枕に頭を支へ、柔かな絹夜具を被りながら思つた…。アンナ・セルギエウナは父親から、贅澤な氣質を多少承け繼いでゐた。彼女は罪の深い、だが人のいい父親を好いてゐたが、父親の方でも彼女を偶像化して、對等の人間のやうに何時も剽々しく冗談を言つたり、充分に信用して事を打ち明けたり、助言を聞いたりしてゐた。彼女は母のことを殆んど記憶してゐなかつた。

「この醫者は不思議な人ねえ!」彼女は獨りごとを繰り返した。彼女は身體を延ばして微笑し、兩手を頭のうしろに組んで、それから下らないフランスの小說を二頁ばかり走り見したが、それも閉ぢて、——やがて、その淸らかな芳ばしい床の中に、全く澄んだ冷たい眠りに落ちて行つた。

翌る朝アンナ・セルギエウナは食事後直ぐにバザロフと一緒に植物採集に出掛けて、晝飯前に歸つて來た。アーカディは何處へも出掛けないで、カテイアと一時間ばかり話して過した。彼は彼女と十

緒にゐても氣づまりにはならなかつた。彼女は昨日の曲を彈かうと自分から言ひ出した。然しオディンツォーフ夫人がやつと歸つて來た時、その姿を見ると、彼は胸の中に湧き起つて來る苦しさを覺へた。

彼女はやや疲れた足取りで庭から這入つて來た。その頰は赤くなつて、瞳は圓い麥藁帽子の下から、何時もよりも鮮やかに輝いてゐた。

彼女は指に野花の細い莖を捲きつけてゐた。輕やかなマントが肱のあたりに辷り落ちて、幅廣の鼠色のリボンが胸のところにかかつてゐた。バザロフは相變らず自信のありげな無頓著な容子で彼女のうしろから歩いてゐたが、その快活さうな、言はば馴れ馴れしくさへ見える顏の表情が、アーカディには氣に入らなかつた。

「お早う。」

バザロフは口の內でかう呟いて、自分の部屋に行つた。

オディンツォーフ夫人は氣の拔けたやうにアーカディと握手したが、矢張り立ち去つてしまつた。

「お早う！　か。まるで今日初めて會つた者同志のやうだな……」とアーカディは考へた。

十七

時は或場合には鳥のやうに早く飛び去り、又或場合には蟲のやうに這つて行くものである。然し人間はその時の早く過ぎるか遲く過ぎるかにさへ氣の附かぬ時が、特に幸福なのである。アーカディとバザロフとオディンツォーフ夫人の處で二週間を過したのは正にさうした狀態であつた。この結果には彼女がその家庭やその生活に、きちんとした秩序を持つてゐたことも與つて力がある。彼女はその秩序に自らを嚴密に適用させると同時に、他人をもそれに服從させた。日々のあらゆる事が必ず時間を極めてされることになつてゐた。例へば每朝、正八時に、家中の者が茶に集まり、茶の時から食事までの間は、皆が思ひのままの話をして、夫人その人は、執事や書記や支配人などと用向きを辨じた。（地所は貸附制度になつてゐた）晝食前に、又一同は集まつて、話をしたり本を讀んだりした。そして夕方になると散步や、骨牌や、音樂に時が費された。十時半にアンナ・セルギエウナは自分の部屋に退き、翌日の仕事の指圖を與へて置いて寢臺に這入つた。

バザロフはかうした物尺で計つたやうな、稍々虛飾的な、彼の言葉に從へば「レールの上を步いてゐるやうな」日常生活を好まなかつた。制服を着た召使や、鹿爪らしい執事は、彼の平民主義的な感

情と合はなかつた。そんなにまでするのなら、直ちに英國式に、燕尾と白ネクタイとをつけて食卓に就くがいいと彼は宣言した。彼は或時、この問題に就いて、はつきりした自分の意見を述べた。彼女の態度は、如何なる人間でも彼女の面前で自由に自己の意見を述べるに躊躇しないといつた風のものだつた。その時夫人はかう言つた。

「あなたの御意見から言へば、おつしやることは本當でございませう。又實際その點では私は少し貴婦人を氣取り過ぎてゐますでせう。けれども、田舍では秩序を立てて暮さなきや迚も住めませんの。退屈で溜らなくなりますよ。」

彼女はかう言ふわけで又一流の生活を續けて行つた。バザロフはぶつぶつ言つたが、然しアーカディと彼とが、そんなにのんき氣にオディンツオーフ夫人の宅で暮せたのは、矢張り、萬事が「レールの上を行く」やうな、その几帳面な生活方法のお蔭であつた。

ニコルスコエに來た最初の日から二人の靑年の双方に或變化が生じた。アンナ・セルギエウナに、意見は滅多に合はないに係はらず、興味を持たれてゐるバザロフは、嘗てない落ちつかぬ不安の徵候を見せ出した。彼は直ぐに機嫌を害ねて、人と話すことを厭がつたり、苛立たし氣に見えたり、何が祕密の憧憬に憑かれてゐるやうな具合に、一ケ所にぢつとしてゐることが出來なかつた。一方、アー

カディは、バザロフがオディンツオーフ夫人に戀してゐるに相違ないと極めて、優しい憂鬱に陷り出してゐた。けれども、この憂鬱は彼がカテイアと親しくなることの妨げにならなかつた。却つて彼女と餘計に親しくなるやうに、打ち解けた仲になるやうにした。

「彼女は俺の價値を認めないのかなア？　まあいいや！……でも俺を厭がらない一人の善良な娘がゐるんた。」と彼は考へた。そして彼の胸は又寛大の情緒の甘いことを知つた。カテイアは漠然と、彼が、彼女との交際に慰安といつた風のものを求めてゐることを悟つて、彼にも又彼女自身にも、半ば臆病な半ば打ち解けた交誼の無邪氣な喜びを拒まなかつた。彼等はお互ひにアンナ・セルギエウナの面前では話し合はなかつた。カテイアは、姉の鋭い眼の下では常に畏縮してゐた。そしてアーカディは、戀してゐる人間の常で、その情熱の對象物の傍にゐる時には、他の何物にも注意を拂ふことが出來なかつた。然しカテイアと二人きりだと幸福だつた。彼は自分がオディンツオーフ夫人に興味を持たせるだけの力がないことを知つてゐた。それで、夫人と二人きりで取り殘されると、おどおどして、どうしていいか解らなかつた。そして彼女の方でも彼に何を話していいか解らなかつた。つまり彼は彼女に對して餘りに若かつたのだつた。それと反對にカテイアに對してはアーカディは氣輕になつて、自ら進んで音樂や詩や小說や、その他、種々の問題に就いての彼女の印象を語らせた。が、彼はかう

した問題が自分自身にも亦興味のあるといふことを悟らないでゐた。カテイアは又憂欝を拂ひ退けやうとは試みなかつた。アーカデイはカテイアと、オデインツオーフ夫人はバザロフと各氣が合つて、そしてその結果、この二組は何時も少しの間一緒にゐては、別々の方向に行つてしまつた。殊に散歩の時さうであつた。カテイアは自然に憧れてゐたし、アーカデイも敢て自然を認めやうとはしなかつたが、兎に角愛してゐた。だが、オデインツオーフ夫人はバザロフと同じく、どちらかと言へば、自然の美に對して冷淡だつた。二人の友がかうして殆んど常に別々になつてゐることは、その結果を生じて二人の關係はやがて變り出した。バザロフはアーカデイに、オデインツオーフ夫人のことを話すのを止め、又その勿體ぶつたやり方の非難さへ止めてしまつた。カテイアのことは以前のやうに譽めてただ、彼女の感傷的な氣質を害ねないやうにと忠告したきりだつたが、その賞讃は慌しく、その忠告は無味だつた。そして概して彼はアーカデイに對して以前よりも口を利かなくなつた。寧ろ彼を避けるらしく、彼と一緒にゐては不安らしく見えた。

アーカデイはその事を凡て見て取つた。然しその觀察を胸の中に納めてゐた。

この「新しいこと」の眞の原因は、オデインツオーフ夫人に依つて、バザロフの心中に吹き込まれた感情であつた。それは彼を苦しめ狂ほしくさせる感情だつたけれど、若しも、誰かが彼の心中に起

りつゝあることの可能を、一寸ほのめかしたら、彼は嘲るやうな笑ひと皮肉な罵倒とを以て、それを否定しただらうと思はれる。バザロフは女性に對し、又女性の美に對して、大きな愛を持つてゐたが、理想に於ける愛、或は彼の言葉に依れば、ロマンチックな意味の愛は、狂氣の沙汰であり、許し難い怯懦であると呼んでゐた。彼は騎士的感情を、不具或は疾病のやうなものと見て、トーゲンブルグや、その他の[illegible]黨的詩人が精神病院へ送り込まれないのは不思議だと、幾度も言つてゐた。「若し女に心を動かされたら、努めて目的を達するがいい。然し目的を達し得ないなら、——背中を向けるんだ、——海には澤山魚がゐるんだから。」と彼は言つてゐた。

オデインツオーフ夫人は彼の心を動かした。彼女の周圍を包む風評、彼女の思想の自由と獨立、自分を好いて呉れてゐる事、さうした凡てが好都合のやうに思はれた。然し間もなく彼は彼女に對しては「目的を達し」られさうにないことが解つた。と言つて彼女に背中を向けることは、實に困つたことに、不可能なことを見出した。彼女のことを考へただけで彼の血は燃えた。その血を彼は容易に鎭めることは出來たけれど、他の或物が彼の心中に根を張りつゝあつた。それは、彼が嘗て許さなかつた、彼が常に嘲りつゝあつた、凡て彼の誇りが反抗しつゝあつた、その或物である。アンナ・セルギエウナとの談話に於て、彼は以前にも增して強く、あらゆる理想的事物に對する冷靜な輕蔑を示した

けれども、一人になれば、癪に觸ることではゐるが、その理想主義を彼は自分自身の中に發見したのだつた。そして彼は森に出掛けて大股に歩き廻りながら、道にある小枝を折つたり、彼女及び彼自身を吐息の下から罵つたりした。時としては納屋の乾草を積み上げた中に這入つて、厭でも眼を閉ぢ眠らうとして見たが、勿論、これは成功しなかつた。不意に幻想が眼の前に現れた。何時か彼の頭に攔まるだらうあのしなやかな腕や、彼の接吻を受けるだらうあの誇りかな脣や、ぢつと彼に注がれる優し味、――さうだ、優し味の籠つた智的な瞳やが、眼の前に見える。彼は頭をぐるりと廻して、再び憤怒の氣持が心内に湧き上るまでは、暫くの間我を忘れ果てるのであつた。彼はまるで、彼を嘲る惡魔に追ひたてられてゐるもののやうに、あらゆる「恥づべき」物思ひに囚はれてしまつた。時に、彼はオデインツォーフ夫人にも變化が起りつつあると考へた。彼女の顔の表情には何かしら特殊なものがあると思つた。恐らく……。然し此處まで考へると彼は足踏みをし、齒噛みをして、拳を握るのであつた。

然しバザロフの考は間違つてはゐなかつた。彼はオデインツォーフ夫人の心を動かした。彼女は彼のことをいろいろと思ひ煩つた。彼女は彼がゐなくても、退屈もせず、彼の來るのが待ち切れなくもなかつたけれど、バザロフの姿を見ると、常により元氣になつた。彼女は彼と二人きりになるのを好

んで、彼が彼女を苛立てたり、その趣味や、しやれた習慣やを攻撃する時でさへ、彼と話すのを好んだ。言はば彼女は同時に彼を探り、そして彼女自身を解剖したいと焦つた。

或日のこと、バザロフは彼女と庭を歩きながら、突然無愛想な聲で、もう直きに父の許へ行くつもりだと告げた。……彼女は顔色を變へた。それは恰も何物かが惱み、――彼女が暫くの間一體どういふ譯だつたかを自分で怪しみ考へた程の惱みを彼女に投げかけたやうであつた。バザロフは彼女を試して見るだの、彼女がどうするかを見やうだのといふ考があつてそんなことを言つたのではなかつた。彼は嘗て「芝居」をすることをしなかつた。實はその日の朝、彼は、子供の時分から世話をして呉れたテイモフエイッチといふ父の執事と會つたのだつた。テイモフエイッチは世間慣れた賢い小柄の老人で、髪は黄色く褪め、顔は日に燒けて、皺の寄つた眼の中には、いつも小さな涙の露を宿してゐた。彼は丈夫な鼠がかつた籃色の短外套をつけて、革のついた胴締をしめ、タールを塗つた長靴を穿き、今朝思ひも掛けずバザロフの前に現れた。

「やう、爺や。どうしてるね？」とバザロフは叫んだ。

「おなたはいかがで、イエフゲニイ・ワシリイッチ様？」

老人はかう言つて嬉しさうに笑つたが、それで顔中が忽ちに皺だらけになつてしまつた。

「何の用で來たんだね？　家から寄越されたのかい？」

「どういたしまして、」

　テイモフエイッチは口籠つた。（彼は出掛けに主人から受けた嚴重な注意を思ひ起した）

「町に用事がありまして參りましたので。そしてあなたのお噂を承つたものですから、ちよつと寄り道をいたしまして――その、お顏を拜見したいと思ひましたもので……御邪魔になるのも構ひませず！」

「何、嘘をお言ひでないよ。」とバザロフは人の言葉を遮つて言つた。「此處が町へ行く道だつて言ふのかい？」

　テイモフエイッチは、ためらつて返事をしなかつた。

「お父さんは御丈夫かい？」

「はい、左樣で。」

「お母さんは？」

「アンナ・ワルシエウナ樣も御同樣でゐらつしやいます。」

「二人共僕を待つてゐるんだらうね。」

　小さな老人は小さな頭を一方へ曲げた。

「はい、イエフゲニイ・ワシリイッチ樣、見ても胸が詰りまする程で。本當でございますよ。」

「よし、よし。もういいよ！　直ぐに歸るからつて言つとくれ。」

「畏りました。」

　老人はかう答へて溜息を洩らした。

　彼は家を出て、兩手で帽子を冠り、見すぼらしい馬車に乘つて、走り出した。けれどもその方角は町の方へではなかつた。

　その夜、オデインツォーフ夫人は自分の居間でバザロフと向ひ合つてゐた。アーカデイはカテイアのピアノを聽きながら、廣間を行つたり來たりしてゐた。公爵夫人は二階の自分の部屋に行つてしまつた。彼女は來客に辛抱の出來ないのがお極りだつたが、彼女の言葉に從へば「殊にこの新來の下卑者」に對してはさうだつた。皆のゐる部屋では、ただ厭な顏をしてゐるきりだつたが、自分の部屋に歸ると、女中の前で、帽子や假髮が搖れる程烈しく喚鳴ることに依つて、その欝憤を洩らした。オデインツォーフ夫人は、さうしたことをちやんと知つてゐた。

「どうして私どもの傍を去るとおつしやいますの？　お約束はどうなさいましたの？」と彼女は言ひ

出した。

　バザロフは喫驚した。

「約束ですつて？」

「お忘れになりまして？　化學を少し教へてやらうとおつしやつたぢやございませんか。」

「仕方ありませんよ！　父が待つてゐるんですから、もうぐづぐづしてることは出來ません。だが、ペルウズとフレミイの化學概論をお讀みになつたらいいでせう。立派な本で、はつきり書いてありますよ。」

「でも、あなたは、本が代りにはならないとおつしやつたぢやありませんか、……何の代りでしたから？　でも私の申し上げる意味はお解りになりますわね……覺えてゐらつしやいますか？」

「仕方ありませんよ！」とバザロフは繰り返した。

「何故お行きになるんです？」とオディンツォーフ夫人は聲を落して言つた。

　バザロフは彼女を見た。彼女は頭を安樂椅子の背に凭せて、肱まで露はな腕を胸の上で組んでゐた。穴を明けた紙の笠を掛けた一箇のランプの光の中に、彼女の顔は蒼白く見えた。たつぷりした白の寬衣は、すつかり彼女を、その柔かい襞の中に包んで、矢張り組み合されてゐる足の先さへ、殆んど隠

れてしまつてゐた。

「では何故此處にゐなければならんのです？」とバザロフは答へた。

　オディンツォーフ夫人は輕く頭を擧げた。

「何故とおつしやいますのね。あなたは私と一緒にゐて氣持がよくはなかつたんですの？　それともあなたが此處で惜しまれないと思つてらつしやいますの？」

「屹度さうだと思ひますよ。」

　オディンツォーフ夫人は一寸口を噤んだ。

「そんなことをお思ひになるのはお間違ひですわ。でもそのお言葉を、私、信じません。眞面目におつしやられるわけもなし。」

　バザロフは矢張りぢつとしてゐた。

「イエフゲニイ・ワシリイッチ。何故默つてゐらつしやるの？」

「だつて何を言つたらいいでせう？　人間は一般に惜しまれる價値のないものです。殊に僕の如きはさうですよ。」

「何故でせう？」

「僕は實際的な、興味のない人間だからです。話をするすべさへ知りませんから。」

「冗談をおつしやいますわね、イエフゲニイ・ワシリイッチ。」

「冗談は僕の習慣ぢやありません。僕が人生の優美な方面、つまりあなたがあんなにまで讃美なさる方面に、共通した物を何一つ持つてゐない、それを御存知ないんですか？」

オデインツォーフ夫人はハンカチの端を嚙んだ。

「おなたが好きなことをお考へになるのは構ひませんけれど、行つておしまひになつては私は退屈になりますわ。」

「アーカディは殘つてゐるでせうよ。」とバザロフは注意した。夫人は一寸肩を縮めて、

「私は退屈になりますわ。」と繰り返した。

「本當ですか？どつちにしたつて、あなたは長く退屈なさることもありますまい。」

「何でさうお考へになりますの？」

「何故つて、あなたは、自分の規則正しい生活が亂される時でなければ退屈しないとお話しになつたぢやありませんか。あなたは御自分の生存を、きちんとした動かし難い方則で處理してゐらつしやるんだから、退屈とか悲哀とか……凡て不快な情緒が這入ることはないんです。」

「では、あなたは私が動かし難い……言はば、そんなにきちんと自分の生活を處理してゐるとお考へなんですか？」

「先づさうですね。一例を擧げると、も五六分經つと十時になります、するとあなたは僕を追ひ出しておしまひになることが解つてゐる。」

「いいえ、あなたを追ひ出す氣はございませんよ、イエフゲニイ・ワシリイッチ。此處にゐらして宜しいんですの。あそこの窓を開けて下さいませんか……息が詰るやうですから。」

バザロフは立ち上つて窓を押し開けた。と、大きな物音を立てて窓は開いた。……彼はそんなにわけなく開かうとは思つてゐなかつたし、それに彼の兩手が顫へてゐたのだつた。柔かい、暗い夜が部屋を覗き込んだ。窓は眞暗といつてもよく、樹々は幽かな音を立て、清い外氣には爽やかな香が籠つてゐた。

「窓掛を卸してお座り下さい。」とオデインツォーフ夫人は言つた。「私はあなたがお去りになる前に、お話がしたいと思ひますわ。あなたのことで何かお聞かせ下さいませんか、あなたは御自分のことは何にもおつしやいませんでしたわね。」

「僕はためになる問題に就いてお話しやうとしてるんですよ、アンナ・セルギエヴナ。」

「あなたは非常に慎み深い方ですわね。でも私はあなたの身のまはりのことが知りたい。あなたのお宅、あなたがそのために私どもを見棄てて行かうとなさるそのお父さんのことが知りたいんです。」

「何故こんなことを言ふんだらう？」とバザロフは考へた。

「そんなことは少しも面白くはありませんよ。殊にあなたにとつてはね。吾々は詰らない人間なんだから……」と彼は聲高に言つた。

「あなたは私を貴族だと思つてゐらつしやるの？」

バザロフは眼を擧げてオディンツォーフ夫人を見た。

「ええ。」彼は大袈裟に鋭く言つた。

夫人は微笑した。「あなたは私をちつとも御存知ありませんのね。尤もあなたのお說に依ると、人間は全部同じやうなもので、研究する價値はないものかも知れませんけれども。私は何時か、私の身の上をお話ししたく思ひます。けれど先づあなたの方からお話なすつて下さい。」

「僕は殆んどあなたが解りませんよ。」とバザロフは繰り返した。「恐らくあなたのおつしやるのは正しい。恐らく、否、本當に、個々の人間は謎ですよ、例へばあなたです。あなたは社交界を避け、それに壓迫されて、二人の書生つぽを逗留させて下さる。あなたは、その智力と、その美とを持ちながら、

何だつてこの田舍に住んでゐらつしやるんです？」

「え？　何ておつしやまして？」オディンツォーフ夫人は熱心に言葉を入れた。「私の……美を持つてですつて？」

バザロフは眉を顰めて、「何でもありませんよ。あなたが田舍住みを何故してゐらつしやるのか解らないといふ意味です。」

「あなたはお解りにならない……でも、何とか御自分にそれを說明してゐらつしやる？」

「ええ……。あなたは氣儘で、氣輕なことがお好きで、その他のことには一切冷淡だから、それでこんな田舍で何時までも暮してゐらつしやるのだと、まあ、こんな風に察してゐますね。」

オディンツォーフ夫人は又微笑した。「私がどんなことにも動かされるといふことを、あなたは絶對にお信じ下さいませんのね？」

バザロフは眉の下から彼女をちらと見やつた。

「恐らく好奇心からでせう。それきりのことですよ。」

「本當に？　それで解りました、何故こんなお友だちになつたかといふことが。——あなたは丁度私のやうな方ですわ。」

「こんなお友達に……」とバザロフは息詰るやうな聲で言つた。

「ええ……ああ、私はあなたがお歸りになりたいといふのを忘れてゐましたわ。」

バザロフは立ち上つた。この暗い、きらびやかな、ひつそりした部屋の中央には、ランプが薄暗く點いてゐた。時々窓掛けが搖れて、隙を狙つてゐるやうな夜氣が流れ込み、そのひそやかな囁きが聞えた。オディンツォーフ夫人は身動きもしなかつた。が、彼女は次第に忍びやかな情に囚はれてゐた。

それは自然にバザロフにも傳はつた。彼は急に、自分が若い、美しい婦人と二人きりでゐることを意識した……。

「何處へ入らつしやるおつもり？」

彼女はゆつたりと言つた。

彼は何とも答へないで椅子に身體を埋めてしまつた。

「ぢやあなたは私をのん氣な氣まぐれな汚れた者だとお思ひになるんですわね。でも私は自分が不幸な者だといふことを、自分のことですからよく知つてをりますの。」と、彼女は何も窓から眼を離さないで同じ調子の聲で言ひ續けた。

「あなたが不幸？　どうしてです？　勿論下らない噂なんかを取り上げてゐらつしやるんぢやありま

すまい？」

オディンツォーフ夫人は眉を顰めた。彼女の言葉を彼がそんな風に解したことが彼女には苦しかつた。

「そんな噂は私の氣を動かしさへしません。そんなことで心を亂されるには私は餘りに誇りを持ちすぎてゐますよ。私が不幸だと申し上げるのは、……私が人生に對して何の欲望も何の情熱も持つてゐないからなんですの。あなたは信じないといふ風に私を御覽になる。あなたは絹づくめで天鵞絨の腕椅子に身を埋めてゐる『貴族』がこんなことを言ふと思つてゐらつしやる。私は事實を隱すことはいたしません。私はあなたのおつしやる慰安を愛します。同時に生きて行く欲望を餘り持つてゐないのですよ。この矛盾を出來るだけよく説明なすつて下さいませんか。でもこんなことは皆、あなたのお眼にはロマンチシズムだと思へますでせうね。」

バザロフは首を振つた。「あなたは健康で獨立して金持でゐらつしやる。その上に何が欲しいのです？」

「私が欲しいのは、」と言つてオディンツォーフ夫人は溜息を吐いた。「私はひどく疲れました、老ひ込みました。長いこと暮して來たやうな氣がします。さうです、私は老ひ込みました。」と彼女は絹の幅

を露はな腕にそつと引つ張りながら言つた。そしてバザロフの視線と合ふと、幽かに顔を顰めた。「私は過去にもう隨分澤山の記憶を持つてゐます。ペテルスブルグでの生活、富裕、それから貧乏、それから父の死、結婚、お極りの避け得ない旅行……さうした澤山の記憶がありますけれど、何一つ覺えてはゐない。そして私の前には、私の前には——長い、長い路がある、何の目的もなく……私はもう先に進みたくないのです。」

「そんなに失望してゐらつしやるんですか。」とバザロフは訊いた。

「いいえ、ただ不滿なのです。」とオデインツォーワ夫人は一語一語引つ張りながら答へた。

「何かに強く自分を打ち込むことが出來れば……と思ひますの。」

「あなたは戀をしたいと思つてゐらつしやる。」とバザロフは彼女を遮つた。「而も戀が出來ない。其處にあなたの不幸があるのです。」

オデインツォーワ夫人はレースの袖を弄り始めた。

「私が戀をすることが出來ないといふのは本當でせうか？」彼女は訊いた。

「出來ないと申し上げますね！ ただそれを不幸だと言つたのは間違ひでした。反對に、そんな災難に見舞はれた者は、誰でも餘計に憐れむべきものですよ。」

「災難ですつて、何が？」

「戀に落ちることが。」

「どうしてそんなことを御存知です？」

「人の話で聞きました。」とバザロフは腹立たしさうに答へた。

「あなたはふざけてゐるのだ。」とバザロフは考へた。「氣が病んで何もすることがないので私をからかつてゐるのだ。而も私は……」彼の心は實際粉々に壞されてゐるかのやうに思はれた。

「それに、あなたは恐らく餘り几帳面ですよ。」と彼は全身を前に曲げ椅子の端を弄りながら言つた。

「さうでせう。私の考は一切か、でなければ無といふのですものね。生命に對して生命を賭ける、こちらのものを投げ出す代りに、向ふのものをも投げ出させる。後悔もせず顧慮もしない、といふのです。それでなければ一切しない方がいい、と思ひますわ。」

「さうですか？」とバザロフは答へた。「立派なお言葉です。驚きますね、あなたがそんなに……あなたの欲しいものを發見しないといふことは。」

「ぢやあなたは自分の身を全部、どんな他人にでも與へることが容易いとお考へなんですの？」

「あなたが反省したり、待つたり、御自分に價値をつけたり、つまり御自分を高くしたりすると、容

易ぢやありませんね。が、反省なしに與へることは容易いことです。」

「人間が自分を豪くしないでゐれるでせうか？　若し私に價値がないなら、誰が私の獻身を必要とするでせう？」

「それは自分に關することぢやありません。自分の價値を發見するのは他人の仕事です。大切なことは、自分自身を捧げ得ることです。」

オデインツオーフ夫人は椅子の背から少し前に出て言つた。「あなたは何も彼も經驗なすつたやうなことをおつしやいますわね。」

「アンナ・セルギエウナ、御存知の通り、たまたまこんなことは凡て僕の性には合はないのですよ。」

「でもあなたは御自分を捧げることがお出來になりますか？」

「解りません。僕は大袈裟なことを言ふのが嫌ひです。」

オデインツオーフ夫人は何とも應じなかつた。で、バザロフも默つてゐた。ピアノの響が客間から流れて來た。

「どうしたんだらう、カテイアがこんなに遲くピアノ弾いてゐるのは？」夫デインツオーフ夫人が不思議がつた。

バザロフは立ち上つた。「さうだ、本當に更けてしまひましたね、お眠みになる時刻ですよ。」

「少しお待ち下さい。何故お急きになるんでせう？……一寸お話ししたいことがありますの。」

「何です？」

「少しお待ち下さい。」

十八

オデインツオーフ夫人は囁いた。彼女の瞳はバザロフを凝視した。それは特に注意して彼を檢査してでもゐるやうに。

彼は部屋の中を歩き廻つてゐたが、不意に彼女の傍に寄り、早口に「さよなら」と言つて、彼女がもう少しで聲を立てさうになる程强くその手を握り占めた。そして出て行つた。彼女はひしやげた指を脣に當てて呼吸を吹き掛けた。そして突然、衝動的に低い椅子から立ち上つて、恰もバザロフを引き戻したいとでも思ふやうに、足早に戸口の方に動いた。……女中が銀盆に載せた酒壜を持つて這入つて來た。オデインツオーフ夫人はぢつと立ち上つて、女中に出て行つてよろしいと言つてから又腰を卸して思ひに沈んでしまつた。彼女の髮の毛はほつれて肩の上に黑い渦を捲いて垂れてゐた。

ランプはアンナ・セルギエウナの部屋で何時までも點つてゐた。そして彼女は時々夜更の冷たさに痛みを覺える手を擦りながら、長い間ぢつとしてゐた。

バザロフは二時間位經つてから、靴を露に濡らし、髪を亂し不機嫌な樣子で寢臺に歸つて來た。アーカデイは手に本を持ち上着のボタンを咽喉まで留めて机に向つてゐた。

「まだ起きてるのかい？」と彼は、憫ましい調子で言つた。

「今晩はアンナ・セルギエウナの處に長くゐたね。」とアーカデイは返事の代りにかう言つた。

「ああ、君がカテイア・セルギエウナとピアノを彈いてゐる間中、一緒にゐたよ。」

「僕は彈きはしなかつた……」アーカデイはかう言ひ掛けて止めた。淚が眼に滲むのを感じたが、彼はこの皮肉な友の前では泣きたくなかつた。

十八

翌る朝のこと、オディンツォーフ夫人が朝のお茶に降りて行つた時、バザロフはコップに俯向いてゐたが、急に彼女の方をちらと見やつた。……彼女は何かで打たれたやうにバザロフを見返した。そして彼は彼女の顏が前夜よりも少し蒼白くなつたやうに思つた。

彼女は直ぐに自分の部屋に歸つて食事の時まで姿を見せなかつた。朝早くから雨が降つてゐて、散步に行くことも出來ないので、家族の者が皆、客間に集まつてゐた。アーカデイは新刊の雜誌を取り

上げて大聲で讀み出した。例に依つて、公爵夫人は、何かアーカデイがふさはしくないことでもしてゐるかのやうな驚きの表情を顏に浮べて、腹立たし氣に彼を睨んだ。然し彼は少しも彼女のことごとを意に介しなかつた。

「イェフゲニイ・ワシリイツチ、」とアンナ・セルギエウナは言つた。「私の部屋に入らして下さいませんか。……お尋ねしたいことがございますのよ……昨日本のことをおつしやつたでせう……。」

彼女は立ち上つて戶口に行つた。公爵夫人は、「私を御覽、どんなに私が吃驚してるか御覽！」とでも言つてゐるやうな表情をして、あたりを見廻した。そして又アカーデイを睨んだ。だが、彼は聲を高くして、傍らに座つてゐるカテイアと眼を交しながら、讀み續けた。

オディンツォーフ夫人は慌しく自分の書齋に行つた。バザロフも急いで後に從つたが、眼は擧げず、ただ、眼の前を辷つて行く彼女の絹服のさらさらと鳴る音を聞いてゐるだけだつた。オディンツォーフ夫人は前夜と同じ安樂椅子に座り、バザロフも同じく前夜の儘に座を占めた。

「あの本は何といふ名でしたかしら？」

彼女は一寸默つてゐた後で、かう言ひ出した。

「ペルーズとフレミイの化學概論です。」とバザロフは答へた。「それからガノオの實驗醫學論もおすす

めしたいと思ひますよ、この本の方が解說が明瞭で、教科書用としては一段です。」

オディンツォーフ夫人は手を伸ばして言つた。「イエフゲニイ・ワシリイッチ、お許し下さいな。實は私、本のことを話さうと思つて此處に來ていただいたのぢやありませんのよ。昨夜のお話の續きがしたかつたのです。あんなに急に行つておしまひになつたんですものね……うるさかつたのぢやありませんか……。」

「僕は何の御用にも立ちますよ、アンナ・セルギエウナ。然し昨夜は何を話しましたかしら？」

オディンツォーフ夫人はバザロフを横眼でそつと見た。

「たしか幸福といふことに就いて話してゐましたわね。私は私自身のことをお話いたしました。その序に、『幸福』といふ言葉を使ひましたわ。例へば音樂を聞いたり晴れやかな夕暮を樂しんだり、或は共鳴する人々と話し合ふ時でも、私には或無限の幸福の摸倣といふ氣がいたします、つまり、その無限の幸福といふのは私共の持つてゐる實際の幸福とはかけ離れて何處かに存在してゐるやうに思はれますが、これは何故でせうか？　何故でせうね？　それともあなたはこんな氣持をお感じにならないんでせうか？」

「御存知ですか、『幸福は吾々の在らざる所にあり』といふ諺を。」とバザロフは答へた。「それにあなた

は昨日御自分が不滿だといふことをおつしやつたぢやありませんか。たしかに僕にはそんな考の湧いたことはありませんね。」

「多分あなたには、そんなことが滑稽に見えるんですわね？」

「いいえ、僕には思ひ浮ばないんですよ。」

「本當に？　私はそれに就いてのあなたのお考が是非知りたいんですよ。」

「え？　僕には解りませんね。」

「お聞き下さい。私はすつかり打ち明けてお話ししたかつたのです。あなたは平凡な方ではなく、それにお若いし、凡てがこれからといふところです。――こんなことは申し上げる必要もありませんし、御自分でよく御存知のことですけれど、一體あなたは何をしやうと思つて準備をなすつてるのですか。どんな未來があなたを待つてゐるのです？　つまり、あなたが得やうとなすつてる目的は何でせう？　どの方面に進んで入らつしやいますか？　何を考へてゐらつしやいますか？　要するにあなたといふ方は何ですか？」

「喫驚しますね、アンナ・セルギエウナ。僕が自然科學を研究してることを御存知でせう。そして僕が……」

「よろしい、あなたが？」

「以前お話したぢやありませんか、僕は田舍醫者になるんだといふことを。」

アンナ・セルギエウナは堪へられないやうな身振りをした。

「何でそんなことをおつしやるんですの？　そんなことは御自分で信じてゐらつしやらない。アーカデイは或はそんなことをお答へになるかも知れないけれど、あなたは違ひますよ。」

「おや、どうしてアーカデイが……」

「お止しなさい！　あなたがそんな詰らない境遇に滿足されるなんてことがあるものですか。その上、あなたは何時も醫學を信じないとおつしやるぢやありませんか？　あなたが——大望を持つてゐらつしやるあなたが——田舍醫者になるなんて！　あなたは私を少しも信じてゐらつしやらないから追つ拂ふやうなことをおつしやる。でも御存知ですか、イエフゲニイ・ワシリイッチ、私にはあなたを理解することが出來ますんですよ。私は、あなたのやうに、貧乏で、大望を抱いてゐました。恐らくあなたと同じやうな試錬を經て參りました。」

「皆御尤もです、アンナ・セルギエウナ。けれども許して貰はなきやならないが……僕は如何なる場合でも極つて、自分のことを自由に話さない習慣があるんです。そして、あなたと僕との間には實に大

きな距離が……」

「どんな距離が？　又私が貴族だとおつしやるおつもりですわね。もうそれはお止し下さい、イエフゲニイ・ワシリイッチ。もう私は說明したことと思つてゐましたが……。」

「それは別問題としてもです、」とバザロフは遮つた。「吾々はどうにもならない未來のことを、何で話したり考へたりするんです？　若し偶然が何事かを起して呉れたら——それだけ結構です。そして若し何事も起して呉れなかつたら、少くとも吾々は豫め未來のことに就いて下らなく無駄話をしなかつたことを喜ぶべきでせうよ。」

「あなたは親しい會話を下らない無駄話だとおつしやるんですか？……それとも私を打ち明けるには足りない女だとお考へなんですか。私はあなたが私共を輕蔑してらつしやるのがよく解つてゐます。」

「輕蔑してはゐませんよ、アンナ・セルギエウナ。そのことは御存知でせう。」

「いいえ、私には何にも解りません……まあ、それはそれとして置きませう。私はあなたが將來の境遇に就いて語るのをお嫌ひになつてることを知つてゐます。でも。現在何があなたの心中に起つてるかといふことは……」

「起つてゐる！」とバザロフは同じことを言つた。「まるで僕が政府か、社會かのやうですね！　どつ